

地域連携推進機構年報

第4号

2017年3月

園田学園女子大学
園田学園女子大学短期大学部



大学生による政策提言発表会2017. 02. 17 於・尼崎市教育・障害福祉センター4階



地域志向教育研究報告会2017. 02. 11 於・本学AVホール



地域志向科目「大学の社会貢献」1学期授業風景



地域志向科目「大学の社会貢献」2学期授業風景



第5回まちづくり解剖学 若者の自殺予防
(2017.01.12)



「まちの自然みつけた！庄下川観察会」
(2016.08.23)



尼崎市文化ビジョンフォーラム 近松人形劇部
(2017.03.21)



学生地域連携推進委員会主催つながるパラダイス2
(2016.12.17)

平成28年度つながりプロジェクトの記録



地域連携推進機構 学生地域連携推進委員会 つなgirl

地(知)の拠点

尼芋奉納祭

活動報告



10月23日に尼崎貴布禰神社で尼芋奉納祭が執り行われ、つなGirl子ども向けブース「紙ねんどで尼いも」を出展しました。
昨年行われた「尼いもゆるキャラ選手権」で決まったゆるキャラの名前募集も行われ、お祭りは大盛況で幕を閉じました。

地域連携推進機構 地(知)の拠点

2016.05.21 15:00~16:00 @1号館 4階 講堂

学生の地域活動報告

本学で開催された、尼崎市市制100周年事業「星出彰彦JAXA宇宙飛行士講演会」で、市内の小中学生450名にイベントに参加していただきました。
総合健康学科の学生11名がボランティアで受付などを担当し、イベントをスムーズに進めるお手伝いをしました！

星出彰彦 JAXA宇宙飛行士 講演会

食育フェア2016 尼崎市学校給食展

平成28年10月29日 9:00~17:00 @尼崎市立すこやかプラザ

学生の地域活動報告

10月29日に行われた尼崎市学校給食展で、食物栄養学科の学生が食育SATシステムを用いて「食事バランスチェック」を行いました。

地域連携推進機構 地(知)の拠点

学生の地域活動報告

あまがさき環境オープンカレッジ エコあまフェスタ

2016.06.04 @塚口さんさんタウン

6月4日に塚口さんさんタウンで行われたNPO法人あまがさき環境オープンカレッジ主催の「エコあまフェスタ」でつなGirlがブース出展しました！

Super Sweets 2016 in Amagasaki

学生の地域活動報告

短期大学部生活文化学科 国際食文化コース(製菓クリエイトコース)では、4年前より学生ボランティアとしてSuper Sweets in Amagasakiに参加しています。
本年度は、尼崎市市制100周年ということで大きなイベントを開催することとなり、10月1日(土)に都ホテルニューアルカイクの宴会場にて、ケーキ教室と有名パティシエ参加のトークショーのお手伝いをしました。

地域連携推進機構 地(知)の拠点

学生の地域活動報告

2016年10月16日(日) 9:00~

尼崎の森中央緑地特設コース

当日は、ランナーの熱中症や脱水症予防のため給水係をしました。仕事はひたすら水をコップに入れて渡すこと。お水を渡す際、一生懸命走っているランナーに「頑張ってください」「ファイト!」と声を掛けると「ありがとう」とすがすがしい返事がたくさん返ってきました。

児童教育学科 3年 陸上競技部 柴田あずみ

地域連携推進機構 地(知)の拠点

学生の地域活動報告

自分たちで作った掃除道具で 掃除の楽しさを知ろう!

11月19日(土)、20日(日)1泊2日で兵庫県豊岡市にある園田学園女子大学大岡山グリーンキャンパスで、清滝小学校3年生の子どもたちと「自分たちで作った掃除道具で、掃除の楽しさを知ろう!」の自由学習のお手伝いを児童教育学科大江ゼミ3年生7名が行いました。

第53回 けやき祭 ~笑顔~ 同時開催イベント

学生地域連携推進委員会 つなgirl

元気な尼っこ大集合! つながる作戦Part3

第3回 キッズフェスティバル

10月22日 土曜日

受付時間 ◆10:00~15:00
イベント時間 ◆11:00~16:00

学生の地域活動報告

10月22日に行われたけやき祭で、つなGirl主催のキッズフェスティバルが行われました。
学内の学科や尼崎市内の団体などから12個のブースを出展していただき、約208名の子どもたちが遊びに来てくれました。

第7回 阪神つながり交流祭2016 in 園田学園女子大学

2016.12.3(土) 13:00-18:30

学生の地域活動報告

12月3日に行われた阪神つながり交流祭2016で、人間看護学科板元ゼミ4年生が「地域で自分らしく暮らすための高齢者支援プロジェクト」児童教育学科大江ゼミの3年生が「0歳~100歳がともに生きるく(の)びのびタウン」というテーマで活動報告をしました。

地(知)の拠点 地域連携推進機構

親子で楽しく!リラックス!

ママカフェクリスマス

日時: 2016年12月22日 10:00~12:00
場所: 3号館1階ラウンジ commons ワークショップエリア

児童教育学科影浦先生担当のつなガリプロジェクト4(地域子育て支援)の学生が、クリスマス会を行いました。
8月にお母さんたちに行ったアンケート結果の発表も行いました。

〈巻頭言〉

平成25年度から推進している文部科学省の地(知)の拠点整備事業「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」は、4年目に至っています。

先般、地(知)の拠点大学による地方創生推進事業委員会の平成28年度評価で、本学の取り組みは現行の努力を継続することにより、本事業の目的を十分に達成することが期待できるという評価が得られています。

本事業は、尼崎市や尼崎商工会議所等の行政・産業界と連携しながら、「健康づくり」「学校教育」「生涯学習」「子ども・子育て支援」の領域で、「まちの相談室」において地域のニーズを発掘し、地域と共に地域課題の解決に取り組む教育、研究のプログラムの開発を推進しています。さらに、課題解決のための教育改革やその体制の構築、そして学生と地域の人々が協働して地域で学び、地域に学び、地域へ学びの還元を行う循環型の経験値教育の具現化を進めています。

平成28年度には約350名の学生が地域をフィールドにして、学部学科を横断して取り組む「つながりプロジェクト」というPBL型の必修科目を開講しました。この科目は学生が地域で学ぶことにより、学部、学科の枠を超えた学生間のつながりができるとともに、受け入れ先の地域の方々の中で新たなつながりも生まれ、学生を核に地域で新たなコミュニティが形成され、地域が活性化されることをめざしています。教職員と協働していただいている地域の方々の大変な努力と支えにより、学生は地域での学びを通して、失敗と成功を繰り返し経験し、着実に経験値教育の具現化を推進することができました。

平成27年度からは、「地(知)の拠点大学による地方創生事業」に組み込まれ、地域社会のニーズに合った人材養成のための教育改革が強く求められています。本事業の推進により、主体的に、多面的に課題に向き合える女性を育成し、地域創生の一翼を担うことができると思っています。

本報告書は、平成28年度に実施しました「地(知)の拠点整備事業」の活動状況をまとめたものです。学内外の皆様にご高覧いただき、今後の本事業の趣旨並びに取り組みにさらなるご理解、ご協力を賜りますようお願いいたします。

平成29年3月

園田学園女子大学

園田学園女子大学短期大学部

学長 川島 明子

目次

巻頭言	1
目次	2
地域研究報告	3
授業における関心・意欲・態度の向上を目指すタブレット端末活用リーフレットの作成	4
子育て支援における地域と大学の協同連携の在り方 —立花地区子育てサークル交流会の実践をてがかりに—	9
小学校社会科と民俗学 —兵庫県の民俗文化財を中心に—	15
活動報告 No.1 授業における関心・意欲・態度の向上を目指すタブレット端末活用リーフレットの作成	33
活動報告 No.2 地域に向けた手洗い指導の拠点の構築	34
活動報告 No.3 地域資源を活用したまちづくりモデル構築のための基礎的研究	36
活動報告 No.4 地域と大学の連携・協働による子ども・子育て支援	38
活動報告 No.5 災害伝承を活用した地域防災教育プログラム構築に関する研究	40
活動報告 No.6 「健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について」	42
活動報告 No.7 庄下川の河川環境を利用した児童生徒のための親水プログラムの構築実施	44
活動報告 No.8 「尼崎市に住む高齢者のための運動交流プロジェクト実践と普及」	46
活動報告 No.9 学生を主体とした、地域学校への情報教育応援活動	48
活動報告 No.10 「生活」をテーマに、地域に根差した生涯学習プログラムの開発	49
活動報告 No.11 尼っ子のスポーツ振興プロジェクト	50
平成 28 年度〈まちづくり解剖学尼崎〉	52
学生活動	55
学生地域連携推進委員会～つな Girl 活動報告～	56
学生地域連携推進委員会会議議事録	57
つながり交流祭	63
政策提言発表会	64
フォーラム	65
地域歴史遺産としての怪異伝承 —『尼崎百物語』を起点に—	66
平成 28 年度 神戸大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学 3 大学合同報告会「プラットフォーム」報告	67
平成 28 年度 地域志向教育研究報告会	68
みんなの尼崎大学キックオフフォーラム みんなの尼崎大学 はじまるの会！	69
地域志向科目	71
つながりプロジェクト 2016 発表会	93
優秀卒業論文 要旨	94
彙報	101
地域連携推進機構 平成 28 年度統括会議（地域連携推進機構運営委員会）記録	102
地域連携推進機構 平成 28 年度外部評価委員会	106
平成 28 年度地域連携推進機構関連事業	108

地域研究報告



立花地区子育てサークル交流会(2017.02.08)

於・園田学園女子大学 スポーツセンター 2階メインアリーナ



陸上競技教室 (2017.01.28)

於・尼崎ベイコム陸上競技場

授業における関心・意欲・態度の向上を目指すタブレット端末活用リーフレットの作成

研究代表：堀田博史

研究協力者：小田桐良一，尼崎市立教育総合センター・民谷洋二，尼崎市立小田北中学校・宮田仁
尼崎市立名和小学校・吉田哲也， 京都外国語大学・野口聡， 関西学院大学・時任隼平

1 はじめに

現在，文部科学省や総務省は，平成 32 年までの 1 人一台のタブレット端末の ICT 環境整備に向けた様々な事業を進めています。尼崎市立の各小学校には，平成 27 年度にコンピュータ室にタブレット端末 40 台が導入されており，中学校は今後環境整備が進められる予定です。

本研究では，尼崎市立教育総合センター等と協働して，市内の中学校 1 校をモデル校に設定，昨年度までに整備したタブレット端末等の機器類のほかに新たにプロジェクタを導入して，生徒の授業への関心・意欲・態度を向上させる実践を行い，中学校での端末活用の普及を目指したリーフレットの作成を目標としました。

本稿では，中学校における 1～2 年生の 5 教科（保健体育，数学，理科，英語，特別支援教育）と，3 年生の各教科の基礎・基本事項のドリル教材でのタブレット端末を活用した授業実践の取り組みを紹介します。さらに，中学校の授業におけるタブレット端末導入が，生徒の関心・意欲・態度の向上にどの程度役立ったかを，1 年生保健体育・単元「マット運動」の授業をもとに考察します。

2 授業実践

タブレット端末活用リーフレットに掲載した教科毎における授業実践は，以下の通りです。

2.1 1 年生保健体育科（単元：マット運動）

単元「マット運動」の単元目標は，マット運動で，前転や後転を正しく行うことができ，自分が応用した技を発表することができる。また，マット運動で自分の身体動作のどこを改善すればよいかを発見し，改善できる，です。

この単元でタブレット端末の活用に工夫した点としては，グループ毎に生徒が自分の前転や後転の演技を動画撮影し，直後に動画を再生して振り返ることができるようワンタッチで撮影・再生ができるように設定したところにあります。また，体育館の大型スクリーンに常時，模範となる演技を動画再生しておき，生徒が演技のイメージをスムーズにもてるよう工夫しました。

タブレット端末を活用した生徒の反応としては，「自分では手先や指先を伸ばして美しい演技をしたつもりでも，直後に自分の演技を動画再生して見て，できていないことがすぐに分かり，次の演技で身体動作の何を意識しなければならないか目標がもてたのが良かった」や，「自分の気づかなかった演技の改善点をグループの他の生徒が指摘してくれてわかりやすかった」等，生徒の肯定的な反応が多くありました。

授業で効果があった点としては，生徒が自分の前転や後転の演技をタブレット端末で動画撮影し，直後に動画を再生して振り返ることにより，身体動作の改善点を容易に発見できたことが挙げられます。また，グループで各自の演技を検討し，他の生徒の良い点や自分の改善点が明確となりました。改善点としては，タブレット端末を手で持って撮影したため，一部の動画に手振れが起こりました。三脚の使用も検討することが今後の課題として挙げられます。



図 1 マット運動でタブレット端末を活用する様子

図1は、グループごとにタブレットで各生徒の演技を動画撮影し、演技直後に動画再生、自分の演技を振り返る場面や皆で動画を見て改善点を話し合う場面です。

(指導：山添康史先生)

2.2 2年生数学科(単元:一次関数のグラフ)

単元「一次関数とグラフ」の単元目標は、一次関数のグラフ $y = ax + b$ で、 a がグラフの傾き、 b が y 切片であることをグラフから読み取ることができる、です。

この単元でタブレット端末の活用に工夫した点としては、自作の一次関数のグラフシミュレーションアプリを活用し、 a や b の条件を変えると複数の一次関数のグラフが画面に表示されるようにし、生徒が発見学習的に傾きや y 切片などのグラフの特徴に気づけるように授業を構成したことです。さらに、自らタブレット端末でグラフを示し、小グループで話し合いながらアクティブラーニングを行えるように、アプリには正解や解説は載せないように工夫をしました。

タブレット端末を活用した生徒の反応としては、「タブレットがグラフを表示してくれるので、簡単に条件をいくつも変えることができ、考えが深まった」、「タブレットを使って自分の意見を言うほうが相手により伝わりやすいと思った」、「タブレットでグラフを書くと自分のペースで進めていけるのでよかった」等があり、タブレット活用授業に生徒が興味・関心を強く示している様子が見受けられました。また、タブレット上にグラフを書くことによって、生徒が今まで以上に主体的に考える時間が増えたことも見受けられました。

授業で効果があった点としては、従来の黒板とチョークだけの授業とは違い、一次関数のグラフがシミュレーションにより一瞬で表示されるために、生徒は a や b の条件を変化させながら、

いくつものグラフを同時に表示させて、つぶやき、積極的にグループ内で発言・交流をしていたことが挙げられます。また、グループで1台のタブレット端末を使用するため、画面サイズの制約があることが課題として挙げられます。



図2 グループ学習でグラフの様子を確認する様子

図2は、シミュレーションでグラフを示しながら解説と、グループ単位でグラフの様子を確認し合う場面です。

(指導：池田明広先生)

2.3 2年生理科(単元:寒冷前線と温暖前線)

単元「寒冷前線と温暖前線」の単元目標は、寒冷前線と温暖前線の違い、通過時の天気の変化を説明でき、その特徴を発表することができる、です。

この単元でタブレット端末の活用に工夫した点としては、自作のシミュレーションアプリによって、観測地点と前線の位置、天気の様子との関係が同時に連動し、動きのない紙面上ではなかなか把握しにくい前線通過時の天気に変化していく様子を確認できるようにしたことです。さらに、タブレット1台で観察と記録とを同時にするのは難しいので、タブレットは観察だけと割り切り、記録はホワイトボードに手書きするように工夫しました。

タブレット端末を活用した生徒の反応としては、自分の思った通りの位置に前線を動かすことができるので、前線が段々と近づいてきて天気が少しずつ変化していく様子を確認するなど、教材の意図に納得したようでした。また、また、天気

や風向、風力、気圧など、グラフ上の要素が多いので、班の中でそれぞれ分担して確認していくなど、自分たちで工夫をしている様子も見受けられました。

授業で効果があった点としては、前線の位置を自由に動かせるので、関係の特徴を見つけるまで何度も繰り返し試すことができることが挙げられます。ただ、タブレット端末の台数や画面サイズの関係で、6人班で使うには画面が小さく不便さがあり、誰かが操作中の間、手持ち無沙汰になる生徒もいることが今後の課題として挙げられます。



図 3 天気の変化をシミュレーションで観察をする様子

図 3 は、グループ単位でシミュレーションの前線上の雲や雨を配置しながら特徴を見つけ確認し合う場面です。

(指導：手嶋雅人先生)

2.4 2年生英語科（単元：I think that ～ の複文）

単元「I think that ～ の複文」の単元目標は、I think をつけて自分の考えを表現する、です。

この単元でタブレット端末の活用に工夫した点としては、有名なキャラクターの画像を多く用いて、有名人についての発表の際に、選択の幅を増やしたことにあります(図 4)。また、タブレット上で文字を書くことは難しいので、クイズは選択や線で結ぶ問題形式を扱ったことにあります。

タブレット端末を活用した生徒の反応としては、タブレット端末を 2～3 回使用した後の授業

であるために、端末の操作には慣れてきている様子でした。ただ、6人に1台のグループ学習にも関わらずタブレット端末にはのぞき見防止機能が付いており、問題や解答の共有が困難であるように見受けられました。

授業で効果があった点としては、画像を多用できるために、単語やフレーズをイメージとともに効果的に学習することが挙げられます。また、また、解答の進度を可視化することによって、生徒の個々に焦りを感じさせることが可能であることも挙げられます。



図 4 タブレット端末での設問の表示例

(指導：富岡直哉先生)

2.5 2年生特別支援教育（単元：英語に親しもう）

単元「英語に親しもう」の単元目標は、タブレットの福笑いアプリ（英語版）を活用し、ゲームで楽しみながら「right」「left」「up」「down」という表現を身につけることを通して英語に親しむ、です(図 5)。

この単元でタブレット端末の活用に工夫した点としては、タブレットの福笑いアプリでは、画用紙の福笑いとは違い、動かすのに失敗した場合は「undo」ボタンを押すことで一つ前の状態に戻したり、「reset」ボタンを押すことでゲーム開始の状態に何度でも戻すことができ、特別支援を必要とする生徒の集中力を途切れさせることなく、ゲームを楽しませ、英語に親しませることができるようにしたことにあります。

タブレット端末を活用した生徒の反応としては、画用紙の福笑いでは、目や耳など各部品を画用紙の上に置かず投げたり落としたりしていた

のが、タブレット端末の福笑いアプリでは、画面上に耳や目を配置することができ、完成した顔を他の生徒の作品と見比べて楽しんでいました。ゲームを通して英語の「right」「left」「up」「down」にも親しみを持ってました。

授業で効果があった点としては、タブレット端末の福笑いアプリを活用することにより、特別支援を必要とする生徒の集中力を途切れさせることなくゲームを楽しませ、英語に親しませることができたことが挙げられます。ゲーム後、日常生活で「right」「left」「up」「down」を口にする生徒も出てきました。



図 5 タブレット端末上での福笑いアプリの画面表示例

(指導：宮田仁先生)

3 授業実践（補充学習）

3年生の各教科（国語，社会，数学，理科，英語）において，国語の漢字，社会科の歴史年表，数学の公式，理科の元素記号，英単語など，それぞれの教科の基礎・基本となる事項を，タブレット端末のドリル教材で何度も繰り返し練習し，完全習得をめざすことを目標に，放課後の補充学習のドリル教材にタブレット端末を導入しました。

タブレット端末の活用で工夫した点としては，放課後の補充学習において，各生徒が自分の取り組みたい教科及び復習したい単元や項目を選択し，ドリル学習をマイペースでできるように環境を整えたことです。今回導入したドリル教材は，（株）ラインズのeライブラリ・アドバンスです。一日のドリル学習が終わると，間違えた問題を印刷し宿題として家庭に持って帰ることもできるようにもしました。なお，自宅にネットワーク接

続環境のある生徒は，自宅からもこのドリル教材をタブレットやパソコンからも利用可能にしています。

タブレット端末を活用した生徒の反応としては，「タブレット端末には，しおり機能があり，前回の続きから間違えた問題だけをピックアップして出題する機能が有り，効率的に学習を進めることができた。」や「紙の問題集やドリルだと，毎回，出題される問題の順序が一緒だが，タブレットのドリル教材は，毎回，出題順がシャッフルされていて，本当に記憶していないと答えられないので，実力が身についた。」等があり，生徒の反応は肯定的でした。

放課後の補充学習に，タブレット端末のドリル教材を導入し活用した結果，各教科の基礎・基本事項の習得率が向上したことが，校内実力テストの結果から分析できました。これは繰り返し学習で基礎・基本事項が定着したものと考えられます。課題としては，タブレット端末上のドリルなので，紙のドリルと違い，何ページ仕上げたかの量としての実感がわきにくいという生徒もいたことが挙げられます。タブレット端末のドリル教材では習得したページ数が増すとリンゴの木に実がなる等の工夫も見られますが，今後，紙のドリルとタブレット端末との併用も検討していきたいです。

4 質問紙調査の結果と考察

中学校の授業におけるタブレット端末導入が，生徒の関心・意欲・態度の向上にどの程度役立ったかを，今回は，保健体育科のマット運動の単元の最初と最後に生徒にアンケートを実施し，41名のデータを分析し考察してみました。

質問紙調査から「知識理解・意欲」，「思考・表現」，「協働学習」，「タブレット端末の活用」の4つの因子で，事前・事後の対応のあるt検定を行いました。それぞれの因子では有意差は見られませんでした。そこで，因子内の項目ごとに事前・

事後の分析を同じく行った結果、「思考・表現」の因子を構成する「体育の授業で発表するときには、自分の考えや意見を他の人や先生に分かりやすく伝えることができていると思いますか (t(40)=2.17, p<0.05)」、
「体育の授業では、じっくりと考えて自分の考えを深めることができていると思いますか (t(40)=2.25, p<0.05)」の2つの設問と、「協働学習」の因子を構成する「グループ学習に、進んで参加することができていると思いますか (t(40)=2.57, p<0.05)」の設問と、「タブレット端末の活用」の因子で構成する「カメラで撮った動きを見ることができたと思います (t(40)=2.05, p<0.05)」の設問において、有意な差が見られました。

詳細な分析が必要ですが、タブレット端末を活用した授業設計が、生徒の授業態度に何らかの変化を与えたと予想できます。

5 おわりに

国の施策である平成 32 年までの 1 人一台のタブレット端末導入に向けた足がかりとなるように、ICT 環境が未整備であった市内の中学校 1 校をモデル校に、普通教室に実物投影機やタブレット端末、プロジェクタを設置して、生徒の授業への関心・意欲・態度を向上させる実践を積み重ねてきました。

今回、これらの成果をリーフレットにまとめたことにより、市内の中学校で共有できるようになり、タブレット端末の活用イメージが少しでも広がることを願っています。

子育て支援における地域と大学の協同連携の在り方 —立花地区子育てサークル交流会の実践をてがかりに—

研究代表：影浦紀子

研究協力者：金岡緑、東本幸代、林理恵、中見仁美

1. はじめに

(1) 子育てサークルとは

子育てサークルは、子育て中の親たちが子どもとともに集まって遊んだり、学習や情報交換をしたり、日ごろの子育ての悩みをお互いに相談しあうことを目的とする子育てのグループやその活動のことをいう。

子育てサークルは、1970年代に地域環境の変化に危機感を感じ始めた母親たちが子どもたちを自然の中で遊ばせたいという思いで自然発生的な子育て運動としてはじめられた。1990年代後半から急速に広がり、特にエンゼルプランにおいて育児サークルの育成支援が打ち出されて、子育て支援の一環として注目されてからは、地域子育て支援センターや公民館事業としてサークルが組織される場合も見られるようになった。原田氏によると、子育てが難しくなってきた現代において子育てサークルや子育てネットワークなど「グループ子育て」は「希望の灯」であるという。つまり、グループ子育てはその中で親を育て、その結果として子どもを育てることであり、とくに子育てサークルなどのグループをつくりやすい乳幼児期に横のつながりをつくることで共同と安心・信頼の子育てにつながるという¹。

尼崎市において子育てサークルの育成・支援に直接関連している機関には、「こども家庭支援課」と「こども政策課」がある。子育てサークル育成事業を直接担当し、サークルの募集、事業の委託等を行っているのは、こども家庭支援課である。こども政策課は、子ど

も及び青少年に係る施策並びに少子化対策の総合的な企画、立案、調整などを行っている課である。このこども政策課には、「子ども子育て支援条例」に基づき、「子ども子育て支援条例」に基づき、「子育てコミュニティーソーシャルワーカー（CSW）」が配置されている。CSWは、この子ども子育て支援条例の理念に基づき、子育てサークル活動を側面から支援している。しかしその支援は、側面からといってもサークル活動におけるさまざまな要求や困難を丁寧に聴きとり、サークルとしての支援にとどまらない、地域の子育て家庭、母親への具体的な支援に及んでいる。本研究実践もこども政策課CSWの支援によるところが大きい。

(2) 尼崎市の子育てサークルの活動

さて、現在、尼崎市に登録されている子育てサークルの数は、平成28年4月時点で、25サークルある。平成24年に37サークルあったが、年々減少している(図1参照)。これは、尼崎市内のことだけでなく全国的な傾向でもある。

品川氏は、サークル解散の要因を運営や人間関係やメンバーの風土の問題として整理している²。子育てサークルの活動が減少の背景には、こうしたサークル内の問題だけでなく、出生数の減少、保育サービスの充実などの社会的な動きや、行政側のサポートの問題も考えられる。また子育て中の母親のニーズの変化もあるだろう。サークルの数が減っていく一方で、継続、発展しているサークルもみられる。たとえば尼崎市には、25周年を迎えて

子育てサークルから子育てひろばの運営など、地域の子育て支援の中心的な役割を果たしているサークルもある。メンバーである母親が自身の子どもが乳幼児期であった子育て時代を終えてもなお、地域の子育てのリーダーとして成長しているケースが多く見受けられるのは、尼崎市の特徴ともいえるのではないだろうか。

(3) 保育者養成における課題

ところで、本研究実践にかかわった児童教育学科学生は、保育士、幼稚園教諭を目指す学生である。今回の交流会は、教育課程構成論という幼稚園教諭資格必修の科目の中で行われた。保育士、幼稚園教諭は、資格を取得して専門職となり、日々、子どもの成長を見守りさまざまな支援を行っていく。一方、今日、保育所、幼稚園では、子どもの保育だけでなく、保護者の子育て支援、さらに地域の子育て支援センターとして地域の子育てを支援していくことにもなる。平成20年に改訂された「保育所保育指針」では、「第6章 保護者に対する支援」、「幼稚園教育要領」では、「第3章 指導計画及び教育課程にかかわる教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項」において、保育所、幼稚園が地域における子育て支援のセンター的な役割を担うこと、つまり、保育所、幼稚園は、気軽に子育ての相談ができる場所であり、地域の保護者の子育てを援助する援助者であることが明記されている。

しかし、実際の保育現場では、経験年数が短く、保護者とのかかわり方が慣れていなかったり、自信が持てなかったりする若手保育者だけでなく、中堅保育者や熟練保育者の中にも保護者対応に苦手意識を持っている現状がみられる。その原因の一つとして、養成段階で保護者とのかかわりがもてないというこ

とが考えられる。保育実習や教育実習では、子どもとのかかわりはもてても、保護者とのかかわりはほとんどない状況である。

少子化や都市化によって子育てが孤立化し、複雑な問題を抱える家庭が増え、保育者の子育て支援について求められる専門性の質は高まる一方であるのに、養成段階では保護者支援や保護者とのかかわりはほとんどないのが現状なのである。

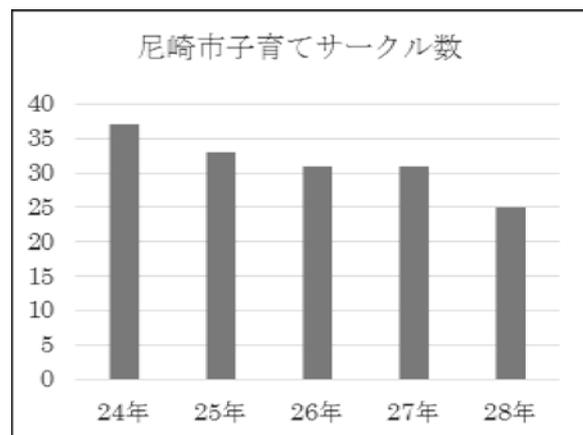


図1

(4) 立花地区子育てサークル交流会の共同企画の経緯

本研究実践は、そもそも尼崎市CSWを介して、立花地区子育てサークル代表者がサークル交流会で人形劇をしてもらえないか、という依頼からはじまった。

尼崎市における子育てサークル交流会は、地区ごとに年に1度異なるサークル同士が集まって、交流するという目的で行われている。例年、お祭りや運動会、人形劇観劇などが行われている。

交流会がはじまった2年前、立花地区では、例年交流会で使っていた場所が使えないという状況になった。また、筆者のゼミ学生が人形劇をしていることをCSWから知り、人形劇を含めた交流会の開催の依頼があった。しかし、単に大学が場所を提供するというだけでなく、学生が専門性を高めるうえでメリット

になるようにという指摘があった。そこで、保護者対応が苦手な経験がない学生が保護者とかかわることとで保護者対応を学ぶ機会にしていくということで双方の目的をすりあわせて実施されることとなった。

立花地区子育てサークル交流会の本学での実施は、本年度で2回目になる。昨年度交流会は、「子育てフェスティバル」として、母親が子育てに関する情報、学習のブース（防災や救急救命、子どもの運動、子どもの食、子育てサポート）を設けて、子どもたちが学生と遊んでいる間、お母さん方に自由に学んでもらうという形式で行った。異なるサークル同士の交流や学生と保護者との交流が十分にできなかったという反省から、今年度は、より「交流」の目的に焦点をあてて行った。

交流会の準備については、6月より、立花地区子育てサークル代表者とCSWと筆者で定期的に打ち合わせを行った（6回）。遊びの内容やグループ編成についてなど丁寧な相談打ち合わせを行った。その都度、立花地区子育てサークル代表者と各サークルの代表者同士が連絡を行って進めていった。

（5）本研究の目的・方法

本研究では、立花地区子育てサークル交流会の実践を通して、地域と大学の協同・連携の在り方について考察したい。具体的には、連携の一つの場面として、大学における地域イベントの開催の意義を明らかにする。方法として、交流会実施後の自由記述アンケートをてがかりにする。

2. 立花地区子育てサークル交流会実践報告

（1）実施報告

【日時】2017年2月8日10:00～12:00

【場所】園田学園女子大学 スポーツセンター2Fメインアリーナ

【目的】①立花地区子育てサークルが遊びを通して交流を深める。

②尼崎市における子育て世代と若い世代が子どもとの触れ合いを通して交流する。

③保育者を目指す学生が、子どもへの対応や保護者への対応を体験的に理解する。

④保育者を目指す学生が、教育課程構成論で学んだことを生かして、異年齢の乳幼児カリキュラムを構想し、実践する。

【参加者】参加者数は188名であった。内訳は、立花地区子育てサークル約39組（78名）、その他、地域の親子2組（4名）、児童教育学科「教育課程構成論」受講者89名、影浦ゼミ3回生9名、尼崎市こども政策課、こども家庭支援課、立花地域振興センター、尼崎市社会福祉協議会立花支所4名、学内教員、地域連携推進機構4名である。

【内容】まず、オープニングとして、学生たちによる体操、各サークルのお気に入り手遊び紹介が行われた。そして、異サークル親子と学生のグループづくりを行った。

そして、「おねえさんたちと思いっきり遊ぼう」として、グループごとに5つの遊びのコーナーをまわった。受付で学生たちが作成したラリーカードを子どもたちに配布し、遊びを経験したらシール貼り、シールを集める形式にした。

遊びのコーナーは次の5つである。①影絵劇「はらぺこあおむし」「金のがちょう」、②パラバルーン、③野菜スタンプ、④ボーリング、⑤運動遊び。遊びのコーナーには担当する学生を6名ずつ配置し、遊びの準備、指導案の作成を行った。また、休憩コーナーも準備した。

最後に、フィナーレとして、学生たちによる体操、活動のふりかえりを行い、学生から子どもたちへごほうびシールを渡し、子どもたちから歌のプレゼントがあった。

会場は、図2の通りである。

3. 結果・考察

(1) 母親の声

交流会に参加した母親に実施後、アンケートを行い、感想、意見を自由に記述してもらった。その結果をまとめると次の4つに整理できる。

① 保育学生との交流で安心できた

参加者の多くは、幼稚園入園前の2, 3歳児が多く、集団生活になじんでいない子どもがおおかった。そのため、最初は恥ずかしがって母親から離れられない姿が多く見られた。しかし、多くの母親から「保育の学生さんだったので安心してお任せできた」「さすが未来の先生だな」という感想をいただくなど、子どもたちが母親と離れて積極的に遊ぶ姿を見て安心した、母親同士交流できたという感想をいただいた。学生と親子の担当制にしたことで、学生が保護者、子どもとかかわりやすかったことが影響したと考えられる。

② 子どもたちがいろいろな遊びの経験ができた

パラバルーンを初めて経験できた子どもも多く、野菜スタンプ、影絵など、運動遊びなど普段家庭ではできない経験をすることができた、子どもが好きな遊びを発見できた、家庭での遊びのヒントになったという感想があった。

③ 異なるサークルとの交流ができた

今回は、遊びを回るグループを異なるサークル同士になるように、受付時にシールを配布し、仲間探しをしてグループ作りをおこなった。そのため、新しい人との交流やほかの

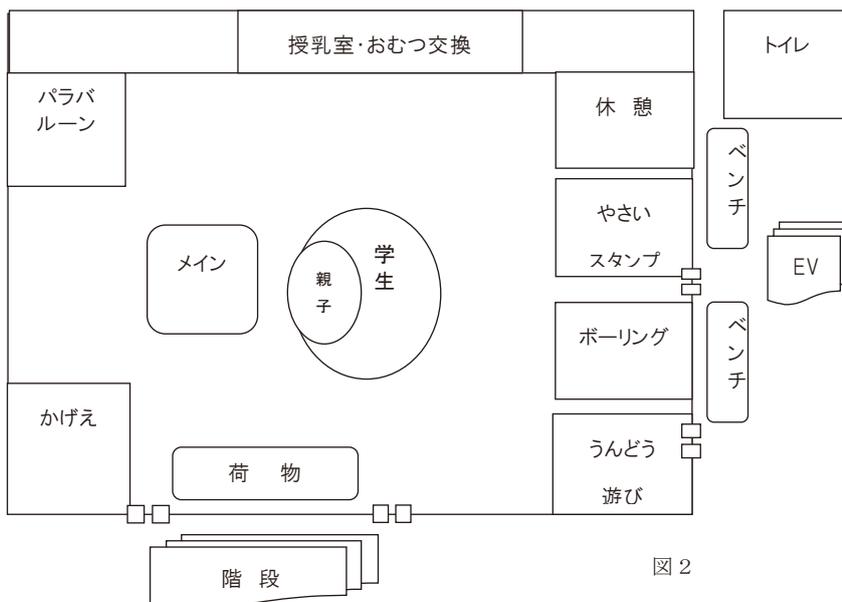


図2

サークルの情報を交換できたという感想も多かった。

④ 広い場所でのびのび過ごせた

場所が大学の体育館ということで、子どもたちが安全にのびのびと活動できたという感想があった。

多くの母親が、保育者を目指す学生との交流で子どもたちが楽しむことができたという声が多く見られた。また、学生たちが積極的に子どもにかかわる様子から普段の子育てを振り返ることができたという母親もいた。異なるサークル同士をグループにしたことで、お母さん同士が情報交換や交流もできていました。ねらいとしていた異なるサークルとの交流、多様な遊びの経験をすることは達成できていた。

(2) 学生の声

交流会後の学生たちに感想、学んだことについての記述してもらった。その結果次の4つに整理できる。

① 子どもとかかわりにおいて積極的なかわりが大切

最初、人見知りをしていた子どもたちが、笑顔で体を思いっきり使って積極的にかかわ

ることで心を開いてくれたという経験をした学生が多かった。これまでに大学や実習で学んだ遊びを子どもたちに実践してみても喜んでくれたなど、大学での学びを実践する場にもできていた。

② 保護者とのかかわりの重要性

短い時間ではあったが、保護者と話すことができた、助けることができたという自信につながったようであった。なかには母親とどう話せばよいかわからなかったという学生もいたが、それも一つの学びにとらえたい。また、母親と話すことで子どものことを知ることができるということや、母親と積極的にかかわることが子どもとの信頼関係につながることを実感した学生もいた。

③ 子どもの発達や個性の多様性理解

今回、1歳から3歳までの子どもたちが参加しており、異なる年齢、同じ年齢の子どもたちが集まっていた。その中で発達や性格で同じ遊びをしても遊び方や興味関心が異なることを体験的に学ぶことができていた。

④ 遊びの援助の方法について

学生たちは事前に遊びの指導計画を作成し、準備を行った。事前に考えていた遊び方やルールは、子どもたちがしたいと思う方向と異なることもあった。子どもの主体性を大切にしながら柔軟な計画（ねらい・内容）と臨機応変な対応が大事であることを学んでいた。こうした内容は、講義だけでは伝わりにくい部分である。

多くの学生が、子どもたちとのかかわり、保護者とのかかわりにおいて、積極的な姿勢や笑顔が大切ということを経験的に学ぶことができていた。担当制にすることで、積極的に働きかけやすく、短い時間で子どもも保護者も心を開いてくれたという達成感が得られたようだ。

この交流会をそれまでに行った保育実習 I

（保育所）や次にはじまる保育実習 I（施設）、幼稚園教育実習とのつながりの中で位置づけて、課題を発見していた学生もいた。机上の学びだけでなく、こうした体験的学びを大学のカリキュラムにおいて位置づけていく必要性も明らかになった。

4. おわりに

大学で地域のイベントを行うことの意義として二つ指摘できるだろう。

① 学生たちの実践場所としての有効性

一つは、学生たちが学びにくい実践的な内容を安心して学ぶことができるということである。実習の場合、学生たちにとってなじみのない現場に出かけて行ってその場に慣れることから始めなければならない。しかし大学は学生たちにとってみれば、自分たちの普段の居場所である。保護者より場所に関して多くの情報をもっており、その意味でも保護者とかかわりをもちやすい関係になっていたとも考えられるだろう。

② 大学と地域の壁を解消するきっかけ

大学を開放してイベントを行うことは、大学と地域の垣根を低くするチャンスであった。地域と大学が連携を行っていくうえでの一つの壁として、大学が身近に感じられていないということがある。このイベントの企画実践において何度もきていただいた立花地区子育てサークル代表の母親は「近所にある大学なのに、こんなことがなければ大学に来ることなんてなかった」と言っていた。もっと大学が地域に身近な存在として、研究、教育を担っている機関にならなければならないだろう。そのための一つのきっかけとして機能できたのではないだろうか。

③ 地域と学生のニーズ把握と意識の醸成

課題としてあげられるのは、丁寧な地域全体のニーズ把握と学生のニーズ把握の重要性

である。

単に大学が場所貸し、学生が人手になるといえないように、学生たちがどのようなニーズや課題を持っているかを、担当の教員が把握し、授業で意識の醸成を図りながら、子育てサークルと話し合っただけで進めることはできなかった。また、日常的に交流会に向けて検討を重ねてきた立花地区の子育てサークルのニーズ把握、意識の醸成については、CSW が丁寧に行ってくれることで達成できていた。

しかし、地域全体のニーズ把握は不十分であったといえるだろう。昨年度、本来の子育てサークル交流会の目的や意図と離れたイベントになってしまっていることに、気がつかないまま進めてしまっていた。今年度、異なるサークルのメンバーでグループを作ったり、サークルごとの手遊び発表など、より異なるサークルの交流を意識した方法、内容にはすることができた。一方で、立花地区以外の交流会の実態は把握できていないままであった。現在、各地区で行われている子育てサークル交流会の内容や課題を整理する必要もあるだろう。1 回だけのイベントに終わらせないために、今一度、尼崎市全体の子育てサークル交流会の実態と、本来の目的や意図、現状を確かめたいうえで、そこに大学が協力する形で発展的に交流会を実施できるようにしたい。それは、イベントに限らず、地域と大学が連携するときに重要になってくることではないだろうか。

以上より、地域と大学が協同・連携するうえで、地域と学生のニーズ把握、意識の醸成を丁寧に行うことが重要であることが明らかになった。今後、さらに、教員である研究者に求められる資質についても明らかにしていかなければならないだろう。

【謝辞】

2 年間の立花地区子育てサークル交流会では、尼崎市こども政策課、立花地区子育てサークル、尼崎市市民協同局園田地域振興センター、尼崎市社会福祉協議会 尼崎市の皆様に大変お世話になりました。深く感謝いたします。

¹原田正文『子育て支援と NPO』朱鷺書房、2002 年。

²品川氏は、子育てサークル解散を否定的にとらえるだけでなく、肯定的にも考えながら、解散原因を大きく 3 つに整理している。①サークル運営に関する問題、②人間関係の問題、③積極的に活動に参加しようとするメンバーより、全体の歩調に合わせようとする意識が高いメンバーが増えることによるサークル活動への負担や不満の増加。(品川ひろみ「子育てサークルの解散要因に関する研究—活動の経緯と成員の意識に注目して」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第 93 号、2004 年、pp.197-223。)

はじめに

平成 20 年(2008 年)6 月に改訂された学習指導要領解説にまとめられている「社会科改定の趣旨」には、「改善の基本方針」として、

我が国及び世界の成り立ちや地域構成、今日の社会経済システム、様々な伝統や文化、宗教についての理解を通して、我が国の国土や歴史に対する愛情をはぐくみ、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを重視する方向で改善を図る。

とあり、「伝統や文化」の理解の上にたち、「国土や歴史に対する愛情」を育むことが指摘されている。

「改善の具体的事項」としては、

我が国の歴史や文化を大切にし、日本人としての自覚をもつようにするとともに、持続可能な社会の実現など、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して改善を図る。

と指摘し、「内容の改善について」に、

地域の文化財や年中行事に関する内容については、「地域に残る(文化財や年中行事)」を「地域の人々が受け継いできた(文化財や年中行事)」と改めた。

とある。

このように改定された小学校社会科の 3、4 年生の学習指導要領には、

(5) 地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。

とある。地域の人々の生活の中身は、(ア) 古くか

ら残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子、(イ) 地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事(ウ) 地域の発展に尽くした先人の具体的事例の 3 項目である。そして、調べる方法として、「道具が使われていたころの生活の様子、古くから伝わる文化財や年中行事の内容やい われなどを聞き取ったりする」ことにより、「生活の変化」を知り、「人々の願い」について、

地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事には、地域の発展やまとまりなどへの人々の願いが込められていることなどを考え、人々の 生き方に触れるようにすることである。

と解説する。(ア) (イ) (ウ) の 3 項目のなかで(ア) は有形民俗文化財、(イ) は無形民俗文化財に該当する。本稿では、(イ) の年中行事等について検討していきたい。学習指導要領解説では、

ここでは、民俗芸能などの文化財が地域の歴史を伝えるとともに、そこにはそれらの保存に取り組んでいる人々の努力が見られることや、地域の人々が楽しみにしている祭りなどの年中行事には地域の生産活動や町の発展、人々のまとまりなどへの願いが見られることなどを取り上げ、生活の安定と向上に対する地域の人々の願いや保存・継承するための工夫や努力を考えることができるようにすることが大切である。

と述べられ、具体的な授業の方法として、

文化財を見学、調査する活動や、文化財や年中行事の保存・継承に携わる人から話を聞く活動、古くから伝統的に伝わっている行事や節句などの様子を調べる活動が考えられる。また、実際に行事に参加したことがある児童

の体験談を紹介し合う活動は、自分たちも地域の伝統や文化を受け継いでいく一人であるという意識を養い、参加意欲を高めることにもなり、地域社会の一員としての自覚を育てることにつながるものである。

と指摘している。しかし、人口の流動化や少子高齢化、生活様式の急激な変化のなかで伝統的な民俗文化の基盤は脆弱なものとなっている。多くの年中行事も廃絶しているものも多い。このような中で、「生活の変化」や「人々の願い」を考える授業はどのように構築することが可能か。ここでは、民俗文化財の現状からみた小学校社会科の課題について考えたい。

1、地域社会の持続可能性と文化財

平成 26 年(2014 年)2 月に兵庫県文化財保護審議会は、兵庫県文化財保護条例制定 50 周年を迎えて、「地域の文化を発展的に受け継ぐために-地域の持続可能性に文化が果たす役割-」という 9 項目からなる提言を行った。

その報告書において、「地域の善意によってまもられ、受け継がれてきた」文化財が、地域社会の衰退とともに、「支える人」の減少を招き、文化財の保存・活用の展開が困難になっているという現状を認識したうえで、次の 7 つを指摘する。

- (1) 地域の文化をささえる人の育成
- (2) 歴史文化遺産の基盤整備と活用の手法
-地域の文化を共有する「場」づくり
- (3) 県政長期ビジョン～時代の潮流 人口減少社会と、「地域文化」の危機
- (4) 「営みの記憶」を残す-歴史文化遺産が直面する脅威-
- (5) 地域の歴史文化を総体として保護する仕組みづくり
- (6) 地域の文化を受け継ぐ
- (7) 精神を鍛え、感性を磨く～地域の文化を未来へ受け継ぐための素養

このなかで注目したい第 1 点は、(4) である。

地域の歴史文化遺産は、「地域の暮らしを積み重ねた結晶であり、社会を結ぶ膠着材」であり、それが消滅することにより、「人の暮らし」「社会の履歴」が消滅することになる。

千年の歴史を刻んだ地域が、跡形もなく消えてしまう状況が現実化するなかで、地域の文化が持つ意味について真摯に受け止め、我々の世代においてなすべきことを熟考するときがきた。

この指摘は、未来予想ではなく、兵庫県下においても現実のものとなっている。つまり、「村じまい」が目前に迫り、地域社会で維持されてきた文化財をどのように保存すべきかを考えなければならぬ。「社会の履歴」が消えてしまうことがないよう「営みの記憶」を記録に残し、伝えていくことが急務である。

次に、(6) が重要である。「地域の文化を受け継ぐ」ために、①地域を愛する人づくり、②魅力あふれる地域づくり、が取り上げられている。平成 23・24 年度の兵庫県社会教育委員会の提言に、
地域社会における人々の生活を豊かにする資本として、…地域社会における人と人との関わりが豊かさが、こどもの教育成果の向上…につながるなどの多くの役割を果たすと、ソーシャルキャピタルの機能を重視している。そして、幼児期：地域に触れる、小学生：地域を知る、中学生：地域との関わりが気づく、高校生：地域に参画する、大学生：専門分野や学びを活かす、成人：地域の核となる・専門分野や学びを活かす、と指摘し、社会教育と学校教育が連携し、生涯を通じて地域とかわりを持ち続けることが指摘されている。

次に、歴史文化遺産を次の世代に継承していくうえで重視しているのが(7)である。1994 年の「オーセンティシティに関する奈良会議」における世界遺産の保全に係る指標の一つ「精神と感性」を重視する。

地域で積み重ねられてきた生活について真

剣に考え、地域で生きることによって受け継がれてきた「感性」をとらえようとする努力によって初めて、地域を次代につなぐ本当の意味が見える。

この「感性」については、柳田國男が『民間伝承論』で、

目は探訪の最初から働き、遠くからも活動し得る。村落・住家・衣服・其他我々の研究資料で目によって採集せられるものは甚だ多い。目の次に働くのは耳であるが、是を働かせるには近よつて行く必要がある。心意の問題は此両者に比して尚面倒である。自分は第一部を洒落て旅人学と呼んでよいといつて居る。通りすがりの旅人でも採集出来る部門だからである。之に倣うて第二部を寄寓者の学、第三部を同郷人の学ともいふ。

と指摘する第三部心意現象を内包すると考えられる。つまり、その地域で生まれ育つたものだからこそ理解できる「心意」こそが「感性」といえよう。「同郷人の学」とは、郷土のことを郷土の人が考える学問ということになる。そして、提言に関する報告書は、

地域の文化を考える手段として、また自分たちの地域を次代につなぐうえでかけがえのないものとして、地域を考える教育に活かし、精神を鍛え感性を磨くために活用することこそが、歴史文化遺産が「地域の持続可能性」に貢献する役割である。

とまとめている。「地域を考える教育」プログラムの開発が求められているといえよう。

2、柳田國男と社会科教育

民俗文化財と教育プログラムを考えると、日本民俗学の創始者である柳田國男が成城学園初等学校（成城小学校）と連携して、教科書『日本の社会』を作成し、実践したことが注目される。柳田國男の教育論や社会科教育に関しては多くの研究が蓄積されている。小稿でその全容を検討

することはできないが、戦後の社会科の開始期に民俗学がどのような点を重視したのかをみておきたい。

竜田孝則（2010年）によると、柳田國男の考えた社会科は3つのキーワードで特色づけることができるという。

まず、一つ目は「世の中」である。社会科の「社会」は「世の中」と言うのと同様である。「アメリカのごく普通の人が口にするところの社会といったもの」を指し、だれも知らない人はいない語であるものの、日本では、言葉を聞いたことはあるが概念を持たない人が多い。つまり、「社会」とは「世の中、人の世、世渡り」であるという。そして、日常のことで、単純なありふれたことの中にわからないことがある点に注意するのである。つまり、社会科は特別なことではなく、当たり前を日常を対象としているということになる。

次が「史心」である。日常のありふれたことの中でも疑問をどのように考えたらいいかという質問に対し、柳田國男は、

その点については、非常に私にも苦しんでおるのですが、余儀なく私は史心という言葉を使おうということを提議しておるのです。国民全部に史心をもたせることが歴史教育の主たることです。…ものには歴史がある。現在あるすべてのものに原因のないものはない。現在と過去とすつかり同じものは一つもない。昔のものは今は変つておるが、変るものには変るべき理由があつて変つたのだ。

（成城教育研究所編 1947年）

と述べている。「史心」を養うことこそが歴史教育の一番の主眼であると主張しているのである。また、和歌森太郎との共著『社会科教育法』では、史心という言葉はいろいろの内容をもつが、かんじんなところは、社会は動いていくものであるということの確信をもつような心である。その基礎には、今は昔と違つておるということ、昔から今の間には、変遷なり発達、

進歩があって現実を昔と変えてきているが、それと同様にこれからも変えていくことができるものであるという確心をもつことが史心である。一口に昔といわれるものの中にもいろいろあつて、それは一つではなく、幾段にもわかれて、変わってきたということである。そうして現実にはひろがっているものをまず見つめて、そこに何か昔から伝承されてきた一つの事情がありはしないか、今のこの原因にありはしないかとたずねていく心も、われわれは史心として理解している。

と指摘している。さらに、千葉徳爾が柳田國男の見解として、

およそ人間がすることで、ことに多くの人とともにすることで、その理由がないということがらはないはずである。その理由があつたかは、ただわれわれが忘れてしまったというだけで、歴史の研究というのはそれを思い出す作業にすぎない。（千葉徳爾 1994年）

と述べ、

昔あつたものごとがそのまま現在もあるということはあり得ない。それと同じように、いまのものごともしつまでも変わらないというものではなく、未来は必ず変わるはずで、昔のものごとが変わってきた過程がわかれば、いまのものごとを変えていくにはどのような条件が必要かもわかる。つまり、変わっていくにはそれぞれの理由があり、または、そのときどきの必要があつた。ただ、そのどれをとるかについてはそれぞれの時代の人々の判断が働いたから、その判断が正しかったり誤っていたりしていたことで、結果はよくも悪くもなつたのである。

（千葉徳爾 1994年）

と指摘している。これも「史心」に通じるものであろう。つまり、「史心」とは、歴史認識であり、歴史的な思考を指すものといえよう。

柳田國男は昭和16年（1941）11月17日の西

部朝日講堂における「最近の文化運動と民俗学」という講演会で、

民俗学という学問は、妙なふうには翻訳されてしまいましたが、簡単にいうならば、文化史を明らかにする道であります。ただ、発展性のある、時代性のある文化を日本のために、一つ固まったものとしてやる学問です。文化史学といったほうがよいかもできません。（今野円輔 1983年）

と述べている。また、『青年と学問』においては、「自分たちの一団が、今、熱中している学問は、目的において多くの歴史家と同じ。ただ方法だけが新しいのである」と指摘している。

以上のように、「史心」は、歴史学としての民俗学にとって重要な概念の一つといえよう。柳田國男は、社会科（歴史）教育において、「史心」の養成が必要であると考えていたのである。

第三が「質問の重視である」という。「史心」についての話のなかで、

二千六百年の歴史の事実をどんなに勉強したつて五年や六年で、また一生かかつてもとうていおぼえ切れるものではない。

（成城教育研究所編 1947年）

と知識を覚えることではないと述べたうえで、社会の変化の原因について、

子供に聴かれては答え、聴かれては答えして行く。聴かれるということは子供だけの知識になるだけではない。一人が聴いて先生が答えると、その答えは、全体の子供のためになるのですから、よい質問を出させることをやっつけていけばよいのじゃないかと考えるのです。（成城教育研究所編 1947年）

という学びを指摘している。教員と児童・生徒との双方向の対話によって授業をすすめることを指摘しているといえよう。

以上のような柳田國男の社会科教育に関するキーワードを基盤に、昭和29年（1954）に『日本の社会』という教科書を実業之日本社から出版

する。また、柳田國男監修で民俗学研究所が編集した『民俗学辞典』（東京堂）もその序文によると社会科教育の参考になるためという目的を持っていたことが記されている。

柳田國男が共に勉強会をしていた成城学園の柴田勝は、成城学園での教育方法として、

子供に問題を出させる時には書かせると窮屈になるので、口で言わせて片端から書きとめました。四年生三十四人の組で八十ほど問題が出たのです。それを子供たちに自分で整理させて見ました。組を十二人ほどの三つのグループにわけ、それぞれにその八十の問題を三通り合計二百四十枚のカードにして渡しました。似たような問題を合わさして見ると、子供たちはいろいろ議論して十から十五ぐらいに分類しまして、大体の範疇に入り得るようになりました。そのこと自体が勉強になり、またどの問題から勉強するかも子供達がきめて始めました。きものというのは先生から与えられた問題だが、一つ一つの問題は子供のから出したわけです。きもの変遷はどうか、西洋のきものとどう違うかなどというような問題でした。本を集めたり話合ったりして二ヶ月位してどういうことを感じたかということ、暑い国でも寒い国でも又未開民族でもどこの人もきものを着たがっているということがわかったとか、昔のきものと今のきもの違いがわかったということです。（民俗学研究所編 1949年）

という事例を紹介している。「きもの」というテーマを教員が与え、子どもたちが気づいたテーマを紙に書き出し、グループワークを行っている。KJ法であり、ブレインストーミングの方法で課題を抽出し、子どもたちが調べることで学習を深めている。現在、注目されているアクティブラーニングの手法といえよう。

民俗学者たちも研究成果を社会科教育に活用できるか考えてきた。例えば、関敬吾は、

郷土のいろいろな伝承を子どもたちが探り当てて来て、学習の場に提供して来るのですが、先生自身がそういう伝承がどういう意味をもっているかということが分からないと、生かしようがないのではないか。そこに教師の大きな役割があると思うのです。（柴田勝ほか 1956年）

と述べ、子どもたちが集めてきた民俗文化を「これらの言葉がたとえば先祖のどういう生活の苦勞や願いなりをにじませているのかというようなことを、先生がかなりの的確に掴まなければ」ならないと、教師の役割を指摘する。そして、

一つの民話でも興味の対象として取り上げるのではなくて、その中に人間の願いがこめられているということを見ていくべきではないかと思うのです。それがたまたまどこも分らない民話であったり、民間伝承であったりするよりも、自分の村の地名なら地名というものが、こういうところから出て来たのだしというふうに取り上げて見ると、非常に身近なものとして理解しやすい。そして今の自分たちの世の中が出来ているのだ。問題もそこにあるし、自分たちの将来もそこから出発するのだというように理解することができるのではないですか。

（柴田勝ほか 1956年）

と述べ、民俗文化の背景にある暮らしの営みの理解が身近なものから社会や歴史を考えていくために大切であることを指摘している。

以上、昭和20年代から30年代にかけて、柳田國男を中心に日本民俗学が戦後の社会科教育に関わり、「史心」の養成を主眼とし、身近な民俗文化からいかに歴史教育を行うかについて検討してきたことを述べてきた。柳田國男や日本民俗学と学校教育との関りについては、すでに多くの業績が蓄積されている。今後、それらにも学びつつ、地域の民俗文化財の持続可能性をはかるため、どのような教育プログラムが可能か検討を加えな

ければならない。

3、民俗文化財を活用した小学校教育

ここで、具体的に民俗文化財を活用した小学校での教育プログラムの具体例を検討したい。

3-1、篠山市立大芋小学校

平成20年(2008年)から平成23年(2011年)にかけて、『篠山市歴史文化基本構想策定』に係る調査において取り上げた篠山市東部の篠山市立大芋小学校での取り組みを報告したい。

当該小学校区には、兵庫県下で篠山盆地に特徴的に分布する京都祇園祭の山鉦も類する曳山が出る祭礼行事がかつては存在した。ところが、人口減少、少子高齢化により、祭礼行事が維持できず、現在では曳山が使用されることはない。曳山を運営する青年が不足していることが原因である。しかし、大芋地区では、この曳山を活用し、地域の民俗文化を継承していこうとする新しい動きがある。平成16年(2004年)から始まった「大芋まつり」である。

篠山市立大芋小学校の「大芋っ子まつり」を拡大し、小学校を会場にした地域全体の行事として実施されている。行事の運営は、「大芋まつり実行委員会」が行う。実行委員会は、大芋小学校(校長・教頭・児童会・職員会)、大芋小学校育友会、地域の総代会、老人会、学校評議員などで構成される。実行委員長には自治会長、副委員長に学校長がつき、数度の打ち合わせを開催して、11月下旬の土曜日開催される。

行事の内容は、午前中に大芋小学校の児童の総合的な学習の時間、生活科の学習発表会があり、午後、昔の遊びの体験で世代間の交流がはかられ、校庭内であるが、地域の方々と児童が一体となって、曳山と子どもみこしが練り歩く。

「大芋まつり」の趣旨について、実行委員会の会議資料(平成16年度(2004年)の「事業を始める背景」)には、

大芋小学校では、「ふるさと大芋」の良さを

見直し、ふるさとを愛し、ふるさとを誇りに思える子どもに育ててほしいと願っています。

そのため、総合的な学習の時間(やまぶきタイム)や生活科の時間に、ふるさとの昔ながらの良さや、自然のすばらしさ、人とのつながりの深さなど、大芋のすてきなところを見つけ、伝え、守っていく学習をしています。

その中で、「楽しみながら大芋のことがわかる。大芋のみんなが元気になるおまつりがしたい」という願いが、子どもたちから出てきました。

例年、秋に「大芋っ子まつり」を行っていますが、地域の大人の方に協力していただけたら、もっと楽しいことができ、もっといろんな世代の方々に楽しんでいただけるようなお祭りができるのではないかと考えました。

また、子ども達が発信することで、子ども自身が「自分が何かの役にたっている。」という、実感や自信を持つことができるのではないかと考えました。

そこで学校が発信地となって、地域のみなさまにご協力いただきながら、『大芋のみんなが元気になる大芋まつり』を行いたいと思います。

とある。この項目は、若干文言の修正はあるものの、毎年6月に開催される実行委員会の資料に必ず添付され、確認されている。この行事が、小学校が主体となり、地域によびかけたものであったことがわかる。また、この趣旨の中で、

「楽しみながら大芋のことがわかる。大芋のみんなが元気になるおまつりがしたい」という願いが、子どもたちから出てきました。

という箇所が重要である。民俗文化を伝承していく機運が、次の世代を担う子どもたちから発信さ

れているのである。

このようにしてはじまった行事の「ねらい」について、会議資料（平成16年（2004年）には、「①ふるさとを知る学習を深める中で、地域を誇らしく思う子どもを育てる。②地域の方々との関わりの中で、人と関わる力を育てる。③ふるさとをよくしていこうとする実行力や自信を育てる。④いろんな世代の方と一緒に、楽しい、元気の出ることをしたい。⑤大人も子どもと一緒に、大芋のよさを再認識できる場としたい。」と記されている。人口減少にともない、各集落で旧来の形態では、維持できなくなった祭礼行事をはじめとする地域の文化遺産を小学校を中心に再編成し、世代間の交流や文化の伝承のしくみ、地域への理解を深めていく新しい試みとして注目される。



写真1 大芋まつり（2009年11月22日撮影）



写真2 曳山（造り山）
（2009年11月22日撮影）

曳山（造り山）については、平成16年（2004年）には、藤坂集落と小原集落の2基が出され、五年生9名が地域の方（荒木茂廣氏）の指導のもとで、一カ月かけてモリアオガエルの造り物を完成させ、曳山に載せて展示した。平成17年（2005）は全校生徒が造りものを制作し「多紀つくり物展」

と題し、感想を新聞にまとめることなども実施している。また、全校生徒で曳山をひくことを行っている。しかしながら、小原の曳山はゴムタイヤであるため、集落から小学校まで曳行できるが、藤坂の曳山は木製の車輪であり、破損の恐れがあるためにその後は使用していない。

平成17年度（2005年）の「大芋まつり」について、終了後の会議資料には、

- ・今年もつくり山車を出していただくことができ、本当にありがたかった。今年は全員で引くことができたので、さらに盛り上がった。
- ・つくり山車は大変だったけど、5、6年の子ども達は、「最後は自分たちが作り上げる」意識をもって、「やり遂げた」という充実感を味わうことができた。来年も続けてほしいということも、こどもたちからでていた。
- ・つくり山車をひけたことは、子ども達にとって喜びだった。ご協力ありがたかった。
- ・荒木さんにはたくさん教えていただくことが多くて、とてもありがたかった。教えていただいたことを、つなげていって、最後には子ども達だけで作れるように、伝えていけるようになればと思う。

とある。なかには、造り物の技術を児童に伝えること課題や毎年実施していくことの負担を述べる意見もあるが、何とか第6回まで継承している。また、これまでの児童の造り物は、校舎の多目的スペースに展示され、保管されている。

参加者は、この行事をどのように受け止めているのか。第1回221名、第2回228名、第3回203名、第4回207名と集計されている。第5回の参加者は、名簿の記載が、児童38名、職員13名、保護者（家族）54名、大芋地区46名、一般参加24名、来賓20名の計195名以上の参加であった。平成20年（2008年）（第5回）の参加

者アンケートから主なものを紹介したい。

・方言の発表は大変興味深かったですが、アンケートの回収率はもう少し高いほうが良かったと思う、先生方のご苦勞に感謝します。地域の者がもっと協力しなくてはならないと思います。

・造り山を引っ張って伊勢参りを歌いながらグラウンドを一周しました。昭和 25 年頃に思いをいたし感無量でした。来年もまた来たいと思っています。

・私大正生まれですが、昔からの歴史等を今日の大芋小学校の生徒の方にお教えくださった先生方大変だったと思います。年を老いた私達これからの近代をきっと思いついて後世に伝えてくれると思います。

・大芋まつりも 5 回目になりました。毎年内容が少しずつよくなっているようです。造り山も荒木さんにお世話になっていますが、まだまだこれからも頑張っていたきたいです。

以上のように、「大芋まつり」は、大芋小学校の教育活動を地域の行事に拡充し、そのなかで廃絶していた曳山（造り山）を活用し、造り物の技術を児童に伝えている。集落の高齢化が進み、小原集落から小学校までの曳山の運搬の人数が減少していることや造り物の技術の伝承者が 1 名であることなど、今後の課題は多い。しかしながら、「大芋のみんなが元気になる大芋まつり」というテーマのもとでの取り組みは、児童から高齢者まで参加者の生き生きとした明るい表情に表れているように、大芋地区の活性化にはなくてはならない行事となっている。

しかしながら、人口減少、少子化を止めることはできず、大芋小学校は、村雲小学校・福住小学校と合併し、篠山市立多紀小学校となった。「大芋まつり」は「大芋文化祭」となり、小学生が参加するものの小学校教育との関りではなく、大芋活

性化委員会・跡地活用委員会で実施されるようになった。小学校跡地の活用については、「地域が主体的に関わる」「地域の未来を担う」「持続的自立運営」の三原則を立て、活動を開始している。また、神戸大学篠山フィールドステーションの地域連携活動により、農学部の「実践農学入門」という科目のフィールドとして、大学との連携もはじまっている。

小学校の統廃合により、校区が広くなり、多くの集落に児童が点在する。祭礼行事についても、福住の川原住吉神社のように維持できている地域もある。こうしたなかで、新しい小学校において、民俗文化を教材にどのような教育プログラムが可能であるか、校区の集落の推移を見守り、検証していく必要がある。

3-2、尼崎市立杭瀬小学校

尼崎市立杭瀬小学校は、平成 18 年（2006 年）4 月 1 日に尼崎市立常光寺小学校と杭瀬小学校が統合し、新しく尼崎市立杭瀬小学校となった。平成 19 年（2007 年）3 月に今の校舎である新校舎に移った。

大阪から川をひとつ挟んで西に位置する杭瀬は、兵庫の東の入り口として栄え、戦前からダンスホールやキャバレーなどが立ち並び、繁華街として多くの人で賑わっていた。昭和 11 年（1936 年）に尼崎市に合併された小田村には関西ペイント(株)などの工場があり、産業が発達しており財政的にも豊かであった。そのため、沖縄や九州から仕事を求める多くの人が集まり、されに東洋紡績工場もあったため、多くの女性が働いていた。

そして、第二次世界大戦中は闇市として賑わい、戦災により燃えたのち、商店街として再建された。戦後の復興においても、映画館を始め多くの飲食店や呉服屋などが立ち並び、道路の再建や電話回線の充実などインフラも整備されていった。

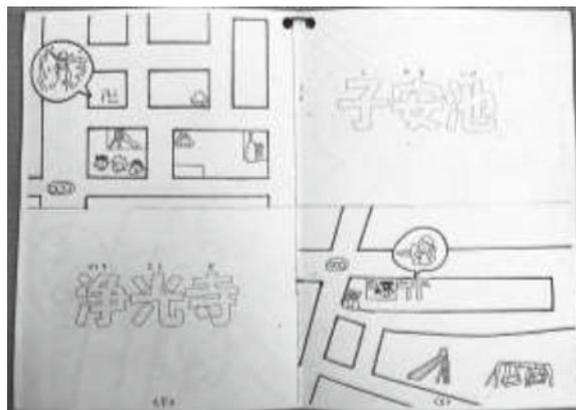
しかし、阪神電車駅前整備における地主の反対や、戦前は300人を超える女工さんが働いていた紡績工場の跡地の再開発における住民の反対があり、再開発が計画されながらも遅々として進まず、時代の流れに取り残されていくことになる。その一つが、昭和48年(1973年)の高潮対策である。結果的には阪急塚口駅前のさんさんタウンの再開発が進むことになった。また、昭和58年(1983年)においても、猪名寺のつかしの再開発に決定した。こうした再開発の動きの中で、多くのビジネスが杭瀬以外の町に流れていってしまうことになった。

このような戦前から戦後にかけての歴史の流れのなかで再開発されることなく、人口減少、少子高齢化がすすんできた地区である。そこで平成24年(2012年)から、商店街・市場の若手の商店主たちが杭瀬アクション倶楽部を立ち上げ、地域の活性化にむけての取り組みをはじめた。また、小学校を地域の拠点とし、学校、PTA、主任児童指導員、市教育委員会社会教育課、市地域振興センター、社会福祉協議会、大学等からなる「杭瀬小学校区学習センター運営会議」が設立され、毎月会議を開催し、さまざまな取り組みを行っている。

ここでは、平成26年度(2014年度)に本学人間教育学部児童教育学科の大江ゼミで取り組んだ、地域歴史文化遺産を活用した教育プログラムを報告したい。

この取り組みでは、小学校3年生の地域理解の教材として、スタンプラリーを開発した。

スタンプラリーの方法は次のとおりである。①まず校区の地図とスタンプ帳を配布する。スタンプ帳には、訪れる地点の名称と付近の絵地図が書



かれている。

写真3 スタンプ帳

- ②地図を見ながら、スタンプラリーの場所に行く。そこで待機している地域のお年寄りからそのスポットにまつわる歴史や伝説を聞く。そこで、その場所の写真と概要を掲載したカードを受け取り。スタンプ帳にスタンプを押してもらう。
- ③8か所の地点をまわり、8枚のカードが集まったら学校に戻る。集めたカードの裏面はパズルになっていて、最後にそのパズルを完成させる。カードの裏面のパズルを完成させると昭和25年(1950年)から43年頃(1968年)の杭瀬の街の地図となる。
- ④完成したカードの地図と持ち歩いた地図を比較することにより、校区の変遷を学習することができるようになっている。

この取り組みについて、ゼミ生が作成した指導案を紹介したい。

3年生 社会科指導案 大江ゼミ作成

1. 単元名

めぐってポン！あまがさきスタンプラリー
ー ～町の昔調べ～

2. 単元目標

- ・今と昔の町の違いについて、進んで調べることができる。(興味・関心・態度)
- ・今と昔の町の違いから人々の暮らしの移り変わりを考え、伝えることができる。(思考・判断・表現)
- ・スタンプラリーをしながら町の様子を観察したり、興味を持ったことを調査したりして必要な情報を集めて読み取ることができる。(観察・技能)
- ・町の昔調べを通して、古くから残る建造物の場所や様子を理解する。(知識・理解)

3. 単元について

スタンプラリーでは、尼崎市内杭瀬地区の子安池、回転砥石、今福、左門殿川、寺江亭、浄光寺、万丈堤、白と黒のフナの8ヵ所を回ることとする。スタンプラリーを行うことにより、子ども達に自分の街にある歴史的な建造物や歴史的伝承を見つけさせる。そうすることで、子ども達が自分の街のことを知り、昔の町の様子に興味・関心をもち、学習意欲を高めて探究的に学習できるようにさせたい。また、学習を通して子ども達が自分の街に愛情を持つようにさせたい。さらに、スタンプラリーを通して地図の活用力を育てたい。

4. 指導の全体計画

第一次 地域を調べる計画を立てる。

第二次 スタンプラリーを通して、地域の今と昔の町の様子の違いについて知る。

第三次 スタンプラリーを通してわかったことや考えたことを、効果的にまとめる。

5. 指導について

児童が、自分たちの町について調べやすいように、まずは、自分たちの通学路で自慢できる場所を取り上げるようにする。そこから町の様子に対する興味を広げ、町の歴史的な建造物や歴史的伝承を発見させていくようにする。スタンプラリーに際しては、グループに分かれて見て回る場所と順番を決めさせ、無理な計画にならないように配慮しておく。そして、スタンプラリー帳を配布し、スタンプを押すだけでなく、絵地図を添えておくことで児童が自主的にめぐることができるようにする。目的の場所では、お年寄りにその場所の昔の様子についての話を聞き、メモを取らせるようにする。スタンプラリーを通して、興味を持った場所については、さらに詳しく調べさせていく。そのさい、図書室やインターネットを使えるようにする。最終的に、スタンプラリーで集めたカードの古い地図と新しい地図を比べ、街の移り変わりと暮らしの変化について調べて分かったことや考えたこと、気づいたことを新聞などにまとめさせていきたい。フィールドワークに際しては、安全に十分に気をつけるようにする。

学習活動案

<p>見学場所 [子安池]</p> <p>子安池は、杭瀬にある熊野神社の境内にあります。昔、池を掘っていたところ、地蔵様が出てきましたので、池のほとりに祀りました。いつの頃からか、妊婦さんがこの池の水を飲むと、元気な赤ちゃんが産まれるようになったということです。熊野神社には、素戔鳴尊、天兒屋根命、應神天皇が祀られています。そのなかでも主に祀られているのは素戔鳴尊です。</p>	<p>一番とらえさせたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安産祈願の場所であることを知る。
<p>子どもの活動</p>	<p>指導上の留意点</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・子安池の名前からどんな場所であるのかを予想する。 ・お年寄りの話を聞き、子安池が作られた理由や背景を聞く。 ・子安池が作られたころには、出産時や乳幼児死亡率が高く、子どもの無事な成長を願う気持ちが込められていたことを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子安池という名前から、安産祈願の場所であることを予想させる。 ・つくられた当時の、出産時や乳幼児死亡率と結びつけて考えさせる。 ・昔と今の時代背景の違いをとらえさせる。

<p>見学場所[回転砥石]</p>	<p>一番とらえさせたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔は工場がたくさんあり街が発展していたことについて知る。
<p>子どもの活動</p>	<p>指導上の留意点</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・回転砥石の場所が神崎製紙にあることを知る。 ・モニュメントの形をもとにモニュメントに託された願いを調べる。 ・モニュメントは、神崎製紙で働く人全体を表しており、「総意」「和」と「協力」の意味が込められていることを知る。 ・このモニュメントがつくられた神崎製紙以外に大きな工場がたくさんあったこと知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・神崎製紙は紙をつくる古くからの工場であることを知らせる。 ・本やインターネットを使って、モニュメントの形をもとに託された願いを調べさせる。 ・「総意」、「和」、「協力」二込められた願いをとらえさせる。 ・本やインターネットだけでなく、街のお年寄りにも話を聞いたり、調べたりさせる。

<p>見学場所[今福]</p> <p>今福は小さい村で、大工さんが住んでいました。今福は最初、天皇からもらった名字でしたが、平民は名字を名乗れなくなり、村の名前になりました。今福には法然が開いた興法寺がありましたが、織田信長が今福に来たとき、興法寺は焼かれないように大阪府豊中市に異動しました。</p>	<p>一番とらえさせたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町の歴史が地名や建物から分かることを知る。
<p>子どもの活動</p>	<p>指導上の留意点</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・今福という地名は、もとは天皇からもらった名前であり、人々が苗字を名乗れるようになってから村の名前になったということを知る。 ・今福には興法寺というお寺があったことを知る。 ・なぜ、興法寺が移転したのかを調べる。 ・場所が移動しても、寺が尼崎の歴史を表して名を刻んでいることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ、昔は身分の高い人しか苗字を名乗ることができなかったことを伝えておく。 ・今は、なぜなくなってしまったのかについて興味を持たせる。 ・お年寄りに尋ね、本やインターネットを利用して調べさせる。 ・現在は大阪府豊中市にあることも伝える。

<p>見学場所[左門殿川]</p> <p>江戸時代のはじめに尼崎城主になった戸田左門氏鉄という殿さまが作らせた水路なので、「左門殿川」といいます。戸田氏鉄は城づくり、まちづくりの名人として有名です。大阪川からは「左門川」と呼ばれています。</p>	<p>一番とらえさせたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・川の名前の由来を知る。
<p>子ども活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地図帳を使い、左門殿川の場所を知る。 ・なぜ、左門殿川と呼ばれるようになったのかを予想する。 ・町の歴史を知る人に話を聞き、尼崎城の主の佐門さんが領民を水害から守ったからつけられた名前だと知る。 ・人々の願いをもとにして、人の名前が川の名前になるような歴史があったことを知る。 	<p>指導上の留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いきなり調べるのではなく、なぜそう呼ばれるのかを地理や名前から予想させるようにする。 ・尼崎城について、資料を用意しておき、どんなものであったかを児童が具体的に想像できるようにする。 ・水害から守られた当時の人々のうれしい気持ちを想像させる。

<p>見学場所[寺江亭]</p> <p>神崎にはむかし、藤原邦綱の家の、寺江亭がありました。天皇が京都から西へ行くときの宿にもなっていました。寺江亭跡の辺りの川の底にはこぶしぐらいの石がたくさんあり。「石を持って帰るとたたきがある」といわれ、怖がられるようになりました。当時の住人が寺江亭を残すためにうわさを流したのかもしれない。</p>	<p>一番とらえさせたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史上の人物との関わりを知る。
<p>子どもの活動</p>	<p>指導上の留意点</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・「平安時代の終わり頃立派な建物があった場所」である事を知る。 ・天皇や身分の高い人たちがこの地を通して「どこからどこへ」旅をしたのか考える。 ・寺江亭と関わる歴史の人物について調べ、まとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・天皇や身分の高い人たちの旅の宿舎として使われていたことを知らせる。 ・尼崎の地理的位置から考えさせる。 京都、大阪、福原（神戸）、畷島（広島） について歴史的背景を知らせて考えさせる。 ・尼崎が、京都と西国との交通路であったことをとらえさせる。

<p>見学場所[浄光寺]</p> <p>昔、恵満というお坊さんが夜の海から金色に光る観音像を引き上げ、浄光寺に祀りました。浄光寺の観音様は、戦や津波にあい何度もなくなったが、その度に見つかり、必ず戻ってくる不思議な仏像として有名になりました。浄光寺では、お寺の由来を描いた縁起絵が今も残っています。</p>	<p>一番とらえさせたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害について考えることができる。
<p>子どもの活動</p>	<p>指導上の留意点</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・浄光寺の名前の由来について知る。 ・浄光寺では観音様が有名であることを知り、なぜ有名なのかを調べる。 ・観音様が有名になった経緯から、災害について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・難しい点は解説して理解させる。 ・人々が観音様に願いをかけた事に気づかせる。 ・観音様が水害によって流されたが、のちに寺に戻ってきたという話から、災害について考えさせる。

<p>見学場所[万丈堤]</p>	<p>一番とらえさせたいこと</p>
------------------	--------------------

<p>万丈堤は、旧浄光寺村と今福村の間を神崎川の堤防から長洲村に伸びていた堤防の名前です。江戸時代の尼崎の藩主の戸田氏は、尼崎城を造るだけでなく神崎川周辺の防災まちづくりをしました。防災のまちづくりの名残として、長洲公園の向いの公園から商店街へ行く道は他の道より高くなっているそうです。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 昔から人々が防災に努めていたことを知る。
子ども活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> 万丈堤という名前からどのような建造物か予想する。 誰がこの堤防を作ったのかを調べる。 万丈と言う人物がなぜこの堤防を作ったかを考えさせる。 この当時から、人々が防災に努めていたことを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 堤という字から、堤防を想起させる。 当時の尼崎城近辺の地形から考えさせる。 ほかに防災を意識して作られている建造物がないかについても興味を持たせるようにする。

<p>見学場所[白と黒のフナ]</p> <p>昔、ある村人が、家の前で七輪を出し鮎を煮付けていたとき、お坊さんが通りかかり「魚にも命があるのに殺してはなりません」と言いました。村人は鮎を杭瀬の川へ逃がしました。それからというもの、杭瀬あたりで取れる片側が白く片側が黒い鮎は、村人が逃がした鮎の生まれ変わりだという伝説が伝わっています。</p>	<p>一番とらえさせたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の伝説を知る
子どもの活動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> 白と黒のフナと聞いてどんなフナを想像したか、絵をかく。 お年寄りから実際に白と黒のフナの話聞き、人々の暮らしと深く関わって伝説が生まれたことを知る。 ほかにも、地域に何か伝説がないかを調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童に自由に想像させるように、白と黒のフナという言葉以外には伝えないようにする。 自分の想像していた白と黒のフナと比べて、伝説が人々の暮らしと深く関わっていることをとらえさせ、伝説に興味を持てるようにする。 本やインターネットを使って、様々な伝説を調べさせる。

平成 27 年（2015 年）3 月 27 日には、児童の有志を募り、スタンプラリーを実施した。2 年生から 6 年生を対象にし、児童 12 名、大人 7 名の参加があった。杭瀬小学校 PTA、杭瀬団地老人会（レモンの会）、回転砥石のある王子製紙にも協力していただいた。

児童や P T A のいずれも 8 つの地点にまつわる歴史や伝説について、住んでいながら知らないことが多かった。また、説明をしていただいた老人会の方々も、子どもたちに説明するために地域の歴史を学びなおそうという姿勢がみられた。さらに、カードの地図の比較など杭瀬の街の歴史や伝

説に大いに関心を持つ機会になったと思われる。

また、平成 27 年（2015 年）6 月に杭瀬小学校 3 年生の児童に完成したスタンプ帳やカード、スタンプを贈呈をした。そして、杭瀬小学校 3 年生の授業でスタンプラリーを行ったいただいた。その際のスタンプ帳に記入された感想は以下のとおりであった。

○私は、スタンプラリーで一番面白かった所は、白と黒のフナです。どうしてかということ、近くに川があったからです。あともう一回いきたいな～と思いました。（女）

○熊野神社に子安池があるなんてびっくりしました。他のやつもこんなところにあるなんてびっくりしました。スタンプラリー楽しかったです。(女)

○みんなと町探検をして楽しかった。いろんな所があつてすごいと思いました。地図やキラキラカードを作ってくれてありがとうございます。(男)

○知らない所もあつたけど全部回れて楽しかったです。白と黒のフナや浄光寺などは、まだ知らなかったの、行った時に知れて良かったです。ありがとうございます。(男)

児童は楽しみながら街を探検することができている。また、地図やカードにも興味を示しており、教材によって学習意欲がさらに高まったといえよう。

また、大江ゼミで児童のアンケートを実施した。杭瀬小学校3年(1組29人、2組29人、3組29人)計88人のなかで、回答82人(回答率93.1%)であった。

質問1: 街歩きをして、知っていた話はあるか。

- ・常光寺 18人
- ・回転砥石 9人
- ・今福 8人
- ・子安池 8人
- ・白と黒のフナ 6人
- ・左門通り 2人

質問2: 話をしていた人に質問

(どこで聞いたか)

- ・親 12人
- ・兄弟 2人
- ・小学校 4人
- ・幼稚園 9人
- ・そのほか(おばちゃん・友達・太鼓の先生・私たちの街歩きに参加した) 3人

質問3: 面白かったこと・楽しかったこと

- ・今福公園で遊んだこと 25人
- ・いろんなところに行けたこと 21人
- ・知らないことを学べてこと 10人
- ・スタンプラリーがたのしかったこと 8人
- ・友達と街を回れたこと 2人

質問4: 分からなかったこと・困ったこと

- ・どこに行くかわからなかった
- ・足が疲れて、痛くなった

質問5: 興味を持ったお話①

- 1位 回転砥石 36人
- 2位 白と黒のフナ 11人
- 2位 常光寺 11人
- 3位 子安池 7人

質問6: 興味を持ったお話②

- 1位 回転砥石 15人
- 2位 今福 10人
- 3位 白と黒のフナ 7人

質問7: カード以外に知っている話

- ・茨木童子 2人
- ・近松門左衛門 1人

質問8: 感想(自由記述)

- ・私は、スタンプラリーで一番心に残ったのは、子安池です。どうしてかっていうと私は、杭瀬幼稚園行っていたけど熊野神社に子安池という池があるとは知らなかったのでビックリしました。(女)
- ・知らないところもあつたけど全部回れて楽しかったです。白と黒のフナや浄光寺などは、まだ知らなかったの、行った時に知れてよかったです。ありがとうございます。(男)
- ・たまに通るところをあらためてこんな場所にこんなものがあることがわかった。自分の住む街にこういうのがあつて良かった。(男)
- ・僕は、スタンプラリーをするのが楽しかったです。どこがというとみんなと調べた所です。僕の家近くに浄光寺があつてよく見かけたりします。あと回転砥石をみて回くておもたそうだと思いました。(男)

- ・楽しかったことは、いろんな所に行って楽しかったです。カードの裏に昔の地図を組み立てるのが楽しかったです。初めて知ったことは、興法寺を初めて知りました。(女)
- ・子安池が昔からあったなんて思いませんでした。昔からあったものを知れて良かったです。(男)

児童のアンケート結果から、8つに場所についてすべて知らない児童があったが、自宅の近くにある場所は知っているものもあった。そして、その際、親から話を聞いている児童があった。しかし、全体的に地域の歴史文化遺産にちいて、子どもたちに伝承されているとはいいいがたい。したがって、スタンプラリーでの学習は効果があるものといえよう。

次に、授業を実施した杭瀬小学校3年生担当教諭へのアンケートを紹介したい。

○質問1：指導案を使用して授業をした感想を教えてください。また改善があれば教えてください。

→時間数、本時の展開はどうなっているのか。調べるのに、何時間かかりますか。

○質問2：授業を行う上で、子どもに興味を持ってもらう為に工夫をしましたか。

→用意してもらったカードが魅力的で、子どもたちの興味・関心を高めたと感じます。ありがとうございます。

○質問3：教材を使ってみてどうでしたか。改善すべきところはありましたか。

→子ども達は、心ひかれるキラキラのカードを大変喜んでいました。

ウォークラリーも2回分けて行ったのですが、「へえーこんな所があったのか〜」と喜んで学んでいました。

改善点は、写真の万丈堤とスタンプ帳の場所が違うので困りました。

スタンプ帳は、読み方が「こうほうじ」になっていたが「きょうこうじ」になっていた。スタンプの回転砥石と白と黒のフナがよく写らなかったです。

○質問4：街歩きをしてみた感想をお願いします。

→いつもの校内めぐりより、私達自身が知らなかった場所にも連れて行ってあげることができて良かったです。せっかく用意していただいたので、ラリー当日もゼミの方達にポイントに立ってもらったりして活動ができたなら、子どもたちが小グループで活動させることができてもっと楽しく学べたかとも思います。

○質問5：街歩きをしてみたどの様な点に気をつけて子どもに指導していくべきだと思いましたか。

→今回は単元・行事のかねあいもあり、六月に実施しました。みんなで並んでいってしまった形になりましたが、やはり小グループで探検するように行けたほうが良かったかなと思います。

今回は学生の企画を授業で実施していただいたが、コースの設定や内容について、改善すべき点があったことがわかる。また、まち歩きを実施するにあたっては、PTAや地域の方々、学生ボランティアなど多くの協力が必要であり、グループごとに回るためには、綿密な授業設計が必要だと思われる。

しかしながら、スタンプ帳とカードという教具は児童の関心を高め、興味をもって学習に取り組むことができた。

さて、杭瀬小学校の授業で取り上げた地点は必ずしも史跡のような文化財ではない。史実ではない民間説話が含まれている。また、その話にまつわる遺跡や遺物が存在しているわけではない。しかし、地名を含め、伝説や昔話、民間

信仰などの伝承資料も地域歴史文化遺産として重要である。柳田國男は、民俗学は、

事象そのものを現象としてありのままに凝視し、「わかっている」「当たり前」だといわれているその奥の真理を洞察する8ことである。常民の自ら知らなかったこと、今もなお知らないことに心づくことが我々の学問なのである。（柳田國男 1934年）と述べている。何げない言い伝えこそ身近な地域歴史文化遺産であり、それらを発掘したうえで、社会科の教材として、その地域独自の教育プログラムの開発が求められているといえよう。杭瀬小学校の取り組みを今後改善を加え、児童の地域理解に結びつくよう検討を重ねたいと思う。

むすびにかえて

以上、本稿では、現代社会において民俗文化財がおかれている状況を把握したうえで、小学校学習指導要領の社会科でとりあげる「地域の人々の生活」や「伝統文化」に関する教育プログラムを策定する上での課題について検討を加えてきた。

そして、昭和20年代から昭和30年代にかけて柳田國男をはじめ、民俗学者たちが取り組んだ小学校社会科教育を紹介し、兵庫県下の中間農山村の事例（篠山市）と都市部の事例（尼崎市）について検討を加えた。いずれの事例も課題が多いが、それぞれの地域の個性を活かした教育プログラムを開発し、地域歴史文化遺産の継承の担い手である児童に「史心」を養うことが必要であると考えられる。

そのために小学校区毎の地域歴史文化遺産を教員が知ることが求められるが、教員に余裕がないのも実情である。伊藤純郎は、「地域に出て、教材研究」をする郷土研究と、「地域を活かした授業作り」である郷土教育に対し、教員が苦手意識を抱いていることを危惧している。そして、その状況を克服するために、①郷土研究と郷土教育

の能力を持つ教員の養成②民俗学と社会科教育の連携を指摘する。

①については、学校教育において「同僚教員や地域住民との「学びの共同体」の構築」が必要であるという。域学連携の杭瀬小学校区学習センター運営会議がそのような教育内容に踏み込んだ場になることも期待される。

②については、民俗学の研究成果を学校教育に還元する取り組みが求められているといえよう。それは、小学校区単位のコミュニティに根差したものでなければならない。本学では、地（知）の拠点整備事業の地域志向教育研究で、「地域資源を活かしたまちづくりモデルの構築」という研究をすすめ、平成28年（2016年）には、尼崎市の伝説を集めた『尼崎百物語』を刊行した。現在、そのデータベース化の作業を進めている。このデータベースの特色は、単に地域の伝説を紹介するだけではなく、根拠となった文献情報や遺跡地を明確に示すなど、調査・研究ができるものとなっている。その活用事例を蓄積することにより、豊かで深みのある地域学習が可能となる。

今日のコミュニティの脆弱化や生活様式の変化により、民俗文化を伝承する力は弱っている。家の年中行事や地域の行事、祭礼行事等で中止せざるをえない危機的な状況におかれているものも少なくない。しかし、県・市・町の文化財行政においてその実情を的確に把握したものは多くはない。

文化庁は、平成5年（1993年）から「祭り・行事調査」を実施してきた。その調査の趣旨は、

これまでにも各種の民俗文化財の調査を行い、その現況についての把握に努めてきたところであるが、今日の急激な社会的環境の変化によって行事の形態が変貌し、消滅の危機にさらされているのが現状である。そこで、本調査は各都道府県内に広く分布する無形民俗文化財のうちから、祭り・行事をリストアップし、文化財保護の立場から主要なもの

について現況を調べ、保護施策立案の基礎資料とし、あわせて地域文化の高揚に資することを目的とする。

というものである。平成 28 年度現在、すでに 30 を超える都道府県で調査が実施され、報告書が刊行されている。兵庫県では平成 29 年度から 3 か年で「祭り・行事調査」に取り組むことになった。この調査で得られた基礎資料をもとに、「魅力あふれる地域づくり」「ふるさとを愛するひとづくり」に活用することが期待されている。この行政調査には、多くの民俗学研究者が参加する予定であるが、ここでの成果を社会科教育に活用できる仕組みについても考えていく必要がある。

現代社会において、地域社会の伝承力を高め、民俗文化の持続可能性を維持するために学校教育の持つ意義は大きい。学社連携に加え、民俗学研究者と教育者の連携を深めた教育プログラムを構築していくことが今後の課題と言えよう。

【参考文献】

- 柳田國男 1934 年 『民間伝承論』 共立社
成城教育研究所編 1947 年 『社会科の新構想：柳田國男先生談話』
柳田國男 1948 年 「社会科のこと」(『民間伝承』12 卷 1 号)
民俗学研究所編 1949 年 『社会科の諸問題』(三省堂)
柳田國男・和歌森太郎 1953 年 『社会科教育法』実業之日本社
柴田勝ほか 1956 年 「座談会 社会科と民俗学」(『民間伝承』20 卷 11 号)
柳田國男 1977 年 『青年と学問』岩波文庫
今野円輔 1983 年 『柳田國男随記』秋山書店
谷川彰英 1988 年 『柳田國男と社会科教育』(三省堂)
日本民俗学会編 1989 年 『民俗学と学校教育』(名著出版)
谷川彰英 1994 年 「「社会科」存立の可能性と条件-柳田國男の民俗学の視点から-」(『社会科教育論叢』第 41 集)
千葉徳爾 1994 年 「福崎地域の民俗事象と全国的位置づけ」(『福崎町史 第一巻 本文編 I』福崎町)
文部科学省 2006 年 『小学校学習指導要領解説 社会編』(文部科学省)
竜田孝則 2010 年 「成城学園初等学校における「柳田社会科」の実践とその廃止」(『技術マネジメント研究』第 9 号)
関口敏美 2012 年 『柳田國男の教育構想 国語教育・社会科教育への情熱』塙書房
伊藤純郎 2014 年 「教育学と民俗学」(『日本民俗学』第 277 号)
兵庫県文化財保護審議会 2015 年 「地域の文化を発展的に受け継ぐために-地域の持続可能性に文化が果たす役割-」(兵庫県教育委員会文化財課)
伊藤純郎 2016 年 「学校教育と現代民俗学」(『現代民俗学研究』第 8 号)

授業における関心・意欲・態度の向上を目指すタブレット端末活用リーフレットの作成

研究代表者：堀田博史

研究協力者：小田桐良一， 尼崎市立教育総合センター・民谷洋二， 尼崎市立小田北中学校・宮田仁
尼崎市立名和小学校・吉田哲也， 関西大学大学院・野口聡， 関西学院大学・時任隼平

1. はじめに

現在，文部科学省や総務省は，平成 32 年までの 1 人一台のタブレット端末の ICT 環境整備に向けた様々な事業を進めています。

尼崎市の小学校でも，平成 27 年度にコンピュータ室にタブレット端末 40 台を導入，中学校では今後，環境整備が進められる予定です。

本研究では，尼崎市立教育総合センター等と協働して，市内の中学校 1 校をモデル校に設定，昨年度までに整備したタブレット端末等の機器類のほかにプロジェクタを導入して，生徒の授業への関心・意欲・態度を向上させる実践を行い，普及を目指したリーフレットの作成を目標としました。

本稿では，中学校の授業におけるタブレット端末導入が，生徒の関心・意欲・態度の向上にどの程度役立ったかを体育科のマット運動の授業をもとに考察します。

2. 授業概要

中学 1 年生保健体育・単元「マット運動」の単元目標は，マット運動で前転や後転を正しく行うことができ，自分が応用した技を発表することができる。マット運動で自分の身体動作のどこを改善すればよいかを発見し，改善できる，です。

タブレット端末の活用は，グループごとにタブレットで各生徒の演技を動画撮影し，演技直後に動画再生，自分の演技を振り返る場面や皆で動画を見て改善点を話し合う場面です。



図 1 マット運動でタブレット端末を活用する様子

3. 質問紙調査の結果と考察

タブレット端末を活用した生徒の反応は，「自分では手先や指先を伸ばして美しい演技をしたつもりでも，直後に自分の演技を動画再生して見て，できていないことがすぐにわかり，次の演技で身体動作の何を意識しなければならないか目標がもてたのが良かった。自分の気づかなかった演技の改善点をグループの他の生徒が指摘してくれてわかりやすかった」等，生徒の肯定的な反応が得られました。

単元の最初と最後に生徒にアンケートを実施，41 名のデータを分析しました。

「知識理解・意欲」，「思考・表現」，「協働学習」，「タブレット端末の活用」のそれぞれの因子で，事前・事後の対応のある t 検定を行いました。有意差は見られませんでした。そこで，因子内の項目ごとに事前・事後の分析を同じくおこなった結果，「思考・表現」の因子を構成する「体育の授業で発表するときには，自分の考えや意見を他の人や先生に分かりやすく伝えることができていると思いますか(t(40)=2.17, p<0.05)」，「体育の授業では，じっくりと考えて自分の考えを深めることができていると思いますか(t(40)= 2.25, p<0.05)」の 2 つの設問で，「協働学習」の因子を構成する「グループ学習に，進んで参加することができていると思いますか(t(40)= 2.57, p<0.05)」の設問で，「タブレット端末の活用」の因子で構成する「カメラで撮った動きを見ることができたと思います(t(40)= 2.05, p<0.05)」の設問において，有意な差が見られました。

詳細な分析が必要ですが，タブレット端末を活用した授業設計が，生徒の授業態度に何らかの変化を与えたと予想できます。今後，このような実践をまとめたリーフレットを作成して，普及に努めます。

地域に向けた手洗い指導の拠点の構築

研究代表者：山本恭子

共同研究者：木村保司、田淵正樹、熊谷桂子

【はじめに】

インフルエンザやノロウイルス感染症は毎年流行し、人々の生活に大きな影響を与えている。これらの感染症では、ほとんどの患者が家庭で療養することから、大流行を防ぐためには地域における感染対策が必要である。そこで、本研究では公民館を拠点とした手洗い講習会を開催し、地域住民の参加状況と手洗いに対する意識を調査し、より有効な感染対策の拠点について検討した。

【方法】

尼崎市内の全公民館（6 公民館）に感染予防のための手洗い講習会の開催を依頼した。より多くの参加を促すために、骨塩量の測定と骨粗鬆症の講話を同時に開催した。また、「つながりプロジェクト」の一環として行い、手洗い講習は、講義を通して手洗いの除菌効果や方法、および指導方法について理解を深め、事前に模擬講習会を行い準備を整えた学生により施行した。

手洗い講習会：インフルエンザ、ノロウイルス感染症の概要と対策について説明し、感染対策に向けての手洗いの重要性を理解した上で、蛍光ローションを使用した手洗い効果の検証実験を行い、ポスターを使用して有効な手洗い方法を説明した。

手洗いに関する意識調査：講習会終了後、アンケートにより行った。

【結果】

参加状況：尼崎市の6つの公民館全ての公民館に協力いただき、中央公民館 13 名、園田公民館 17 名、武庫公民館 11 名、大庄公民館

10 名、立花公民館 26 名、小田公民館 20 名 合計 97 名の参加であった。年齢は 60 才代が 34.0%、70 才代が 33.0%と多かった。



手洗い講習会の効果：手洗い講習会前、感染症を防ぐために手洗いが重要だと思っていたか、の問いに対して「思っていた」が66.0%、「なんとなく思っていた」が27.8%であったが、講習会受講後は「思う」が99.0%となり、ほとんどの人が確実に認識するようになった。以前に感染予防のための手洗い方法を習ったことがない人が約7割で、今回のような手洗い方法をあまり知らなかった人、知らなかつ

た人を合わせると約3割であった。ポスターを使用した説明はほとんどの人がよく分かったと答えた。蛍光ローションを用いた手洗いの検証実験の感想では、「自分の手洗いの不十分さに気がついた」「手洗いの難しさに気がついた」「驚いた、ショック」という記載が多くみられ、その他では視覚的に見ることができると、「分かりやすい」という記載が多くみられた。さらに、96.9%の人が講習で得られた知識を家族等、誰かに伝えたいと思っていると答えた。また、講習会への参加のきっかけとしては「手洗いに興味があった」が46.4%であったのに対して、「骨粗鬆症の講話があるから」が69.1%、「骨密度測定ができるから」が68.9%であった。学生が参加したことについては93.8%が良かったと答えた。その理由としては「若さがもらえる」、また、学生が「親切」、「丁寧」であることから「和む」「楽しい」「一生懸命が伝わる」などが挙げられた。また、実習などでは人数が多いので行き届いた対応ができていることが挙げられた。

さらに、「学生と一緒に学習できた」「学生の為になる」などの相互交流を示唆する意見もみられた。



【考察】

今年度も昨年度に引き続き尼崎市の全ての公民館に協力していただくことができ感謝

している。手洗いは日常的に習慣化している行為であるが故に、「手洗い講習会」というだけでは人が集まりにくい。そこで今回は人を呼び込むために骨塩量測定と骨粗鬆症の講座を同時開催した。アンケート調査の結果よりこれらが人を呼び込むことに有効であったことが示唆された。講習会前はそれほど関心を持っていなくても、講習会を受けることで手洗いの重要性を認識することができ、手洗い技術も伝えることができた。また、我々が目的としていることは参加者に、感染予防のための手洗いを広めてもらうことであるが、ほとんどの人が誰かに伝えたいと思っていることから、ポスターを持ち帰って配ってもらうことも有効ではないかと考える。今回から学生による手洗い講習会を実施したが、参加者の評価も良く今後も継続が望まれる。

地域資源を活用したまちづくりモデル構築のための基礎的研究 —歴史文化遺産としての民俗文化財の発掘—

研究代表者：大江篤

共同研究者：垣東弘一、久留島元、上相英之、岡本真生、柏原康人、久禮旦雄、今井秀和

研究目的

尼崎市のシティプロモーション指針に、尼崎市は「①実態と違うイメージを持たれている。②まちの魅力が十分に伝わっていない。③地域の個性（エリアごとの特徴）が魅力に結びついていない。④子育てファミリー世帯の転出超過の原因と考えられる治安や教育の問題」の4つの課題があげられている。

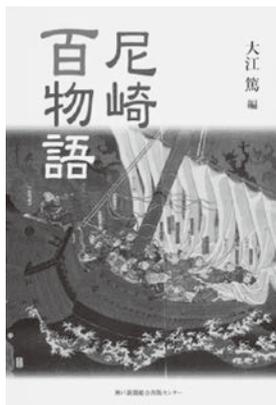
この課題を解決し、魅力あるまちづくりを推進していくために、地域の資源としての歴史文化遺産を発掘し、地域住民の手で活用できるようなデータベースを作成するとともに、まち歩きやボランティアの人材育成等の企画を行うことを目的とする。

研究計画

4年目となる平成28年度は、これまでの研究成果をふまえたデータベースから100話を選んで紹介、解説した『尼崎百物語』を4月に刊行した。また、公開データベースの構築を行う。

研究成果

①大江篤編著『尼崎百物語』刊行



伝説データベースをもとに、尼崎の6地区にまたがる100話を選定。尼崎市立地域研究史料館と連携し、神戸新聞総合出版センターから刊行した。本書は尼崎にまつわる伝説、伝承を紹介するとともに、研究成果をふまえたブックガイド、伝承地をめぐるまちあるきマップとしての性格を備える。それにより読者に地域の魅力を伝え、能動的な学びを喚起するよう企画した。

また、100話の紹介とは別に尼崎の地域伝承の性格を明らかにするため、「土地の記憶を伝承すること」「水神信仰と住吉大社」「近世・近代の「怪談」文化」「各地の残念さん信仰」をテーマとした論考を収めた。

編著者 大江篤

執筆者 久禮旦雄・久留島元・岡本真生

尼崎市立地域研究史料館

辻川敦・河野未生・中村光夫

写真提供 尼崎市立文化財収蔵庫

尼崎市都市魅力発信課

②データベース試作



『尼崎百物語』を地域歴史文化遺産として、活用できるツールとするため、公開データベースの制作に取りかかった。データベースでは、各物語の典拠となった文献資料の書誌情報（国会図書館、尼崎市立中央図書館、尼崎市立地域研究史料館、園田学園女子大学図書館のOPACにリンク）及び地図情報を掲載する。

また、書籍刊行後の調査により、明らかとなった情報や地域の方から提供いただいた情報を追記することができる、「成長するデータベース」を目指す。

データベースのデザイン、構築については、上相英之と垣東弘一が作業を行い、尼崎市立地域研究史料館と協議を行った。

③調査活動

(ア) 仁徳天皇と難波の梅

(大江篤)

2017年1月13日に尼崎市立地域研究史料館にお

いて廣岡松治郎（1934年生）氏より、聞き取り調査を実施した。



尼崎市東難波にあった廣岡家は、第二次世界大戦末の昭和20年（1945）8月5日に芦屋市に疎開をした。その際、馬力で家の古文書などを運び込んだ。ところが、翌6日の明け方に芦屋市が空襲にあい、すべて焼失してしまった。尼崎の家に残ったものが、伝来の「難波の梅」の古木と「近松門左衛門筆襖絵（梅の絵）」である。いずれも現在、尼崎市立地域研究史料館に寄託されている。また、廣岡家には「廣岡に 植ゑし楠まで 梅になり」という歌が伝えられている。廣岡（2009）によると、「天正6年（1578）12月、織田信長が伊丹有岡城の荒木村重の謀反を咎め、戦端を開いた時、尼崎の廣岡に加勢を求めたが、我が家の先祖は、南北朝時代の楠木正成の血を引く武士の血筋であるが、古来尼崎難波の里にある梅の古木を末長く守護する家柄であるので、この度のお誘いは辞退したいと申し入れ、これを聞いた信長は上記の一句をものにして、快く承諾したという。」という伝承があったことが記されている。

梅の古木はかつて裏の前栽にあった梅の木ではないかという。また、東難波八幡神社の境内にも梅の木があった。

・地域研究史料館（1984）「廣岡家旧蔵「近松門左衛門筆襖絵」について」（『地域史研究』第14巻第1・2合併号）
・廣岡松治郎（2009）「廣岡に 植ゑし楠まで 梅になり」（『ニチメン（日綿）大阪社友会報』）



（イ）長遠寺の火除の大黒天

（柏原康人、上相英之）

2017年1月24日に長遠寺で調査を実施した。「火除の大黒天」を実見し、焼け跡があることを確認できた。「大黒天木像由来書」については、同寺が阪神淡路大震災で被災した際、所在不明となっている。今後継続調査を実施する。



③講演会、研究報告など

- ・2016年7月16日、（大江・久禮）
「地域歴史遺産としての怪異伝承—『尼崎百物語』を起点として」（大学COC+シンポジウム、尼崎商工会議所）
- ・2016年8月9日10日、（大江・久留島・柏原・岡本）
大江「お化けの学校～尼崎百物語1～」
久留島「お化けの学校～尼崎百物語2～」
柏原「お寺の本から見える世界」
岡本「お化けの学校～尼崎百物語3～」
- ・2016年10月2日、（岡本）
「「残念さん」信仰—幕末維新期に発生した流行神をめぐる—」（日本民俗学会第68回年会、千葉商科大学）
- ・2016年11月12日、（岡本）
「幕末維新・残念さん」（奈良県下市町文化講演会）
- ・2017年2月（今井・久留島・大江）
怪異学セミナー（園田学園女子大学）
今井「化け地蔵の伝承—妖怪化する仏像—」
久留島「撰津源氏と能勢・尼崎—『尼崎百物語』から—」
大江「流され人の物語—『尼崎百物語』から—」

地域と大学の連携・協働による子ども・子育て支援

研究代表者：影浦紀子

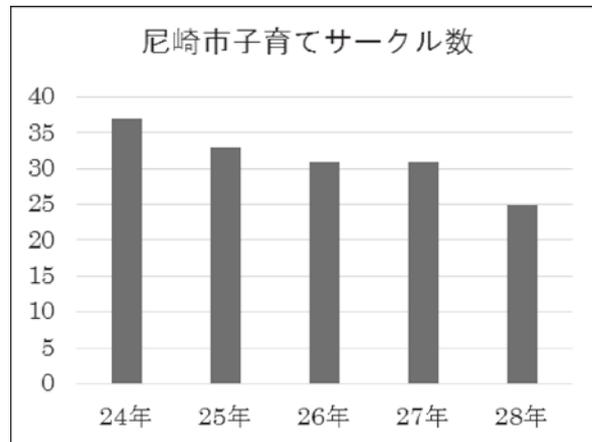
研究協力者：金岡緑、林理恵、中見仁美、東本幸代

子ども・子育て新制度がはじまり、ワークライフバランスという呼びかけのもとに、地域の子育て支援は充実してきている。保育所や認定こども園など就学前の保育、子育て支援が充実してくるなかで、尼崎市でも子育てサークルが減少しつつあるなど、子育て支援の課題も変化してきている。

そこで、本研究では、①子育てが楽しいと感じる主体的な子育てや、親としての成長にとってどのような要素が重要であるかということ明らかにすること、②子育て支援の専門性と専門職養成カリキュラムづくりを目的とした。

今年度は、これまでフィールドとしている尼崎市が園田地区で行っているウェルカム事業「ママカフェ」での調査を行った。3年目になるママカフェでは、毎回、10組程度の親子が参加しており、そのうちの1/3程度がリピーターである。リピーターの中には、保育所への入所や、地域の育児サークル活動への参加を理由に次回から来られないという声もきかれるようになってきた。つまり、これまでの調査でも明らかになってきたように、ママカフェが「プラットフォーム」としての役割を果たしてきているといえる。そこで、毎回、行っている参加母親へのアンケートに保育施設への入所や他のサークルへの参加を問う項目を追加し、ママカフェからほかの地域の活動や保育施設へのつながりを調査した。

子育てサークルの数が減少していく中で、存続、発展しているサークルもある。そこで、なぜ減少するのか、全体的に減少している中でなぜ存続、発展するのかについて、子育て



サークル代表者への聴き取りとサークルに参加している母親へのアンケートを行う予定である。

子育て支援の専門性について明らかにし、子育て支援専門職養成のためのカリキュラムづくりを目指して、今年度は、「つながりプロジェクト 地域子育て支援」において、学習の内容（対象の理解について知識、かかわり方のスキル、かかわり時の配慮など）と学習方法（ロールプレイ等のワークショップ形式、インタビュー調査による対象者理解、子育て支援企画・実践）を構想し、実践した。また、



図1: つながりプロジェクト「子育てに困難を抱える母親と幼稚園教諭のロールプレイ」

授業以外に地域の子育て支援イベント「そのっ子フェスティバル」では学生たちによる人形劇が行われた。

年度末には、立花地区の子育てサークル交流会を学生と共同企画し、開催予定である。これは、親子と学生が触れ合いながら、母親同士の交流を促し、サークル活動を活性化することが目的である。学生にとっては、子どもや保護者への対応を体験的に学ぶことを目的としている。



図 2: つながりプロジェクト「ファミリーサポート協力会員さんのお話」



図 3: つながりプロジェクト「子育て中の母親へのインタビュー」

災害伝承を活用した地域防災教育プログラム構築に関する研究

研究代表者：野呂千鶴子

共同研究者：大江篤、安富信、上相英之、石原凌河、谷岡優子

研究目的

過去の災害にまつわる災害伝承や度重なる被災経験の記憶を、防災・減災という観点から効果的に抽出・評価することにより、地域防災・減災力強化する仕組みを構築することである。これを実現する為に、伝承の収集や地域とのワークショップを通してデータを収集整理する。その上で、各地域の伝承を活用したクロスロードや防災マップの製作など、現地の実際に合わせる防災教育をデザインすることを目的とする。

研究計画

平成28年度は、尼崎市域北部の猪名寺自治会・南清水自治会（以下、両自治会を示すときは園田北地区とする）をフィールドに、地域課題の抽出と防災まち歩き、さらに防災ゲームを使用した多世代交流型のワークショップを開催し、主に地域の防災意識の調査を行った。

成果

①地域課題抽出WS



日時：2016年7月26日

場所：猪名寺会館・法光寺

参加人数：地域住民22名・学生12名

概要：猪名寺地区の住民22名とともに、園田北地区の地域課題を抽出するためのワークショップを実施した。結果「交通」「買い物」「商店」「病院」などの課題が多く出されたが、防災関連の課題は殆ど抽出されず、防災に関しては比較的意識が低

い地域であることが分かった。これは猪名寺廃寺跡があることからわかる通り、園田北地区が猪名川流域とはいえ、盤石な土地であり、過去に大きな災害に遭ったことがないことが原因と思われる。

②防災マップ作成

■猪名寺自治会



日時：2016年8月8日

場所：猪名会館

概要：猪名寺自治会の住民と本学学生との混成グループを3グループ作り、それぞれのグループが地図を持ち、地域を歩きつつ、「災害時に避難場所になりそうな箇所」「消火栓など災害時の備えの場所」「危険な場所」を地図に落としていった。尼崎市立園田北小学校の児童2名も参加し、グループ毎の地図を集約しながら、聞き取り調査を実施した。聞き取り調査の内容からも、過去の災害の記憶をほとんど聞くことができなかった。

■南清水自治会

日時：2016年8月22日





場所：南清水福祉会館
 概要：猪名寺自治会と同様にまち歩きを行い、防災マップを作成した。

③猪名寺歴史講演会

日時：2016年9月11日

場所：猪名寺法光寺

題目：「未来につなぐ地域の歴史文化遺産」

大江篤

猪名川と猪名寺の暮らしに係る伝承を紹介しながら、地域の持続可能性に歴史文化遺産が果たす役割の重要性を指摘した。

④園田北こども防災フェスティバル



日時：2017年1月14日

場所：尼崎市立園田北小学校

参加人数：小学生7名・中学生10名・高校生6名・地域住民30名以上

概要：園田北小学校の視聴覚室にて、ゲームで防災・減災を学ぶフェスティバルを本学学生が企画し、実施した。地域課題抽出WS及び防災マップ作成から、当該地域は防災意識が高くないことが明らかとなったため、防災教育を行うにあたり、ゲーム形式での取り組みとした。ゲームは、SHUFFLEゲーム、CROSSROAD、ANAGASAKI FUTUREGAMEを行った。

園田北小学校・園田中学校・尼崎稲園高校の児童・生徒に参加を呼びかけ、結果、小・中・高・大・地域住民の多世代の約60名が集まり、ゲーム



を通して防災を学んだ。

アンケート結果は概ね良好であり、特に、色々な世代と意見交換ができたこと、ゲームを通じて楽しく防災を学ぶことができたことを評価する意見が多く得られた。これらの評価は今後の防災教育プログラム開発の指針として取り込んでいく。

これまで園田北地区の防災訓練などでは、多世代の参加がみられず、地域行事において、小・中・高校生が協働する災害時に重要とされる地域住民のネットワークづくりに有効であると思われる。

⑤園田東避難訓練

日時：2016年11月13日（日）

場所：園田東小学校

参加人数：園田東自治会住民約300名とボランティア(本学や他学の学生、防災ボランティア等)

平成28年度避難訓練実行委員会が11月2日に開催され、企画・運営について参画した。

これまで、自治会ごとに集合し、避難行動をとってきたが、今回は発災後それぞれが避難所になる小学校体育館に集まり、段ボールを用いて避難所設営を行うという積極的参加型の訓練になった。避難行動だけではなく、その後の「生活」を考え環境づくりを協働でおこなうことによって、避難所コミュニティづくりが促進されると考える。今後も積極的な避難訓練の企画・運営に参加し、防災・減災意識の向上に貢献したいと思う。



「健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について」

研究代表者：餅美知子

共同研究者：松葉真

【はじめに】

このプロジェクトは、尼崎市にある「食をとおしての健康づくりを推進している店舗」である“食の健康協力店”へ学生による栄養に関するかわりと働きかけを行うプロジェクトである。先行研究として“食の健康協力店”からの大学（食物栄養学科）へのニーズを調査し、今年度は、そのニーズに対応出来る店舗を尼崎市地域ごとに定めその店舗を基幹店と定めて活動の輪を広めていくプログラムの立案に取りかかった。

【活動の経緯】

尼崎市内の“食の健康協力店”のマッピングを行い、尼崎市各地区にどれ位の“食の健康協力店”が点在しているのかを地図上に落とし込み、登録分布状況を全員で把握し、各地区の担当が基幹店の抽出を行った。

【店舗側への対応と実践活動の紹介】

1. 学生が店舗に出向き、事前に知り得た要望と各店舗の特徴を目視して、店舗で提供されている一押しメニューの食材を購入後、秤で分量測定、栄養価計算を行った。
2. 栄養価計算結果の報告書、並びにリーフレット作成を行う。
3. 不足しがちな栄養素についての指導用パンフレット作成やメニューの提案を行う。

【地区別基幹店の栄養価計算を実施した献立】

- ① 立花地区：餃子の王将では、定番料理である、あんかけチャーハンとぎょうざ
- ② 中央地区：ダイニングキッチン大浜では、定番料理である元祖珍珍鍋
- ③ 武庫地区：イタリアンレストランエマーブルでは、ミートクリームパスタとサラダ・パン
- ④ 小田地区：モスバーガーでは、人気のテリヤ

キバーガー・オーガニックにこだわったバーガー

- ⑤ 立花地区：老舗の松葉寿司では、散らしすし、にぎり寿司、上巻き寿司など

【各店舗の献立の結果と特徴・今後の対応】

① 餃子の王将

要望：栄養価計算をしてほしい。

結果：不足栄養素は、食物繊維とビタミンCで、補給には赤や黄ピーマンを使用しレバニラ炒めや野菜炒めを注文するとよい。

② 大浜：素材の良さ

要望：栄養価計算をしてほしい。

結果：たんぱく質、食塩相当量が基準値より多い
今後：客層が50代の方が多いため、美味しく健康に気遣える鍋や小鉢料理（減塩メニュー）を提供していきたい。

③ エマーブル：ベビーカーで入れる野菜ソムリエの店

要望：栄養価計算をしてほしい。

結果：オリーブ油による脂質が多くなっている。
今後：旬の食材の効用についてのポスター制作

④ モスバーガー：心のやすらぎ

要望：人気メニューの栄養価計算をしてほしい

結果：重量が軽いわりにエネルギーと脂質が多い
今後：当店のハンバーガーの栄養成分と他店のハンバーガーの違いをお客様に伝えたい。

⑤ 松葉寿司：老舗の味と心をお届けします。

要望：料理の栄養価計算

結果：食塩相当量は基準値より多く食物繊維が少ない傾向にあった。食物繊維は、栗・アボカド・きんかん・ひじきに含まれています。

今後：高齢者に向けた嚥下メニューや不足栄養素を補ったメニューの提案をしてほしい。

◆まとめとして

今回、各店舗の栄養価計算を行うにあたり、店舗側との折衝から始まり、こだわった食材・調味料・調理された料理を学生が栄養価の分析を行う。

いつ？ どんな時に食べるのが良いのか？ 何と一緒に食べれば良いのか？ などを考える場となり、今回の実践で学生と食の健康協力店がパートナーとして共に成長できる場にしたい

◆次年度は《無から形あるものへの挑戦》として園田学園女子大学生が考案した、ヘルシーメニューが餃子の王将立花店で登場します。



庄下川の河川環境を利用した児童生徒のための親水プログラムの構築実施

研究代表者：衣笠治子

研究協力者：近藤照敏、山本起世子、西村邦子、松浦秀一

1. 28年度の目的

本年度は、小学生を対象にした親水プログラムを構築運営することを目的とした。尼崎市制100周年にあたり、連携先である尼崎市立衛生研究所が行う記念事業の一環として、庄下川自然観察会を実施した。本年度からつながりプロジェクトが開講されたことより、その履修学生も運営に携わった。2015年から行っている庄下川アメニティーゾーンの生物調査、2008年から実施している上生嶋橋での水質モニタリングも継続して行った。

2. 水質モニタリング

前年度と同様、大学南側の上生嶋橋から採取した表層水を試料とした。期間は2016年2月から10月の期間で、原則週1回、計28回実施した。水質検査項目の平均値は、DO 11.83mg/L、pH 8.89、COD 9.68mg/L、BOD 2.78mg/L、透視度 107.8cm、浮遊物質 5.5mg/Lであった。また、細菌検査は2016年2月から10月の期間、合計8回実施した。結果、一般細菌数は $1.94 \times 10^2 \sim 1.3 \times 10^4$ cfu/ml、大腸菌群数は26～110MPN、大腸菌数は $8.0 \times 10 \sim 1.9 \times 10^3$ MPNであった。尼崎市では、上生嶋橋より下流の尾浜大橋、波洲橋、庄下川橋でモニタリングを実施しているが、我々の結果と比較して、大きな差はみられなかった。



図1 水質調査の様子

3. 小学生を対象とした親水プログラムの構築実施

(1) 日程および募集

本年度は小学生を対象とした「まちの自然みつけた！庄下川観察会」を構築実施した。児童が夏休み自由研究としても利用できるように実施日は8月23、24日とし、15名の定員で行うこととした。この企画は尼崎市制100周年記念事業の一環として、尼崎市立衛生研究所と協働して実施したことより、募集は尼崎市広報媒体でおこなった。



図2 観察会の様子（水生生物調査）

(2) 学生リーダーの養成

プログラムの企画作業、運営は、衣笠ゼミに所属する学生、つながりプロジェクト6の履修学生および有志の学生、計22名が学生リーダーとして参加した。昨年度の地域志向教育研究の一部としてまとめた「親水プログラムを運営するための大学生ボランティアリーダーの養成」の手順に従い、学生リーダーの研修を行った。企画した内容にしたがって、1回1～2時間程度で4回の研修を課した。研修内容は、水質検査の手法、植物や小動物の名前や見つけやすい場所の確認、危険な場所、また児童への声かけの手法や、植物遊びなども学んでもらった。研修の度に、学生リーダーからの意見を求め、プログラム進行に生かすようにした。また、プ

プログラム当日に使用する観察ノートを作製した。観察ノートには近隣住民に行った聞き取り調査で得られた庄下川の歴史や水質検査項目などのコラムを加え、内容の導入やまとめのヒントになるようにした。

(3) プログラムの実際

プログラムは15名の児童参加者を3グループにわけて活動してもらった。はじめに全員で、気温、水温、COD、濁度、pHを測定した。その後、グループに分かれて、植物観察、水生生物の観察、プランクトンの観察を行った。植物観察は、河川敷で10分程度自由に観察し、調べてみたい植物を採集して大学に持ち帰り、ス



図1 観察会の様子(植物調査)

ケッチや、写真をとる、図鑑やインターネットを用いて、名前を調べてもらった。水生生物観察は、あらかじめ前日から仕掛けておいたトラップを回収し、捕獲できたものを観察した。プランクトンは、大学に顕微鏡を3台セットし、1つはパソコンとつないでモニター画面からも観察できるようにした。当日朝に採水し、プレパラートは予めいくつか作製しておいたが、学生リーダーにもプレパラートの作り方を研修してもらい、児童たち自身がプレパラート作製をできるように準備した。観察したプランクトンは顕微鏡の画面を写真にとり、記録が残せるようにした。また観察作業後、尼崎市職員に庄下川の水質等に関してお話をいただいた。

観察作業後、児童たちが観察の過程で写した写真は、児童の求めに応じてすぐにプリントアウトして配布できるようにした。また、魚や植物の形をかたどったカードを作っておき、その

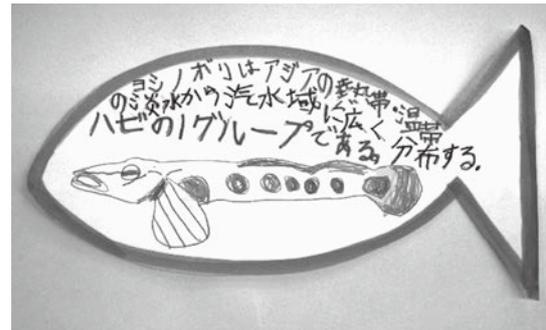


図4 児童が描いたヨシノボリのスケッチ中にスケッチ、写真、調べたことなどを書き込んでもらうようにした。その後、グループでそれらの記録を模造紙に貼りつけ、ポスターを作製し、10分程度の発表をしてもらった。

プログラム後に、参加児童および、学生リーダーに対するアンケート調査を実施し、またプログラム中の音声をICレコーダーで記録し分析した。昨年度までの親水プログラム後の分析で、リーダーの声掛けや関わりが多いほど子どもたちは楽しいと感じることがわかっており、本年度はそれらの結果をもとに、学生リーダーに声掛けの手法や植物遊びの研修を行った結果、児童に積極的に声をかけ、児童一人ひとりに耳を傾ける学生が多く見られた。植物観察の際も児童に興味を持ってもらうように伝え方や遊び方を工夫する様子も見受けられ、一定の効果があつたとみられる。

4. その他の活動と成果発表

尼崎市立衛生研究所の主催した「尼崎に宇宙飛行士がやってくる」(5月)、「子ども宿題研究所、科学実験プロフェッショナルラボ」(8月)には、学生がボランティアとして参加した。「サイエンスオアシス」(11月)では、学生がブースを出展し、自然観察会や庄下川の生き物についての報告を行った。

本年度行った水質検査、庄下川自然観察会、庄下川アメニティーゾーンの生物調査については、第5回武庫川市民学会(11月)でそれぞれ学生が中心になって口頭発表を行った。また、本年度までの研究成果である庄下川の生物相については、園田学園女子大学論文集 51巻(2017)で発表した。

「尼崎市に住む高齢者のための運動交流プロジェクト実践と普及」

研究代表者：林谷啓美

研究協力者：藤澤政美

はじめに

本研究の目的は、尼崎市における高齢者のためのオリジナル音楽・運動を考案し、それを普及することにより尼崎市に住む高齢者の筋力向上とコミュニティの拡大を目指すことにある。それらを高齢者と当大学学生との交流の機会とし、街の活性化につなげる。今年度の計画と実践は以下の通りである。

1. 平成28年度の計画

1) 社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会と連携し、オリジナル音楽とオリジナル運動DVD（監修：藤澤政美教授）をもとに、尼崎市立総合老人福祉センター、健康あま体操さずな（園田地区）、猪名寺調整クラブ連合会等にて本学2年生（今年度からの必修科目つながりプロジェクト⑦）とともに実施する。運動DVDは、リズム運動（制作：地域の高齢者・社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会）、準備運動、筋力運動、リズム運動、整理運動（制作：社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会・公益財団法人尼崎市スポーツ振興事業団、公益財団法人尼崎健康医療財団市民健康開発センターハーティ21）で構成されている。

2) リズム運動第2弾を地域の高齢者・学生とともに制作する。

3) 平成28年度の学園祭、尼崎市地区まつり等にて音楽・運動を披露する。

2. 平成28年度の進捗状況

1) プロジェクト名について

尼崎市の方々さらに愛される運動にしたいと考え、プロジェクト名を「PAPERPLANE運動プロジェクト」から「～人つむぎ尼つむぎ～プロジェクト」とした。筋力運動については、社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会の運動参加者アンケートにより「尼紡ぎ運動」と命名した。オリジナル音楽演奏の担当を紡ぎ家とした。

2) 研究者間（本学教員、社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会で打ち合わせを約1回/1か月行った。

3) 定期的な運動の実施について

尼崎市立総合老人福祉センター、あま体操絆（園田地区）で1回/1週間実施した。猪名寺調整クラブ連合会にて3回/1ヶ月実施した。中難波はなみずき会にて1回/1ヶ月実施した。本学2年生も運動に参加し、地域の高齢者と学生が交流しながら運動するこ

とができた。



図1 準備運動中の様子



図2 筋力運動中の様子

4) 特別講座について

平成29年2月15日、「そうだ！尼崎発の運動をしよう！」と題して、希望者にDVDの利用と指導方法についての講座を開催する予定である。

5) 運動の普及について

(1) 森の文化祭 in 尼崎の森中央緑地にて、日頃この運動に取り組まれている高齢者20人でリズム運動を披露し、来場者とともに実施した。

(2) 6月21日（火）尼崎市立総合老人福祉センターにて社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会の関係者向け勉強会を実施した。運動DVDを見ながら、各運動の効果や注意点などを1つ1つ確認しながら実施した。

(3) 社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会の協力に

より、大庄まつり（平成28年9月18日午前）に参加した。園田カーニバル（平成28年9月18日午後）に参加の予定であったが、雨天中止となった。

（4）平成28年度の本大学学園祭（平成28年10月22日）にて音楽・運動を披露した。当日は、日頃運動に参加している高齢者30名（尼崎市立総合老人福祉センター、あま体操きずなのメンバー）、本学2年生7名、卒業生3名、バンド紡ぎ家4名、研究者、社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会による披露となった。高齢者の運動成果発表の場となり、今後も交流しながら運動を継続することになった。運動普及Tシャツは、本学看護学科の4年生がデザインした。

（5）運動DVDを制作したことに対して新聞社4社に記事として掲載してもらえることができた。5人以上の運動実施グループにDVDを進呈することをアナウンスしたところ、約60件の問い合わせがあった。

6) 新規の音楽・運動

リズム運動第2弾を考案した。音楽は、地域の高齢者から学生へ、学生から地域の高齢者へのメッセージソングを制作し、CDを作成した。リズム運動の内容は、地域の方々と学生が共同で制作し、準備運動、整理運動は尼崎市社会福祉協議会が考案した。筋力運動の内容は前回と同様ではあるが、

本学学生がモデルとナレーションを担当した。今年度中に完成予定である。

おわりに

今後も関係機関と協働・連携しながらさらに普及・啓発していく。



図3 学生企画の「楽しい脳トレ」



図4 運動後の地域の方々と学生の交流

学生を主体とした、地域学校への情報教育応援活動 —小学校でのプログラミング教育—

研究代表者：難波宏司

研究協力者：村端慶治

1. はじめに

平成28年12月の中央教育審議会答申では、新学習指導要領で、小学校の段階からプログラミング教育を実施することを提案している。小学校段階でのプログラミング教育は、プログラミングの楽しさとプログラミングの役割を実感させることにありと考える。そのためには、楽しくプログラミングを体験できる（特にロボットなどの結果が実感できる）教材で児童が主体的に学習に取り組める教育環境が望ましい。しかし、現状の教育現場では、プログラミング教育を指導できる教員は少なく、予算の関係から、教材を揃えることが難しい。また、児童の主体性を重視し、成功体験を与えるには、きめ細かい指導のできる多人数の補助員が必要となるがその確保も現実の学校では難しい。そこで、本学学生が児童に対するプログラミング教育の支援を行うという活動を提起した。本学学生にとっても、プログラミングを教えるという活動を通じてプログラミング的思考の進化を促すと伴に、現場での「教える行為」を通して知識や理論を知恵へと変える経験値教育につながり、コミュニケーション能力や人間関係力の向上を促す効果があると考えた。

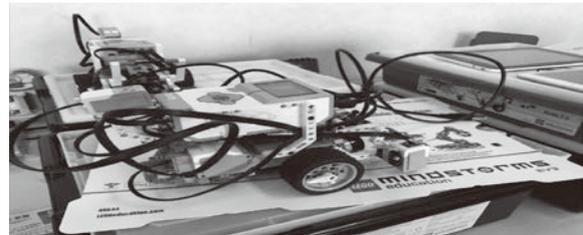
2. 教育内容

初等教育におけるプログラミング教育は世界的に進められている。イギリスでは2013年より小学校で情報教育の教科が実施され、アメリカでは教育用プログラミング言語や教育界サイトが開設されている。また、欧米ではコンピュータの仕組みを学ぶ「フィジカルコンピュ



図1 Scratch サイト 1

ーティング」に基づく教材が開発され、北欧を中心として自由に変形できるロボット教材が開発されている。こうした教材を各種検討した結果、ビジュアルプログラミング言語「Scratch」を使って、組み立てブロックのレゴを制御する教育構成を採用することにした。Scratch はフリーソフトであり多くの学校で導入しやすいと考えた。また、レゴは古くから日本に導入されており指導のノウハウの蓄積がある。



3. 本年度の活動

こうした教材を基に本学学生有志4名が指導することになった。10月より教材研究を開始し、近隣の立花西小学校で平成29年1月23日より4回クラブ活動の時間に6年生20名を指導することになった。同小では事前にScratchの使い方について既に学んでおり、その延長としてレゴでこちらで組み立てたロボットを制御するという内容である。教育効果については現在分析中である。

「生活」をテーマに、地域に根差した生涯学習プログラムの開発
生活の知恵再発見（食生活、衣生活編）

研究代表者：深津智恵美

研究協力者：川原崎淑子，山口律子

1. 目的

生活の営みの多くは、古くから経験に基づく細かな工夫や知識が祖母から母へと受け継がれ、現在では「おばあちゃんの知恵」として伝承されている。

しかし現在の生活を見ると簡便志向に走り、また商業ベースに乗った便利品に慣れてしまい、多くの無駄を生み出している。この生活の見直しを図ることを目的とし、本学の生涯教育センターのノウハウを生かした地域に根差した学習プログラムの開発を行い、園田の生涯教育を通じて「生活の知恵」を発信したい。

2. 研究計画

生活に関わる身近なテーマを中心にプログラムを構成する。初年度は、「衣」と「食」の2つの実習事業を実施する。終了時のアンケート調査から、今後継続できるテーマで、ニーズに合わせた内容のプログラムを、展開させてゆく。

3. 活動結果

1, 衣生活編 みんなのサマーセミナー

わくわくステンシル（子ども向け染色実習）

平成28年8月6日（土）実施 参加者40名

2, 食生活編 調理実習

地域の特産品を使用した調理実習（田能の里芋他）

平成29年2月4日（土）実施 参加者18名

食生活アンケート調査：自記式24問、回収率94%

衣生活編は、旧聖トマス大学に於いて行った。

参加者は全員楽しく熱心に取り組み、エコバッグにきれいな模様が施されるとたいへん喜ばれていた。食生活編の調理実習の聞き取り調査を行った結果、参加者はとても満足度が高く、地元の食材に対して興味を持ってもらえた。また次回開催の要望が多くあった。

食生活編の今後の実施テーマを探るアンケート結果は、今回の参加者全員が食に関心が高く、76.5%が自分自身で食事を作り、64.7%が隔日～週に2回以上買い物に出かけている。出汁の種類は41.2%が料理によって使い分け、手作りのみが5.9%存在した。食事作りで大切と思っているのは70.6%が健康で次いで栄養、経費の順であった。母や祖母から食事について教えられている事は、53.0%が食事の際の行儀や箸使い等の作法であった。我が家の伝承料理は41.2%があると答え、その殆どが正月の行事食であった。

4. 今後の課題

衣生活編について、実習を伴う場合は、本学の施設を使用することが望ましい。また、プログラムは繊維から洗濯までを科学的にとらえた内容を構築したい。

食生活編は、参加者からはとても良い評価を得られたが、年齢層が偏ってしまった。食に関心を持つ受講者はまだ潜在的にいらっしゃると思われ、調理を含めた実習を実施し、新しい発見をするとともに実生活に生かされる内容の構築を進めたい。更に、生活を担ってゆく若い層の参加を増やすように、広報をひろげ「生活の知恵」を発信してゆきたい。



尼っ子のスポーツ振興プロジェクト

研究代表者：木田京子

研究協力者：近藤照敏、藤川浩喜、足立学

はじめに

スポーツは「する・支える・みる」連携・協働を行うことで成り立つ。今回、研究協力者が関わる競技スポーツで、尼崎地域のスポーツ好きの子ども（する）を増加させ、スポーツ推進（支える）ために、子供たち対象にスポーツ教室を開催した。本学学生にとっても指導者の視点を学び、学生主体でプログラム企画立案、実行することで学生の経験値を高める良い機会となると考えた。

活動内容報告

1. クラブ代表者勉強会

日時：2017年1月18日

場所：アクティブラーニングルーム

内容：各クラブ代表者5名が参加し、プロジェクトの趣旨説明及び指導者に必要な知識を習得するための講義とグループ討議・発表を行った。競技によりスポーツ事故の危険予知の視点や対処方法が違うことを知り、更にはリスクマネジメントに対する意識が高まった。

- 1) 競技別のプログラム構築
- 2) 知識習得（安全管理・救急処置等）等

2. ソフトボール教室

対象：尼崎市女子中学生 127名（8チーム）

日時：2017年1月21日 13:00-17:00

場所：園田学園女子大学第一グラウンド

内容：W-up を競技力向上と体力の関係を話し、5グループに分けて行った。その後、キャッチボール・ゴロ捕球・バットスイング・ピッチングに分け、ローテーションで技術指導を行った。キャッチボール・ゴロ捕球では基本動作の「捕る、投げる」の仕組み

を中心に、バットスイングでは形態や発育段階に応じた方法、ピッチングではウィンドミル投法に大切なブラッシング指導を行った。また、大学生のプレーを見る時間も設け、見て学ぶ、イメージすることも大切だと伝えた。

3. 陸上競技教室

対象：尼崎市男女中学生 110名

日時：2017年1月28日 13:00-17:00

場所：ベイコム陸上競技場

内容：主に短距離・三段跳び・棒高跳びの専門種目別に指導を行った。短距離は接地ドリルや補強運動、三段跳びでは空中姿勢のイメージ、バウンディングや跳躍に必要な内容、棒高跳びはジャンプのタイミング等の練習を中心に行いました。個々の動作を動画撮影し、i-Pad を使用し、即時フィードバック出来たことで選手のイメージが良くなり動作の改善に繋がった。

4. バレーボール教室

対象：尼崎市女子中学生 28名

日時：2017年2月4日 12:30-15:30

場所：園田学園女子大学スポーツセンター

内容：W-up をリズム体操で取り入れ、緊張していた受講生も笑顔が見られた。その後、キャッチボール・正面レシーブ・3人レシーブ・スパイク・ブロック・サーブ等の練習を行った。競技経験が浅い受講生が多く、少しでもバレーボール競技の楽しさを伝えたいと思い指導した。アドバイスすると一生懸命取り組み、技術習得した笑顔を見ると、指導することがとても楽しく感じた。

まとめ

今回、子供たちの運動感覚を高めるために iPad を使用し即フィードバックを行うことを取り入れた。大変好評で、動きの改善をイメージ行いやすい、後で比較ができるのでわかりやすく、よかったとの意見があった。今回の現場で即フィードバックで、スポーツは他者からの客観的な動きの指導だけでなく、個々の主観である感覚を高められるような指導が今後の大切であると感じた。また、それぞれのスポーツ教室で共通した目標は、子供たちにとって楽しい時間、学べる時間、スポーツをさらに好きにする、競技を継続したいと思う、また教室に参加したいと思ってもらえるような内容になるよう学生たちと考え、実行することであった。結果、約 250 名の受講者が得ることができ、尼崎の競技力向上やスポーツ好きの子供を増加、心身健康な育成の力となれば幸いである。学生の経験にとってもスポーツを「する」だけではなく「支える」に触れたことにより、さらにスポーツの価値や意義、スポーツの果たす役割の重要性を理解でき、有意義な活動であった。

今後の内容検討等に生かされるよう受講者にアンケート調査を行った。

次年度についても活動を継続し、さらに充実していきたいと考える。



平成 22 年からスタートさせた〈まちづくり解剖学—尼崎—〉を平成 25 年、学長を機構長とする「地域連携推進機構」の発足を機に学内の教職員（看護、健康、栄養、子育て、教育など）、市役所、地域の方々と一緒に改めて地域の研究会を開くこととなった。〈まちづくり解剖学尼崎〉への発展である。これによって平成 25 年からは、主催を園田学園女子大学・園田学園女子大学短期大学部地域連携推進機構とし、共催を尼崎市、尼崎商工会議所として、隔月で運営を行っている。

主な目的

- 地域社会、大学、行政それぞれが抱える課題を共有する。
- これまでの取り組み、問題点・改善点を明確にしていくことで今後に向けての構想、行政の役割を理解、自分自身に何ができるのか考える。
- 実施方法は、一つの地域の課題に対して異なる立場の方々からそれぞれのお話を聞くことで理解を深め、発言することで参加者みんなの意見を聴き自分の考えをまとめる。

平成 28 年度は、5 回の定例開催のほか、番外編として 2019 年落成予定の尼崎城の活用を考えるワークショップ、特別編として災害伝承から防災・減災を考える会を開催した。

第 1 回

日時：2016 年 5 月 26 日（木）18:15～20:00

場所：園田学園女子大学 5 号館 2 階チャティー

テーマ：住みたい街、訪れたい街「猪名寺」のまちづくり

発表者：

猪名寺自治会長 内田大造氏

「これからもずっと佐璞丘の緑と生きるために」児童教育学科大江ゼミ 4 年次生

「尼崎市制 100 周年「万葉の里・石見神楽祭」にむけて」近松人形劇部

参加者：33 名

第 2 回

日時：2016 年 7 月 14 日（木）18:15～19:30

場所：園田学園女子大学 5 号館 2 階チャティー

テーマ：「みんなのサマーセミナー」にむけて

発表者：みんなのサマーセミナー実行委員会

参加者：25 名

第 3 回

日時：2016 年 8 月 4 日（木）18:15～20:00

場所：園田学園女子大学 5 号館 2 階チャティー

テーマ：留学生との交流を通じて異文化理解を深める

発表者：

村端慶治（人間教育学部准教授）

「留学生からみた日本」ズライダー・スリ・ハンダヤニ・グルトム（ブンハッタ大学）、林宜璇（開海大学）

参加者：13 名

第 4 回

日時：2016 年 11 月 10 日（木）18:15～19:30

場所：園田学園女子大学 5 号館 2 階チャティー

テーマ：「尼いも」と園田学園女子大学

発表者：

綱本武雄（尼いもクラブ、本学非常勤講師）

つながりプロジェクト No. 12 履修学生

渡辺敏郎（食物栄養学科教授）

参加者：25 名

第 5 回

日時：2017 年 1 月 12 日（木）17:30～18:30

場所：園田学園女子大学 5 号館 2 階チャティー

テーマ：若者の自殺予防～私たちにできること～

発表者：

江寄和子（総合健康学科教授）

総合健康学科養護コース 4 年次生

沖田彩弥佳・川瀬里紗・竹田晴賀・中井汐里

野木美緒・森田千尋・安川優・山下あかね

参加者：23 名

番外編

日時：2017年2月25日(土) 13:30~16:00

場所：園田学園女子大学 30周年記念館(5号館)2階チャティー

テーマ：尼崎城活用ワークショップ

参加者：41名

特別編

日時：2017年3月10日(金) 18:00~19:30

場所：園田学園女子大学ラーニングコモンズ

テーマ：一市民として何ができるか、何をしなければならぬか

内容：

「防災・減災の在り方について」野呂千鶴子
(人間看護学科教授)
クロスロードゲーム
フューチャーゲーム

【アンケート結果から】

(1~5回)

- ・猪名寺自治会から参加しました。自治会の活動で終わる行事を、学生の方達と一緒に活動させて頂くことで、地域にも地域以外の方にも知っていただく事が出来て、役員はもちろん、地域の方々も喜んでます。
- ・みんなのサマーセミナー1回目の振り返りと2回目への意気込みを聞いたことで、一参加者として楽しみになりました。実行委員の皆様さまの率直な思いを聞く機会となり良かった。
- ・いろんな人が興味を持って真剣に話をきいてくれたので発表して良かったです
- ・生涯学習の機会や大学の活用の仕方(地域住民として、ホームページを見れる方ばかりではないので、どんどん発信して欲しい)
- ・自殺について学ぶ機会がなかったので、もし自分が辛くなった時に支えてくれる「いのちの電話」があると知り、いつでもお話をきいてくれる場があると知り、とても心強いと

感じました。

- ・「自殺をしたい」「死んでしまいたい」と思ってしまうほど苦しんでいる人に対し、「命を大切にしてください」と言ったり、あわれんだり説教をしたりすることは逆効果になることがあるということが印象的でした。
- ・今後も自殺やこころの問題について取り上げていってほしい。
- ・継続してテーマを掘り下げていくことも大事ですし、いろいろな視点で見ていくことも必要かと思います。地域の知の核としての園田女子大に期待します。

(番外編)

- ・ジョイ派、尊城派に分けての考え方は面白い。通り一遍のモノと思っていたが、討論ができたように思う。中学生や高校生の参加があったのが良かった。
- ・進めにくいテーマであったにもかかわらず、活発な意見が出るように進められた。
- ・尼崎だけでなく阪神間を見据えたモノ、子育て世代を尼崎市に呼び込むための方法論など幅広く議題を提供してほしい。
- ・学生と市民の直の交流を深めていきたい

(特別編)

- ・皆さんとの意見の違いが、次に考えるときに活かされるようになれば良いなと思います。直面した時に想定外の場面となってもまわりの人とコミュニケーションをとって対処していけると良いなと思います
- ・学生ももっと興味を持てるような・・・(学生に興味が無いことが問題ですが)災害や地域力について
- ・阪神淡路大震災を経験していても、何にも今まで振り返ったことがなかったので良い機会だった。年に一度はこのテーマを入れていただけると良いと思います

(文責：地域連携推進機構 榎本匡晃)

学 生 活 動



つながり交流祭 (2016.12.03)



キッズフェスティバル (2016.10.22)

学生地域連携推進委員会、通称つな Girl は、発足 3 年目を迎えました。2016 年度は、新しいメンバーが 4 名加わり、総合健康学科、食物栄養学科、人間看護学科、児童教育学科、生活文化学科の 5 学科 14 名となりました。

つな Girl の 2016 年度の目標は「深めよう！つながりの輪～もっと身近に！もっと強く！～」です。この目標は、地域と学生に向けた思いを詰め込んでいます。地域への思いは、今まで関わってきた方々と今後もつながり続けたい、もっと強くつながりたい、学生への思いは、ボランティア活動などをもっと身近に感じて、地域に出ることへ積極的に参加してもらいたいという思いが込められています。2016 年度はこの目標を念頭に置き、楽しみながら活動をしてきました。

様々な活動をさせていただいた中で、一番成長を感じたイベントは、12 月 17 日（土）に開催した「つながるパラダイス 2～食べて、笑って、つながって、女子力 up！～」です。2014 年度に行った、第 1 回目のつながるパラダイスは子ども向けのイベントでした。しかし、今回は対象を大人の女性に限定しました。イベント内容も、若者文化というイメージで考え、スマートフォンを使用した自撮りの講座や女子会、マスキングテープ・ペンなどを使い写真を飾り付ける写真デコを行いました。特にランチを食べた後の女子会では、とても会話が弾み、時間があっという間に過ぎていきました。今までつな Girl のイベントは、子ども向けのものが多く、大人を対象とするのは初めてだったため、戸惑うこともありましたが、多くの人からのアドバイスやサポートもあり、イベントを成功させることができました。イベントが終了した時には、培っ

てきた力を出し切り、つな Girl みんな涙を浮かべていました。このイベントは、主に 1 年生が中心となり進めていたもので、積極的に動き準備をしている姿や、イベント中の司会をしている姿を見て、1 年生の成長をととても感じました。

つな Girl の活動を続けていくと、壁にぶつかることがあります。しかし、そこで折れるのではなく、みんなで協力して壁を乗り越えることで、自然と力を身につけることができると思います。この力は、人前で発表すること、初対面の人とコミュニケーションを取ること、みんなの意見をまとめること、自分の意見を人に伝えることなど、授業でも社会でも活かせる能力で、決してムダにはならないものです。このような力をつける機会はとても貴重なものだと思います。他の学生にもそのような経験をしてもらいたいので、今後学生への呼びかけ方法を色々考えながら、情報を発信していきたいと思っています。

(人間健康学部総合健康学科 2 年 吉岡里菜)

第1回 定例会議

日時：2016（平成28）年4月4日（月）10：00～12：00

場所：まちの相談室 出席者：計4名

- 1) 前期の会議・まちの相談室日程確定
- 2) 原田さん（BOBさん）の取材について
- 3) 尼崎見学について

第2回・第3回 定例会議

日時：2016（平成28）年4月12日（火）12：00～13：00

2016（平成28）年4月14日（木）12：00～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) 尼崎めぐりについて
- 2) つな Girl 勧誘について
- 3) 事務局より
- 4) 新入生歓迎会振り返り
- 5) エコあまフェスタ2016について

第4回・第5回 定例会議

日時：2016（平成28）年4月19日（火）12：10～13：00（第4回）

2016（平成28）年4月21日（木）12：10～13：00（第5回）

場所：まちの相談室 出席者：計9名（第4回）、計6名（第5回）

- 1) エコあまフェスタ2016について
- 2) 学生総会発表について
- 3) 尼崎巡りについて
- 4) 尼いものゆるキャラ活用について
- 5) 新入生勧誘について
- 6) 諸連絡

第6回・第7回 定例会議

日時：2016（平成28）年4月26日（火）12：10～13：00（第6回）

2016（平成28）年4月28日（木）12：10～13：00（第7回）

場所：まちの相談室 出席者：計9名

- 1) つながり交流祭および年間スケジュールについて

- 2) 尼崎めぐりについて
- 3) キッズフェスティバルについて
- 4) 諸連絡

第8回・第9回 定例会議

日時：2016（平成28）年5月10日（火）12：10～13：00（第8回）

2016（平成28）年5月12日（木）12：10～13：00（第9回）

場所：まちの相談室 出席者：計7名（第8回）、計7名（第9回）

- 1) 各種報告（新入生勧誘状況、学生会、エコあま）
- 2) 尼崎めぐりについて
- 3) キッズフェスティバルについて
- 4) 諸連絡

第10回・第11回 定例会議

日時：2016（平成28）年5月17日（火）12：10～13：00（第10回）

2016（平成28）年5月19日（木）12：10～13：00（第11回）

場所：まちの相談室（第10回）、402教室（第11回） 出席者：計8名（第10回・第11回）

- 1) 新入生紹介
- 2) まちの相談室について
- 3) 学生総会について
- 4) キッズフェスティバルについて
- 5) 諸連絡

第12回 定例会議

日時：2016（平成28）年5月24日（火）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計13名

- 1) JC キャンプについて
- 2) 学生総会について
- 3) 尼めぐりについて
- 4) 諸連絡

第13回 定例会議

日時：2016（平成28）年5月31日（火）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計9名

- 1) 各種報告（まちの相談室、尼めぐり）
- 2) エコあまフェスタについて

第14回・第15回 定例会議

日時：2016（平成28）年6月2日（木） 12：10～13：00（第14回）

2016（平成28）年6月3日（金） 12：10～13：00（第15回）

場所：まちの相談室 出席者：計8名（第14回）、計9名（第15回）

- 1) 学生総会振り返り
- 2) エコあまフェスタについて
- 3) キッズフェスティバルについて
- 4) 尼いも奉納祭について
- 5) 熊本地震に対する活動について
- 6) 諸連絡

第16回 定例会議

日時：2016（平成28）年6月9日（木）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計9名

- 1) 報告（学生会代表者会議）
- 2) エコあまフェスタ振り返り
- 3) 熊本地震に対する活動について

第17回 定例会議

日時：2016（平成28）年6月10日（金）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計9名

- 1) 熊本地震に対する活動について
- 2) 報告（エコあまフェスタ反省会等）
- 3) 諸連絡

第18回 定例会議

日時：2016（平成28）年6月16日（木）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) 報告（エコあまフェスタ反省会、JCキャンプ等）
- 2) 諸連絡

第19回 定例会議

日時：2016（平成28）年6月17日（金）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計10名

- 1) 熊本地震の募金活動について
- 2) キッズフェスティバルについて
- 3) 諸連絡

第20回 定例会議

日時：2016（平成28）年6月23日（木）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計8名

- 1) 熊本地震の募金活動について
- 2) キッズフェスティバルについて
- 3) JC キャンプについて
- 4) 諸連絡

第21回 定例会議

日時：2016（平成28）年6月24日（金）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計8名

- 1) 各イベントのリーダーについて
- 2) 熊本地震の募金活動について
- 3) JC キャンプについて
- 4) 諸連絡

第22回・第23回 定例会議

日時：2016（平成28）年6月30日（木）12：10～13：00（第22回）

2016（平成28）年7月1日（金）12：10～13：00（第23回）

場所：まちの相談室 出席者：計9名（第22回）、計8名（第23回）

- 1) キッズフェスティバルについて
- 2) 諸連絡

第24回 定例会議

日時：2016（平成28）年7月7日（木）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) キッズフェスティバルについて
- 2) 諸連絡

第25回 定例会議

日時：2016（平成28）年7月8日（金）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計8名

- 1) キッズフェスティバルについて
- 2) つながり交流祭について
- 3) 諸連絡

第26回・第27回 定例会議

日時：2016（平成28）年7月14日（木）12：

10～13：00

2016（平成28）年7月15日（金） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計7名（第26回）、計8名（第27回）

- 1) 学生ボランティア団体支援について
- 2) つながり交流祭について
- 3) キッズフェスティバルについて
- 4) 打ち水大作戦について
- 5) 尼いも奉納祭について
- 6) 諸連絡

第28回 定例会議

日時：2016（平成28）年8月12日（金）10：00～16：00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) 報告（JC キャンプ）
- 2) 学生交流会について
- 3) 尼いも奉納祭について

第29回 定例会議

日時：2016（平成28）年8月26日（金）10：00～16：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) 学生会交流会について
- 2) 尼いも奉納祭について
- 3) JC キャンプ報告書の修正について
- 4) キッズフェスティバルについて
- 5) 諸連絡

第30回 定例会議

日時：2016（平成28）年8月29日（月）13：00～16：00

場所：まちの相談室 出席者：計9名

- 1) つながりパラダイスについて
- 2) いい笑顔で賞について

第31回 定例会議

日時：2016（平成28）年8月31日（水）10：00～16：00

場所：まちの相談室 出席者：計8名

- 1) つながりパラダイスについて
- 2) いい笑顔で賞について
- 3) キッズフェスティバルについて

第32回 定例会議

日時：2016（平成28）年9月6日（火）10：00～16：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) キッズフェスティバルについて
- 2) つながりパラダイスについて
- 3) 学生会交流会のしおり作成について
- 4) いい笑顔で賞について

第33回 定例会議

日時：2016（平成28）年9月13日（火）10：00～16：00

場所：まちの相談室 出席者：計8名

- 1) いい笑顔で賞について
- 2) 学生会交流会について
- 3) 尼いも奉納祭について
- 4) 諸連絡

第34回 定例会議

日時：2016（平成28）年9月14日（水）10：00～16：00

場所：まちの相談室 出席者：計5名

- 1) いい笑顔で賞について
- 2) つながりパラダイスについて
- 3) キッズフェスティバルについて

第35回 定例会議

日時：2016（平成28）年9月23日（金）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) 学生会交流会の振り返りにについて
- 2) いい笑顔で賞について
- 3) キッズフェスティバルについて

第36回 定例会議

日時：2016（平成28）年9月28日（水）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) キッズフェスティバルについて
- 2) いい笑顔で賞について
- 3) 諸連絡

第37回 定例会議

日時：2016（平成28）年9月30日（金）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 8 名

- 1) キッズフェスティバルについて
- 2) いい笑顔で賞について
- 3) つながりパラダイスについて
- 4) 尼いも奉納祭について
- 5) 諸連絡

第 38 回 定例会議

日時：2016（平成 28）年 10 月 3 日（月） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 8 名

- 1) つながりパラダイスについて
- 2) キッズフェスティバルについて
- 3) いい笑顔で賞について

第 39 回 定例会議

日時：2016（平成 28）年 10 月 7 日（金） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 8 名

- 1) キッズフェスティバルについて
- 2) つながりパラダイスについて
- 3) いい笑顔で賞について

第 40 回 定例会議

日時：2016（平成 28）年 10 月 11 日（火） 18：00～19：30

場所：まちの相談室 出席者：計 6 名

- 1) つながりパラダイスについて
- 2) キッズフェスティバルについて

第 41 回 定例会議

日時：2016（平成 28）年 10 月 14 日（金） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 10 名

- 1) つながるパラダイス 2 について
- 2) キッズフェスティバルについて
- 3) いい笑顔で賞について
- 4) 諸連絡

第 42 回 定例会議

日時：2016（平成 28）年 10 月 17 日（月） 12：15～12：55

場所：まちの相談室 出席者：計 7 名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) 尼いも奉納祭について

- 3) キッズフェスティバルについて

第 43 回 定例会議

日時：2016（平成 28）年 10 月 24 日（月） 12：00～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 7 名

- 1) 学外との連絡についての確認事項
- 2) 尼崎市役所の立石さんからのメールについて
- 3) つながるパラダイスについて
- 4) 報告（尼いも奉納祭）

第 44 回 定例会議

日時：2016（平成 28）年 10 月 28 日（金） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 6 名

- 1) 熊本地震募金について
- 2) つながるパラダイスについて
- 3) 諸連絡

第 45 回 定例会議

日時：2016（平成 28）年 10 月 31 日（月） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 7 名

- 1) 熊本地震募金について
- 2) つながるパラダイスについて
- 3) 諸連絡

第 46 回 定例会議

日時：2016（平成 28）年 11 月 4 日（金） 12：00～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 7 名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) 事務局より確認事項
- 3) 諸連絡

第 47 回 定例会議

日時：2016（平成 28）年 11 月 7 日（月） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 7 名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) 諸連絡

第 48 回 定例会議

日時：2016（平成 28）年 11 月 11 日（金） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 9 名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) 諸連絡

第49回 定例会議

日時：2016（平成28）年11月14日（月）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計：8名

- 1) まちの相談室について
- 2) つながるパラダイスについて

第50回 定例会議

日時：2016（平成28）年11月18日（金）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計8名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) 諸連絡
- 3) 尼いも奉納祭のDVDについて

第51回 定例会議

日時：2016（平成28）年11月21日（月）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計：7名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) 報告（尼いも奉納祭報告会）
- 3) 諸連絡

第52回 定例会議

日時：2016（平成28）年11月25日（金）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計：6名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) いい笑顔で賞について
- 3) 諸連絡

第53回 定例会議

日時：2016（平成28）年11月28日12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) いい笑顔で賞について
- 3) 諸連絡

第54回 定例会議

日時：2016（平成28）年12月2日（金）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) いい笑顔で賞について
- 3) 諸連絡

第55回 定例会議

日時：2016（平成28）年12月5日（月）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計8名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) いい笑顔で賞について

第56回 定例会議

日時：2016（平成28）年12月9日（金）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計7名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) 諸連絡

第57回 定例会議

日時：2016（平成28）年12月12日（月）12：10～13：00

場所：まちの相談室 参加者：計7名

- 1) つながるパラダイスについて
- 2) 諸連絡

第59回 定例会議

日時：2016（平成28）年12月19日（月）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計8名

- 1) 学生全体会議について
- 2) 諸連絡

第60回 定例会議

日時：2017（平成29）年1月6日（月）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) まちの相談室について
- 2) 学生ボランティア団体支援表彰式について
- 3) 次期委員長選出について

第61回 定例会議

日時：2017（平成29）年1月11日（水）12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計6名

- 1) 授業について話し合う会について
- 2) 熊本地震募金について

- 3) 新入生歓迎会のチラシについて
- 4) いい笑顔で賞について
- 5) 諸連絡

第 62 回 定例会議

日時：2017（平成 29）年 1 月 16 日（月） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 9 名

- 1) いい笑顔で賞について
- 2) 熊本地震募金について
- 3) 尼めぐりについて
- 4) 諸連絡

第 63 回 定例会議

日時：2017（平成 29）年 1 月 20 日（金） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 6 名

- 1) 尼崎めぐりについて
- 2) いい笑顔で賞について
- 3) 諸連絡

第 64 回 定例会議

日時：2017（平成 29）年 1 月 23 日（月） 12：10～13：00

場所：まちの相談室 出席者：計 7 名

- 1) 尼崎めぐりについて
- 2) いい笑顔で賞について
- 3) 2017 年度年間スケジュールについて
- 4) 諸連絡

第 66 回 定例会議

日時：2017 年 2 月 21 日（火） 10：00～16：00

場所：244 教室 出席者：計 8 名

- 1) 年間の振り返りと報告
- 2) 来年度の目標について
- 3) キッズフェスティバルについて

第 67 回 定例会議

日時：2017 年 3 月 1 日（水） 10：00～13：00

場所：244 教室 出席者：計 7 名

- 1) 学生ボランティア団体支援の書類の作成について
- 2) 学生総会でのパワーポイント作成について
- 3) 代議員・けやきスタッフに参加してほしい

い行事について

- 4) SNS の活用方法について
- 5) 学生会について
- 6) 諸連絡

第 68 回 定例会議

日時：2017 年 3 月 6 日（水） 10：00～13：00

場所：244 教室 出席者：計 9 名

- 1) 新入生メンバー募集のチラシについて
- 2) つながるパラダイス 2 の振り返り
- 3) 尼崎城再建のセミナー（討論会）について
- 4) 諸連絡

つながり交流祭

本学において平成 28 年 12 月 3 日（土）13 時から、第 7 回つながり交流祭が開催されました。これは、阪神地域の大学・短期大学の学生が事業者や地域団体と連携して地域活性化に取り組んだ成果を発表し、交流するために行われるイベントです。地域連携推進支援事業関係者、NPO、地域活動団体や大学関係者、学生等約 200 人の参加があり、本学からは児童教育学科の三年生、人間看護学科の四年生、そして学生地域連携推進委員会の二年生が参加しました。

まず、武庫川女子大学音楽学部「浜甲カンタービレ」によるウェルカムコンサートがあり、その後、大学生や地域連携団体による活動報告がありました。

事例発表では、児童教育学科大江ゼミの学生が「0～100 歳が共に生きる〈のびのびタウン〉」と題して地域の生活支援について、人間看護学科地域看護学ゼミが「大庄地区の活動から学んだこと」と題して地域で自分らしく暮らすための高齢者支援プロジェクトについて発表をしました。

また関西学院大学の学生からは地域資源を活用した「地域密着型生活支援」の拠点づくり事業について、武庫川女子大学「浜甲カンタービレ」からは団地・大学交流プロジェクトについて、それぞれ発表がありました。

さらに NPO 法人コミュニティ事業支援ネットの運営する阪神まち大学の西宮ブランドプロモーションコース、ソーシャルビジネス育成コース、商店街プロジェクトコースに参加している阪神間の大学生からも、それぞれのテーマに沿った発表が行われました。サンモール武庫元町商店街活性化提案事業について尼崎地域産業活性化機構から、甲子園口商

店街活性化事業については関西学院大学の学生から発表がありました。

続いてラーニングコモンズで行われたブースセッションでは、出演大学・団体の大学生による地域連携活動内容のポスター展示と、が行われました。そこで地域活動に参加している他大学の学生同士、また地域活動団体の方々を含めた一般参加者も含めた意見交換を行うことができました。

テーマ別分科会では、「高齢者対策と地域福祉」「まちづくり・地域づくり」「商店街活性化」の 3 つのテーマに分かれ、学生、教職員、地域の方々と交えたディスカッションを行いました。発表を行わない学生や一般参加者等も参加し、10 人前後のテーブルに分かれてそれぞれのテーマについて討議を深めることとなりました。

ディスカッションの成果は、それぞれのテーブルごとにリーダーがまとめを発表しました。その内容をふまえ、関西学院大学の大熊省三准教授、本学の大江篤教授、地域連携推進機構 TA の久留島元、柏原康人による講評と助言がありました。そこでは「地域での活動は何をするかではなく、組織力、団結力をもって生き残ることにすべてをかけるという段階になっている」「地域の課題は、一つの分野で解決できるものではないため生来社会に出た際に他職種間連携が重要である」など、他の分野と協働するためにも大学で学んでいる専門境域をしっかりと学修してほしいという指摘がありました。イベント後にはラーニングコモンズでの交流会が行われました。学生にとっても、異なる世代や、他大学の同世代との意見交換により、刺激になったイベントでした。

政策提言発表会

平成 28 年 2 月 17 日（金）、尼崎市立教育・福祉センター四階視聴覚室において、「大学 COC 事業における政策提言発表会」が行われた。

尼崎市内では、園田学園女子大学、兵庫県立大学の 2 大学が、「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」を実施している。当日は市内をフィールドに活動する 2 大学の学生たちが、尼崎市の課題解決に向けて調査・研究・立案した政策プランの発表をおこなった。本学からは、「大学の社会貢献」履修生や、総合健康学科江崎ゼミ、児童教育学科大江ゼミにおける取り組みについて発表が行われた。

政策提言発表会も 4 年目を迎え、各校とも充実した成果の報告があった。

【発表概要】

以下、本学学生による発表概要を掲載する。

- ・「地域での子育て-SUN プラット「まちの寺子屋」での実践-」（「大学の社会貢献」履修 1 年次生）

大学が立地する尼崎市の現状と課題を学ぶ地域志向科目「大学の社会貢献」で塚口さんさんタウンをフィールドに地域の子育て支援について考えた。NPO 法人やんちゃんこの取り組みを学び、2016 年 7 月に開設された「まちの寺子屋」での実践プログラムを企画・提案し、2017 年 1 月に実施した活動をふまえて考えたことを報告したい。

- ・「地域文化活動の継承-〈近松応援団〉から〈近松人形劇部〉へ-」（近松人形芸部）

1989 年に尼崎市ゆかりの近松門左衛門を応援する元気な女性たちによって結成された近松応援団が高齢化のために活動を継続できず解散することになった。2014 年 4 月に「まちづくり解剖学」での出会いから、4 名の学生が継承することとなった。〈近松人形劇部〉が地域文化を継承してきた 2 年間の活

動を報告し、地域志向科目「つながりプロジェクト」での経験から〈近松人形劇部〉に入学した 2 年生が今後の課題と展望を発表する。

- ・「尼崎市企業の「健康経営」から学ぶ～従業員の健康は会社の宝～」（総合健康学科 3 年江崎ゼミ）

経済産業省は、「健康経営」の更なる取組強化を行っており、尼崎市でも、平成 28 年 10 月に委託業者を通じて、尼崎市内に本社もしくは事業所を有する事業者（2000 社）を対象に、「従業員の健康保持・増進と経営に関するアンケート調査」を実施した。そして、このたび有効回答数約 450 件の分析を基に、園田学園女子大学総合健康学科の学生が、従業員の健康づくりでユニークな取組を実践している企業 8 社を訪問し、インタビュー調査を行った結果を発表する。

- ・「地域コミュニティと公園-猪名寺佐璞が丘の事例-」（児童教育学科 4 年 佐藤優）

2015 年に「猪名寺忍者学校」に参加したとききっかけに、舞台となった佐璞が丘公園をフィールドに、コミュニティの原点として公園を活用する方法を考察した。公園についての住民意識をリサーチするため、校区内に佐璞が丘の森を有する尼崎市立園田北小学校の 3 年生と 6 年生の児童と保護者へのアンケートを実施した。アンケート調査の結果をふまえ、幅広い年齢層の住民がゆったりと時間を過ごせる「憩いの場」としての公園として、私が考える「万葉の森再生プロジェクト」を提案したい。

フォーラム



大学 COC+シンポジウム「地域歴史遺産としての怪異伝承～尼崎百物語を起点に～」(2016.07.16)

大江篤氏(司会/本学)村井良介氏(神戸大学)、堤邦彦氏(京都精華大学)、久禮旦雄氏(モラロジー研究所道徳科学研究センター)



地方創生推進事業 COC+「子育て高齢化対策」領域(2017.10.15)

第1部シンポジウム「みんなで考える少子高齢化社会」

野呂千鶴子氏(司会/本学)、高田哲氏(神戸大学)、相原洋子氏(神戸市看護大学)、大江篤氏(本学)

2016年7月16日(土)、尼崎商工会議所において、大学COC+シンポジウムが開催された。これは神戸大学を主幹とするCOC+事業の一環として行われたものである。

怪異伝承をふくむ地域に伝承は、暮らしのなかで語り伝えられたものであり、生活の原感覚や失われた土地の記憶が刻まれている。しかし人口の流動化や高齢化、生活様式の急激な変化により、その継承は危機的である。地域創生が叫ばれる現代こそ怪異伝承を掘り起こし、地域歴史遺産として再認識する必要がある。本シンポジウムは、2016年4月に本学教授大江篤氏が編者となって刊行された『尼崎百物語』(神戸新聞総合出版センター)を起点として企画された。当日は、怪異伝承や民俗文化の活用に関する研究の最前線の研究者を招聘し、「地域歴史遺産としての怪異伝承」を探究する意義が討議された。

『尼崎百物語』は、COC事業において大江氏を研究代表とする地域志向教育研究の成果としてまとめられた。現在作成中の、尼崎市内に伝わる伝説、昔話のデータベースをもとに100話を厳選して解説した書籍である。本シンポジウムでは『尼崎百物語』所収の怪異伝承をもとに、多様な地域の文化を伝える歴史遺産として伝承を継承する重要性や、どのように地域創生に活用するかが討議された。

まず本学学長、川島明子氏による開会挨拶があり、続いて村井良介氏(神戸大学地域連携推進室匿名准教授)から、地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)のなかで兵庫県が推進する「地域創生に定める実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業のうち「歴史と文化」領域の取り組みについて、歴史文化を学び、地域社会を担う人材

を育成する重要性について語られた。

次に大江氏から「怪を語れば‘ふるさと’に至る—怪異学と地域創生—」として報告があった。尼崎というと近代の工業都市と思われがちだが、古代から交通の要所として栄え、豊かな伝承が伝わる。荒唐無稽と切り捨てられがちな怪異伝承だが、地域に暮らす人々の生活に根ざした文化、記憶を伝える歴史文化遺産として再評価すべきと指摘された。

休憩をはさみ、本学協力研究員であり、『尼崎百物語』執筆者の一人でもある久禮旦雄氏(モラロジー研究所研究員)の報告があった。久禮氏は「怪異・妖怪伝承とデータベース—地域における知識のあり方をめぐって—」と題して、全国におけるデータベース作成の試みとその問題点を指摘された。

ついで堤邦彦氏(京都精華大学)からは、「尼崎の耳無し芳一伝説—近世怪異小説を起点として—」として、有名な耳無し芳一伝説の源流である仮名草子『宿直草』の話に尼崎の地名が出ていることを指摘し、そのうえで播磨灘一円に流布した平家の鎮魂伝承との関係が述べられた。

ディスカッションでは、芸能や文芸など創作とも関わりの深い怪異伝承から土地の記憶を掘り起こす意義や難しさが議論された。また人文学研究の成果を活かした地域創生の試みについても、パネリストそれぞれから言及があった。各報告と討議の詳細は、2017年5月刊行の尼崎地域史料館『地域史研究』に掲載予定である。

当日は登壇者をふくめ、合計74名の方々にご参加いただいた。

(地域連携推進機構 TA 久留島元)

平成 28 年度 神戸大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学
3 大学合同報告会「プラットフォーム」報告

2016 年 10 月 15 日(土)、本学号館 321 教室 (AV ホール) において、地 (知) の拠点大学による地方創生推進事業 COC+「子育て高齢化対策」領域シンポジウムが開催された。これは、神戸大学を主幹とする COC+事業「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」の一環として企画されたものである。兵庫県は日本の縮図といわれ、全国的な問題が集約されている。特に少子高齢化に伴う人口減少は加速しており、地域での子育て支援や高齢化対策が急務である。そのため、兵庫県内で医療福祉専門職養成課程を有する神戸大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学の 3 大学が連携し、各大学の培ってきた地域社会形成のための教育研究の成果・知見を持ち寄り、情報共有を図るという目的でシンポジウムを開催した。

まず、川島明子氏 (園田学園女子大学・園田学園女子大学短期大学部学長)、高田哲氏 (神戸大学院保健学研究科地域保険額領域教授・地域連携センター長) による開会挨拶があった。

第 1 部シンポジウム「みんなで考える少子高齢化社会」では、3 大学それぞれが、各大学での取り組みを踏まえて少子高齢化社会の現状や子育て支援・高齢化対策の実際について解説し、その後の総合討論に臨んだ。各登壇者の演題は次のとおり。

- ・高田哲氏 (神戸大学院保健学研究科地域保険学領域教授・地域連携センター長)「少子化と子育て支援」
- ・相原洋子氏 (神戸市看護大学地域連携教育・研究センター准教授)「高齢化と地域コミュニティ」

- ・大江篤氏 (本学人間教育学部教授・地域連携推進機構副機構長)「地域資源としてのひと・もの・こと—記憶とまちづくり—」

総合討論では座長の野呂千鶴子氏 (本学人間健康学部教授) の司会のもと、当日参加された各大学の関係者や学生、地域の方をふくめた活発な議論が展開された。

その後、3 号館 1 階ラーニングコモンズに移動し、各大学の取り組みを紹介したポスター掲示をまえに、情報交換会が行われた。

続いて各大学の学生による成果報告が行われた。座長の林敦子氏 (神戸大学大学院保健学研究科リハビリテーション科学領域准教授) のもと、各大学における取り組みの紹介と、活動を通して得られたことについて、それぞれ報告があった。各報告は以下のとおり。

- ・園田学園女子大学人間教育学部 3 年生 (7 名)「子どもの生活体験と子育て支援—子育てサークル“やんちゃんこ”の取り組み—」
- ・園田学園女子大学人間健康学部 4 年生 (2 名)「尼崎市立杭瀬小学校における認知症サポーター養成講座の試み」
- ・神戸市看護大学 1 年生 (4 名)「神戸市看護大学ボランティア部の取り組み」
- ・神戸大学医学部保健学科理学療法専攻 4 年生・松田直佳氏「地域高齢者への取り組み—高齢者の運転に焦点を置いて—」
- ・神戸大学大学院保健学研究科地域保健学領域修士 1 年生・鈴木千晶氏「発達支援教室“ぽっとらっく”の取り組み」。

最後に、石原逸子氏 (神戸市看護大学基礎看護学領域教授) から閉会挨拶があり、すべてのプログラムが終了した。当日は 101 名の参加者を得て、盛会のうちに終了した。

(地域連携推進機構)

平成 28 年度 地域志向教育研究報告会

2017年3月4日(土)、本学3号館2階321教室 AV ホールにおいて、地域志向教育研究報告会が行われた。当日の司会は、学生地域連携推進委員会(通称つな Girl)に所属する総合健康学科二年・吉岡里菜、食物栄養学科二年・佐野彩奈、佐伯亜美が担当した。

はじめに12:30から、川島明子学長(地域連携推進機構機構長)の挨拶があり、続いて大江篤教授(地域連携推進機構副機構長)から趣旨説明があった。本学の取り組みとして「地(知)の拠点整備事業」による「〈地域〉と〈大学〉をつなぐ経験値教育プログラム」について説明がなされた。

13時から講演として、中野洋平氏(島根大学地域未来戦略センターCOC 事業部門長・講師)による「学部横断的な地域志向教育」、星野敦子氏(十文字学園女子大学地域連携推進機構副機構長・教授)による「地域志向教育における社会的コンピテンシーの育成」が行われた。

中野氏からは島根大学が取り組む地域志向教育の構造化、地域に貢献する人材育成について大学、学生に意識化させることなどが述べられた。星野氏からは、十文字学園女子大学が各学科において設置したルーブリック評価について、学生の学修目標を明確にした基準を学科ごとに示したところに特色があるとの報告をいただいた。

質疑応答では、会場から地域活動への意欲が低い学生に対してどう対応するのか、専門教育と地域活動のバランスをどう考えるか、学生に対する活動の影響をどのように評価するか、などの質問があった。それに対して、地域、大学、学生のそれぞれの意識が異なるなかで各大学において取り組みが行われてい

る状況が語られた。そのなかで星野氏から、専門教育による知識や役割を活かすことが重要であると指摘があり、FD や学科ごとの教員の働きかけによって学生たちの意識を高めていく試みが語られた。また中野氏からはこれまで地方国立大学が立地する地域のニーズに無関心だった反省があると述べられたうえで、芯のない教育になってはいけないこと、専門性を地域に応用できる人材育成が重要であるとの提言がなされた。

休憩をはさみ14:20からは園田学園女子大学における11の地域志向教育研究プロジェクトの成果報告が行われた。

最後に中野氏、星野氏から成果報告に関する総評があった。中野氏からは、本学の取り組みについて大学と地域が向かい合い、対話することで大学全体として地域の日常に密着しているという評価をいただいた。星野氏からは地域志向教育研究の成果と、つながりプロジェクトなどの授業とがむすびについているという評価をいただいた。そのうえで教員個人に頼ることで継続して地域課題にとりくむことが難しいこと、地域人材の育成が重要であること、などが指摘された。

(地域連携推進機構 TA 久留島元)

フォーラム

みんなの尼崎大学キックオフフォーラム みんなの尼崎大学 はじまるの会！

平成28年11月26日（土）園田学園女子大学 27日（日）尼崎市役所 開明庁舎

尼崎市では、まちの発展の中で人々が考え、行動してきた歴史も踏まえつつ、「学び」を通して、身近な地域や社会への関心、人々の交流や連携、さらには地域を支える活動が育まれる環境を創っていく「みんなの尼崎大学」の取組を進めています。

これまで、「学び」の提供者や参加者間の顔の見える関係を創っていくための場づくり（みんなの尼崎大学オープンキャンパス）や、学びの情報を一元化したサイトの構築、また、市民が教え、学びあう「みんなのサマーセミナー」の開催などに取り組んできました。こうした取組の趣旨や目的を広く共有し、市民、事業者、行政職員がともに、学び、考え、行動していくきっかけとなる「学び」について考え、さらに取組を発展させることを目的に、「みんなの尼崎大学 はじまるの会！」を開催し、延べ200名以上が参加しました。

初日は、取組の周知とともに、市内外の興味深い「学び」の事例を基に、「まちと学びのイイ関係」について考え、広く交流を深めました。園田学園女子大学近松人形劇部による近松人形のお出迎えにはじまり、稲村和美市長の基調講演、5つの分科会を経て、全体での振り返り（各分科会での議論を表現した「一言」を基に報告、意見交換）を行いました。分科会1「学生×地域」～学びをきっかけとした学生・生徒と地域の関わり・地域人材の育み～

一言：若い人の成長が大人を元気にする

分科会2「学び×企業」～事業者による「学び」をきっかけとした地域や子ども、若者との関わり方～

一言：「社会的意義」は伏せ、楽しむことを大事にすると、「意義」は後からついてくる

分科会3「市民力×職員力」～官民の協働事例をもとに、地域や社会に興味を持って関わるきっかけとしての「学びの場づくり」を考える～

一言：公私混合。学びは官・民の接着剤

分科会4「まち×学び」～全国のコミュニティ・カレッジの事例をもとに、その効用や課題、まちと学びの関係性を考える～

一言：「無いこと」の強み、無いからこそ学びが生まれる

分科会5「わたしの学び×活かす場」～知識や経験を活かすこと、誰かと共有することの意味、そのための「場」の事例をもとに、そこから生まれることを考える～

一言：「違い」を楽しみながら開いていく

二日目は、初日の振り返りを基に、今後のまちづくりと「学び」の関係、そしてその効用について、市外の専門家を中心に客観的な考察を行いました。「尼崎は課題が多いからこそ、学ぶ機会も多い学びのフィールド」「みんなの学びを自分の学びにどうつなげるか、また、その逆も重要」「新しいことに出会おうと考えもしなかったことに想いを馳せる。それが学びであり、その時点でまちや社会課題の当事者になっている」「学ぶことで自身が立つ環境を客観視できる」「課題に向かったときに学びのネットワークができていれば、学んでいる個々人（点）が適宜つながり、課題に応じた解決のソリューション（点画（その時に必要な像））となっていく」など、尼崎の取組を基に議論が盛り上がりました。市内外の興味深い取組も含め、まちと学びの可能性について多くの気づきと刺激のあった二日間でした。

（尼崎市市協働・男女参画課 奥平裕久）

地域志向科目



つながりプロジェクト No.12 まちづくり企画実践演習
尼芋奉納祭 (2016.10.23)



つながりプロジェクト No.17 尼崎探検隊 富松地域
第一回富松城跡祭 (2016.10.30)

01

Project

教育の情報化による「よりわかりやすい授業」 の実現に向けて

- 堀田博史 (人間健康学部)
- 小田桐良一 (人間健康学部)
- 野口聡 (京都外国語大学)

■ 分野

学校教育

■ 身につく力

- ✔ 主体性
- ✔ 考えぬく力
- 気づく力
- コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

情報通信技術が急速に進展する社会において、学校教育でもその技術(ICT:Information and Communication Technology)を活用した授業展開が各地ではじまっています。これら教育の情報化は、2020年度を目標にして環境整備が行われています。

このプロジェクトは、ICT環境が整う近い将来を見据え、地域の小学校・中学校をモデル校として協働、ICT環境を整備し、よりわかりやすい授業を展開するために、ICTをどのように授業で活用するのかを考えていきます。

■ 授業計画の概要

この授業では、学校教育におけるICT活用の方法に注目して、授業でのICT活用の方法と技術を習得するために、(1)全国の先進的なICT活用事例を概観、(2)タブレット端末をはじめとしたICT操作技術の習得、(3)教育現場で授業参観することでICTの活用効果を実感、(4)そしてよりわかりやすい授業を実現するために、学生がICT活用した授業の指導案を提案します。

■ 地域に対してできる事

尼崎市には、小学校41校、中学校17校、高等学校が2校ありますが、全国的に見ても、ICT環境の整備は進んでいる方ではありません。そのため授業でのICT活用事例が蓄積されていません。

この授業を通して、学生からよりわかりやすい授業の事例をひとつでも多く提案することで、学校現場の教員に役立てると考えます。

■ 連携先

尼崎市立教育総合センター
尼崎市立名和小学校/尼崎市立小田北中学校

02

Project

地域における感染対策のための「手洗い教室」

- 山本恭子 (人間看護学科)
- 熊谷桂子 (人間看護学科)
- 木村保司 (児童教育学科)

■ 分野

健康づくり
生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは地域における感染対策を目的とした手洗い指導を目的としている。授業では下記の事柄を習得できる。

1. 手洗いの効果を科学的に理解する
2. 手洗い指導の技術を習得する
3. 講習会の運営について学ぶ
4. 地域における感染対策の必要性について理解する

■ 授業計画の概要

1学期は、手洗いによる手の細菌数の変化について学び、手洗いを科学的見地から見つめ直し、有効な手洗い方法についての理解を深め、手技をマスターする。また、手洗いに関する衛生教育を立案し、学生同士で「手洗い教室」を開催し、評価しスキルを高める。

2学期は、プロジェクトで立案した「手洗い教室」を地域で行い、地域住民への保健指導の意義について考察する。

地域と園田学園女子大学の連携により、学生と地域住民がふれあうことにより、地域に「感染予防のための手洗い」を広めたいと考えている。

■ 地域に対してできる事

園田学園女子大学を拠点として感染対策に効果的な手洗いを広めることにより、尼崎市におけるインフルエンザやノロウイルス感染症のアウトブレイクを防ぐことを目的としている。このプロジェクトでは公民館との連携に於いて学生が「手洗い教室」を開催し、学生と地域住民がふれあうことにより、地域に「感染予防のための手洗い」を広めたいと考えている。

■ 連携先

尼崎市教育委員会社会教育部の全ての公民館
(中央公民館/園田公民館/大庄公民館/小田公民館/武庫公民館/立花公民館)

03

Project

地域資源を活用した安心・安全まちづくり

- 大江篤 (児童教育学科)
- 野呂千鶴子 (人間看護学科)
- 山本起世子 (総合健康学科)

■ 分野

学校教育
生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは、児童を中心に地域の多世代の方々(自治会、老人会、婦人会、子ども会、PTAなど)と関わりながら安心、安全なまちづくりを考えていきます。尼崎一元気な自治会長さんと一緒に「元気なまち」の未来を子どもたちとに楽しく考えます。

地域の防災・防犯を地域の方と共に考えることで、課題発見力、および課題解決のための企画力や実行力を身につけることができます。また、ワークショップなどでのファシリテーターとしてのスキルを向上させることができます。

■ 授業計画の概要

1学期は、まちづくりや防犯・防災の概説を学びながら、猪名寺でのフィールドワークや地域の方々とのワークショップを行うことで対象地域を知り、課題を共有する活動を行います。夏休みには尼崎市立園田北小学校の児童と一緒に街探検を行い、防災マップを作成します。

2学期は、夏休みの成果をふまえ、1月中旬に開催される「猪名寺子ども防災フェスティバル」で地域の方々、児童を対象にした防災・防犯のワークショップを企画し、実施します。それらの結果をまとめ、地域の課題解決のための提言を行います。

■ 地域に対してできる事

猪名寺自治会は、これまでJR猪名寺駅のエレベーターの設置を行ったり、忍者学校を開催したり、様々な活動を行ってきました。尼崎市制100周年を記念して10月2日に石見神楽を招聘し、「住みたい街、訪れたい街」猪名寺をめざした行事を開催します。この行事を機に、猪名寺自治会だけではなく、南清水自治会とともに大きなコミュニティをつくる取り組みを考えています。このプロジェクトは、子どもが主体的に地域に関わり、安心・安全に住み続けることができるまちづくりを学生の視点で提案します。

■ 連携先

猪名寺自治会
尼崎市立園田北小学校

04

Project

地域子育て支援

●影浦紀子 (児童教育学科)

■ 分野

子育て支援

■ 身につく力

主体性

考えぬく力

✔ 気づく力

✔ コミュニケーション力

✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

子育て支援という取り組みは、制度的には新しいものですが、地域みんなで子育てを支えあうという行為自体は新しいことではありません。

また、子育て支援は、さまざまな場所でさまざまな人がかかわって行われています。支援の内容も多様です。

このプロジェクトでは、まず、子育て家庭の置かれた状況、子育て支援の制度と現状について尼崎市を中心に理解し、地域踏査、フィールドワークをしながら地域の子育て支援の課題を明らかにします。

そして、乳幼児期の子どもの発達について学び教材製作、子育て支援プログラムの企画、実践を行います。

これらの経験を通して、子どもの発達を援助する際に、地域全体を視野に入れた支援の在り方について考察していきます。

■ 授業計画の概要

1学期は、講義やワークショップによって、地域の子ども・家族を取り巻く実態・状況、子どもを育てる地域の取り組み、多様な子育て支援の場・人・活動について理解していきます。夏休み期間中に、地域のお母さん方へのインタビューを実施し、子育て中の母親理解と求められている支援を明らかにします。そして、それらの成果発表を踏まえて、地域の子育て中の保護者と子どもを対象に子育て支援プログラムの企画、実践を行います。

■ 地域に対してできる事

地域の子育て中のお母さん方が求める支援を明らかにし、研究します。また、地域の子育て家族対象に「ママカフェクリスマス」として、実施予定です。

■ 連携先

尼崎市こども青少年本部事務局こども青少年部こども政策課

尼崎市市民協働局園田地域振興センター

社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会

05

Project

健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について

- 餅美知子 (食物栄養学科)
- 松葉真 (食物栄養学科)

■ 分野

健康づくり
生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは、「食の健康協力店」との関わりをもち、その店舗の特性を見出し高めます。また「食の健康協力店」の相互連携の輪を作ることで、地域の子供から高齢者までの健康度の寄与に繋がります。地域の食育を地域で営業している方、店舗を利用している方々と共に考えることで、地域特性に関連する課題が抽出され、各自が培った経験値を生かした企画を実践して行くことで、解決に結びつけます。

■ 授業計画の概要

1学期では、「食の健康協力店」マップづくりをとおして、人と店舗のつながりの輪を拡げる

- ①兵庫県に登録されている「食の健康協力店」のうち、尼崎市で営業している店舗を業務形態別に分類し、所在地を地図に落とし込んだ尼崎市版「食の健康協力店」マップの完成を目指す。
- ②地域で先駆的に活動している方の事例を伺い、地域での活動の手がかりについて検討を行う。
- ③「食の健康協力店」から事前に要望のあった事案を具体化するために、「食の健康協力店」マップ作りで携わった地域にある店舗に出向き、詳細な情報や食材等の収集を行う。

2学期では、健康の輪、食育の輪を拡げる

- ①今回、対応すべく「食の健康協力店」は尼崎市各地区の基幹店と位置づけ、その店舗から健康の輪、食育の輪の推進を行う。具体例として、一押し料理の栄養計算や料理の組み合わせ、食べ合わせ等の効用を示したポスターやリーフレット作りや「食の健康協力店」へのサポーター活動としての実績作りの構築を目指す。
 - ②尼崎市内の食の健康を担う基幹店の登録店舗数の増加を目指す。
- 2月の報告会では、成果からみられた地域の課題解決のための提言を行います。

■ 地域に対してできる事

尼崎市にある「食の健康協力店」への取り組みを先行研究として3年間実施し、「食の健康協力店」の地域性や営業形態等により有意性や問題点が見えてきた。

このプロジェクトでは、「食の健康協力店」の相互連携の輪を作り上げ、地域の子供から高齢者までが関わり、食の安心・安全、健康意識の高い尼崎を目指して、学生が取り組んできた経験値からの健康と食に関する提案をしていきたい。

■ 連携先

尼崎市健康福祉局(尼崎保健所) / 尼崎市企画財政局ひと咲きまち咲き推進部

06

Project

庄下川環境を利用した地域住民の親水性の向上

●衣笠治子 (総合健康学科)

山本起世子 (総合健康学科)

■ 分野

学校教育

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは庄下川の親水性を高めるためのさまざまなプログラムを構築実施する。河川の側を歩き、実際に川の中を覗き込んでみると、都市河川でありながら、多様な動植物がみられる。幼児教育、学校教育の現場にプログラムや河川の生き物などの資料を提供することで、本学学生や地域住民にとって庄下川がより身近になり楽しめる場となってほしい。

■ 授業計画の概要

1学期は水環境の基礎的な知識を学ぶと共に、実際に大学周辺の庄下川でフィールド調査(水質の状況、生息している動植物、庄下川の持つ親水機能、立花地域の歴史など)を行う。また地域の児童を対象とした環境や理科分野に関するイベントにボランティアで参加する。夏休み中に小学生を対象とした親水プログラムを実施する。

2学期は、1学期に行った調査の結果を児童生徒の環境学習に役立つようにまとめ、発信するための媒体を作成する。児童生徒が自分の住む地域環境を理解し、楽しみ、誇りに感じ、さらには守っていくという意識を持つための方策を、考案実施する作業をする過程で、本学学生も同様に自らの学んだ大学地域を理解し、楽しみ、誇りに思えるのではないかと考える

■ 地域に対してできる事

庄下川は都市河川でありながら、多くの動植物が生息しており、利用の可能性はとてもおおい。しかし近隣の住民は、高度成長時代に汚れてしまった庄下川の印象が強く残っており、川で遊ぶ、虫や魚をとるといった行動はあまりみられない。我々の活動を通じて、植物や動物の多様さを近隣の児童生徒たちに紹介し、さらに親しみ深い河川とする。

■ 連携先

尼崎市健康福祉局衛生研究所

尼崎市経済環境局環境部環境保全課環境監視センター

07

Project

運動を活用した健康に暮らせる街づくり

● 林谷啓美 (人間看護学科)

藤澤政美 (総合健康学科)

■ 分野

健康づくり

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
- ✔ 気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは、尼崎市に住む高齢者とともにオリジナル運動に取り組み、交流することにより、学生の地域に関する関心を高め、多世代交流のためのコミュニケーション能力の向上を目指します。さらに高齢者の健康について考えるとともに、自らの健康観についても深め、健康に暮らせるまちづくりについての考察を深める力を養います。

■ 授業計画の概要

このプロジェクトでは、1. 尼崎市・尼崎市に住む高齢者の特徴について学び、2. 高齢者に適した運動についての知識と技術を習得し、3. 尼崎市に住む高齢者とともにオリジナル運動を実施します。さらに、4. 学生と高齢者により効果的な運動を考え、実施します。以上をふまえて、「運動活用からみる健康に暮らせる街づくり」について考え、地域の課題解決のための提言を行います。

■ 地域に対してできる事

自治会等地域の方々、尼崎市立総合老人福祉センター、社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会と連携・協働しながらオリジナル運動に取り組み、普及することにより、地域の方々の健康づくりに努めます。さらに、学生の地域に関する関心を高め、多世代交流・地域のコミュニティがさらに活性化することに寄与します。

■ 連携先

猪名寺自治会

中難波はなみずき会

社会福祉法人尼崎市社会福祉協議会

尼崎市総合老人福祉センター

08

Project

地域日本語教育への提言 ーボランティア育成の実践と課題ー

- 吉永尚 (人間健康学部) 実藤基子 (人間看護学科)
磯田宏子 (総合健康学科) 村端慶治 (人間教育学部)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは、日本語ボランティア教室など地域の異文化交流の現場に参加する事を通じて、国際的な経験値を高め、グローバルな人材としての素養を身に着けることを目的としています。

本学の交換留学生や日本語学級の外国人学習者と交流し、異文化について学び、日本語学習のお手伝いをする事によって、基本的な日本語知識や日本語教育法を身に着け、異文化交流のノウハウを学びます。本学の日本語ボランティア養成講座修了のボランティアの先生方とも交流し、具体的な教え方を学びます。学科を横断するメンバーの自主組織としてお祭りやイベントなど地域活動に参加し、異なった文化を持つ人たちと気軽に交流するためのいろいろなスキルを身につけます。

■ 授業計画の概要

1学期は、日本語・日本語教授法について基本的な知識を習得する事を目的とし、簡単な言葉を使って外国人とコミュニケーションが取れ、日常会話を教えることができるようにします。中国や韓国、ベトナムなど諸外国の食生活や若者文化などについても学びます。

2学期は、異文化理解の基本的な技術を学ぶ事を目的とし、異文化間ギャップに落ち着いて対応し、外国人に簡単な日本語や日本文化の紹介ができるようにします。日本の伝統文化についての教養も深め自国文化に関する素養を身に着けます。

■ 地域に対してできる事

尼崎市の在住外国人の方の地域日本語教育に貢献するため、日本語ボランティア教室での学習やイベントに参加させていただき、地域活動のお手伝いをします。また、大学と地域ボランティア、外国人の方達の交流の仲立ちとして、人的交流を広げることで、地域日本語教育の向上に貢献します。

グローバル社会に向けて、地域の異文化共生が課題となっていますが、一般的に異文化と接する機会は比較的少なく、スキルを学ぶ場も少ないのが現状です。本プロジェクトでは、大学、地域教育機関がタイアップすることで、学生が地域に住む外国人に直接対面し日本語教育を通して地域に貢献することができます。

■ 連携先

尼崎市教育委員会社会教育部(中央公民館 / 武庫公民館 / 大庄公民館 / 小田公民館)の各日本語学級

09

Project

学校と地域で創るからだと心の健康

- 江寄和子 (総合健康学科) 磯田宏子 (総合健康学科)
- 藤澤政美 (総合健康学科) 角田智恵美 (総合健康学科)
- 近藤照敏 (総合健康学科) 林淑美 (総合健康学科)

■ 分野

学校教育

■ 身につく力

主体性

考えぬく力

✔ 気づく力

✔ コミュニケーション力

✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは、「学校保健と地域とのつながり」を、学校の取組や地域で行われている健康を支える取組を通して学ぶ科目です。現在、全国的にも学校保健は「いじめ」「不登校」「アレルギー問題」「感染症」など様々な課題を抱えています。尼崎市においても、これらの課題解決に向けた取組を踏まえ、心身共に健やかな子どもの育成、生涯を通じて健全な健康観の醸成を図ることは、重要な課題です。さらに、課題解決の取組は学校だけでなく地域と連携して行っていくことが求められています。

今年度は、尼崎市内の小学校2校と1施設をフィールドに、様々な健康課題や課題解決のための取組を通して、「学校保健と地域とのつながり」を学びます。

■ 授業計画の概要

1学期前半は、「健康」をキーワードに、①「子どもと運動」②「心の健康-その理解と対応-」③「眼と学校保健」④「骨の健康とカルシウム」⑤「小学校における喫煙予防教育について(タバコの煙はどこまで広がるか?)」について講義形式で学びました。1学期後半～9月にかけて、A：尼崎市立立花西小学校、B：尼崎市立上坂部小学校、C：尼崎市立地域総合センター「神崎」をフィールドに、学校や地域の取組を観察したり、教育支援を行ったりしています。そして、具体的には以下の様に学生の視点で、「学校と地域で創るからだと心の健康」について考えていきます。

A：地域の子どもたちの健康問題を把握して、その問題を改善できるよう支援します。学生は9月に集中的に学校に行き、保健室の支援を中心に実施する予定です。

B：特別支援学級に在籍する児童への支援を中心に活動しています。月・木に交替で担当しています。

C：近隣中学校生徒の放課後の居場所として「スマイル★カフェ」を開催しています。学生は木曜日の午後2名～3名ずつ交替で担当します。夏休みにはイベントを計画する予定です。

■ 地域に対してできる事

A：9月の身体測定時に足型を撮りそこから問題点を分析し、子どもたちの身体の健康を支援します。

B：特別支援学級の子どもたちとの関わりを通じて、心身の健康や学習上の支援をしていきます。

C：「スマイル★カフェ」で直接子どもたちと関わることで、子どもたちの心の健康を支援していきます。

■ 連携先

尼崎市立立花西小学校 / 尼崎市立上坂部小学校 / 尼崎市立地域総合センター「神崎」

10

Project

長期・短期留学生との交流を通じて 異文化理解を深める

●村端慶治 (人間教育学部)

■ 分野

学校教育

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
- ✔ 気づく力
- ✔ コミュニケーション力
協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは、園田学園女子大学に来学し、日本語及び日本文化等を学習する長期留学生及び短期留学生を鏡として日本語の特色や日本文化について改めて考える機会を設けることを主眼としている。

普段学生たちが何の違和感も無く使用している日本語や、学生たちが当然のこととして行動している日本の習慣、風習を留学生からの質問に答えることで、日本人の考え方を学生たちに再考させることができるとともに、留学生の出身国の文化を学び、大学に居ながらにして異文化理解を深める。

留学生たちは、自国の文化と比較することで日本人の行動が理解できないことも多い。学生にとって当たり前のことが、外国の人にとっては当たり前のことにならないこと、一種の文化摩擦を授業内で体験することは、将来の国際人の資質を高めることになる。

■ 授業計画の概要

長期留学生と小グループでインターラクティブな意見交流をするだけでなく、異文化体験豊富な外部講師からの講義も取り入れ、学生自らが主体的に学ぶ方式で授業を進める。

台湾・開南大学、インドネシア・ブンハッタ大学、韓国仁川大学からの長期留学生と毎時間交流をするだけでなく、開南大学、ニュージーランド・カンタベリー大学、オーストラリア・クイーンズランド工科大学、フィジー・南太平洋大学からの短期留学生とも来日中に交流し、日本語及び英語を使用して異文化体験をする。

■ 地域に対してできる事

本学の国際交流センターでは、とりわけ尼崎市に特化したプログラムを推進している。学生にも地元の文化、歴史等をこのプロジェクトを通じて学んでもらうことを狙いとしている。特に、尼崎糸びす神社とのコラボレーションで、『「参レージ」プロジェクト』(神社仏閣等を巡りながら地元商店街を含む観光客の誘致)の基礎作りを行う。

■ 連携先

尼崎糸びす神社

11

Project

地域の学びプロデュース演習

●若狭健作 (株式会社地域環境計画研究所)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

学生生活で学ぶ専門的な知識や経験を、地域での学びの機会として提供するために、自らの経験を客観視し、いかに魅力的に発信するかという編集能力やプロデュース能力が必要とされます。演習全体を通して50分授業をまとめあげることで、学生の伝えるチカラの向上につながります。

■ 授業計画の概要

地域には様々な知識や経験をもった人が多く暮らしています。しかし私たちがそうした「街のプロ」のお話を聞く機会はすくなく、また「街のすごい人」たちは人知れず暮らしているものです。

2016年の夏に開かれる「みんなのサマーセミナー」で、百合学院中学校高等学校、旧聖トマス大学の校舎を使い、街の人たちがセンセイになる学校ごっこを開催します。中学生、お坊さん、社長さん、市長さんと様々な地元の人たちとともに教壇に立ち、イベント運営を実践的に学ぶ機会とします。

■ 地域に対してできる事

様々な職業や立場を超えた人々からなる「みんなのサマーセミナー実行委員会」の運営にかかわることで、幅広い年代の学びと出会うことができます。また本事業は尼崎市における提案型協働事業に位置づけられているほか、実行委員会スタッフには高校生や他大学からのボランティアも参加しており、こうした多様な年代との協働で学生ならではの力を発揮することができます。

■ 連携先

みんなのサマーセミナー尼崎実行委員会
尼崎市市民協働局・男女参画課

12

Project

まちづくり企画実践演習

● 綱本武雄 (尼崎南部再生研究所)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

尼崎の特産品だったサツマイモ「尼いも」の収穫祭への出展を通して、尼崎南部地域に関わりながら企画立案について学ぶ演習です。単にイベントに出るだけではなく、ニーズを探り、出展に向けて企画案を練り、実行後は検証もおこなうという一連の経験をもって、説得力と実現性の高い企画力を身に着けます。

■ 授業計画の概要

前半は「好きなものについて3分間話す」「イベントを見学して、主催者の意図を探る」といった課題に取り組みながら、基礎的な表現力の習得と事例研究をおこない、企画立案に必要な技術を学びます。

後半は、尼芋奉納祭の実行委員会とともにイベントの企画立案をおこないます。会場の下見や委員へのヒアリングを通して、イベントにどのようなニーズや課題があるかを考え、「必要と思われるもの」を企画・実践します。企画立案においては、各人の特技や専門性を生かすことに重きを置いて進めます。

■ 地域に対してできる事

尼崎市内でも屈指の人気を誇る夏祭りや、プロの囃家を呼んで開催されている地域寄席など、意欲的な取り組みが光る神社を舞台に、地域住民の方々とともに新しい「お祭り」をつくります。神社のある尼崎南部地域は、少子化と高齢化が進む、わが国の社会問題の縮図であるといっても過言ではありません。そのような地域で、子どもたちに向けてできること、多世代が交流できることに、真摯に楽しく取り組んでいきます。

■ 連携先

尼いもクラブ

尼崎総氏神貴布禰神社

13

Project

尼崎の女性センターを知り、 男女共同参画社会を考える

●岩田さやか (NPO法人男女協同参画ネット尼崎)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
- ✔ 気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトでは、尼崎市女性センターの歴史や役割を知り、女性問題や男女共同参画社会への取り組みを学びます。女性問題や、男女共同参画社会を目指すために取り組まなければならない課題は、自分と繋がっているということに気づき、解決策を考えます。

女性への暴力(DV)、とりわけデートDV(交際中の若いカップルの間で起こる暴力)は、学生にとって身近な問題です。DV、デートDVについて一緒に学び、考えます。

■ 授業計画の概要

授業は、学生同士のワークを中心に進めます。課題解決に向けて「自分の考えをまとめ、発表し、共有する」プロセスを大切にします。また、女性問題解決のために各分野で活動している女性ゲストスピーカーの講義を予定しています。学生たちには、ミッションと責任を持って活躍する自立した女性たちの生き方を、将来の参考にしてほしいです。

女性センターが開催している男女共同参画週間事業(6月)、あまがさき女性フォーラム(11月)に参画します。

■ 地域に対してできる事

デートDVについて考え、毎年11月に女性センターが開催している「あまがさき女性フォーラム」内ワークショップで、学んだ成果を発表したいと思います。

■ 連携先

尼崎市女性センター・トレピエ

14

Project

おもしろき こともなき世を おもしろく

●大原一憲 (NPO法人あまがさき環境オープンカレッジ)

■ 分野

生涯学習

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
- ✔ 気づく力
コミュニケーション力
協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトの前半では、「環境」というキーワードをもとに「あまがさき環境オープンカレッジ事業」に関する事柄を題材に「尼崎市の環境基本計画」に基づいた6つの視点から活動します。

学内での授業での話し合いを基に塚口駅前オープンスペースを利用して新しい人・もの・場と出会い体験を通して楽しく生きるための“環境”について考えます。また、後半では「大庄おもしろ広場」という社会実験の場で起きている「でき事」を通じて楽しく生きるための原理を考えます。

知識ではなく、現場の事実から見つけ出すために科を横断した新しい仲間と仲良く協力しながら、今後の生き方にプラスとなるものを自ら導き出すことができれば幸いです。

■ 授業計画の概要

1学期は、学内での授業において、新しいなかまとの相互理解を深めるために毎回違った観点から仲間を形成し、お互いの共通意識や違いを尊重する心を醸成します。材料としては環境活動を6つの分野①つながり楽②リサイクル楽③しごと楽④いきもの楽⑤くらし楽⑥ちきゅう楽の観点からお互いの思いを出し合い考えや意見を共有し、環境活動に携わる人々との対話を通してボランティアの世界について考えます。

2学期は、夏休み期間中に「おもしろ広場」での現場実習体験を行い、その中で「楽しく生きる」ための素材を収集し、それをもとに学内において「楽しく生きるための原理」について考察を深めます。前後期を通じて考えた内容を自らの行動にどのように活かすかを考え、「その成果をグループでまとめ、2月11日に向けた発表できる姿にまとめていく。

■ 地域に対してできる事

環境活動を行っている団体や人々の活動を理解し、その活動に対して助力し、元気を与えてくれる。

また、「若い、女性」の観点から新しい視点で活動のよさを再評価させてくれたり、「若い市民活動」を行う観点から改善するためのヒントとなる意見を出せる。

■ 連携先

NPO法人あまがさき環境オープンカレッジとその関連団体
大庄西中跡地活用団体「大庄おもしろ広場」とその関連団体

15

Project

100年の森づくりから生物多様性で遊ぶ プログラムをつくる

●石丸京子 (尼崎の森中央緑地環境学習森づくり)

■ 分野

学校教育
生涯学習

■ 身につく力

- 主体性
- 考えぬく力
- ✔ 気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

尼崎の森中央緑地では、工場跡地の埋め立て地に地域の生物多様性を人の手によって創り出す、新しい森づくりを行っています。タネから生き物いっぱいの森を目指す100年の森づくりは、自然資源の乏しい尼崎にとっては、環境学習の拠点としての機能も期待されています。

このプロジェクトは、実際の森づくりを題材にして、子どもたちが生物多様性を楽しく学び、理解する環境学習プログラムを開発し、実際に自分たちで環境学習イベントを開催して子どもたちへ提供する、実践的な環境学習研究を行います。

■ 授業計画の概要

尼崎の森中央緑地での実習を基本とします。生物多様性を創り出す森づくりの内容を理解し、子どもたちに生き物いっぱいの森の楽しさや大切さを伝えるプログラムを企画作成します。グループごとのテーマに沿って協力し合いながら作成します。また毎月開催されている子供向け環境学習イベントに参加し、活動のサポートをすることで、子どもたちへの接し方を経験します。完成したプログラムを、中央緑地と共催のイベントを開催し、実際に子どもたちへ提供し、その効果を検証します。

■ 地域に対してできる事

尼崎市は市全域が市街化区域となっており、まとまった自然緑地に乏しい環境である。子どもたちへの環境教育では、日々の生活の中で身近な自然と触れ合うことが非常に重要と考えられているが、尼崎ではそのような機会に恵まれない子も多い。中央緑地の自然を利用して、生物多様性を楽しく学べる教材を開発することで、今後環境学習の活発な利用につながることを期待される。また自然活動のボランティア団体は年配者が多く、大学生などの若い世代が森づくりへ関心を持ち、参加につながることで、活動の継続性を高めることができる。

■ 連携先

兵庫県立尼崎の森中央緑地パークセンター
アマフォレストの会

16

Project

地域に身近な薬局フリースペースにおける健康づくりプロジェクト

●林彩華 (studio-L)

■ 分野

健康づくり

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

尼崎の薬局に設置されたフリースペースを利用して、地域の人々が楽しく気軽に利用できる健康づくりの取り組みを企画・実施し、薬局のスタッフや利用する人々と関わりながら地域における健康づくりを考えていくことを目指したプロジェクトです。

尼崎の薬局に関わる方々へ、実際に現状の課題や今後の想いに関するヒアリングを実施し、地域の課題を把握します。その上で、学生の視点で取り組むことができる企画を立案し、実践していくプロジェクト型です。まず主体形成を図ります。プロジェクトは5名程度のチームで実施し、授業を進めていく中でチームビルディングを図ります。チームで協力してプロジェクトを実行する体験から、社会性を身につけるなど、時代が求める人材育成に取り組めます。

■ 授業計画の概要

1学期は、ワークショップ形式で地域の課題や魅力について話し合いながら、また、対象の薬局のフリースペースの見学や、関わる方々へのヒアリングを通して、取り組む企画を考えていきます。その過程でチーム化を図り、夏休みには実際に薬局のフリースペースを使って企画を実践します。

2学期は、夏休みの成果をふまえ、改善点を話し合いながら薬局で実際に取り組んでいけるようなプログラム企画をまとめます。

■ 地域に対してできる事

現在、人口減少、少子高齢化が進むなか、医療・保健・福祉などのサービスの受け手は増加し、そのニーズは複雑化しています。誰もが住み慣れた地域で安心して、生きがいを持って生活していくためには、それぞれの生活拠点となっている地域に根差し、住民が相互に助け合うコミュニティを形成していくことが重要です。今回の連携先となるファイン薬局尼崎支店では、フリースペースの運営を通して、地域にとって保険・医療・福祉をより身近なものへ、そして、住民のみなさんが地域や社会とつながることのできる窓口として、地域に開かれたスペースづくりを目指しています。プロジェクトでは、尼崎のファイン薬局のフリースペースをフィールドとし、その活用方法を企画・実践していくなかで、地域における健康づくりの取り組みを学生の視点で提案します。

■ 連携先

ファイン薬局尼崎店フリースペース「ツナガリ珈琲館」

17

Project

尼崎探検隊 富松地域

●久留島元 (同志社大学文学部嘱託講師)

■ 分野

学校教育

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトでは、尼崎の富松地域のまちづくりに学生たちが実際に参加し、地域の新たな魅力を発見していきます。富松地域では、自治会や子ども会などが協働する富松城跡を活かすまちづくり委員会が、長い間熱心に活動を続けています。そんな地元の「大人」たちの企画に、地域のことを知らない「学生」ならではの視点から、地域の新しい魅力を探り、発信することが目的です。学生たちは、実際に地元の行事に参加したり、まちあるきをしたりすることで地域について理解を深め、地域における課題の発見と、その課題を解決するための企画提案力、実行力を養うこととなります。

■ 授業計画の概要

尼崎の富松地域のまちづくり企画に学生たちが参加し、その地域の魅力を発見します。具体的に1学期は地元の「富松一寸豆祭」への参加や、まちあるきを通じて、これまで富松地域が取り組んできたまちづくりの成果を学んでいきます。そして、今年10月に第一回を予定している「富松城跡祭り」の企画に参加し、2学期には学生たち自身が提案した企画を、実行委員会との調整のなかで実現させていきます。最終的には、一年かけて知った富松地域の魅力を、ガイドブックまたはマップのような成果物として、今後のまちづくりへ生かしていく予定です。

■ 地域に対してできる事

これまで「大人」たちが取り組んできた「富松」のまちづくりに、地域のことを知らない「学生」の視点を加えることで、「大人」と「子ども」をつなぐような地域の魅力発見につなげていく。

■ 連携先

富松城跡を活かすまちづくり委員会

18

Project

あまっこキャリア教育プログラムの開発

●上田真弓 (兵庫教育大学大学院学校教育研究科准教授)

■ 分野

学校教育
子育て支援

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトでは、小学校の先生方や校区の地域の方々と協力しながら、小学校におけるキャリア教育プログラムを考えていきます。

地域の子供たちとその育ちを支える方々との出会いの中で、これからの社会や地域を担う子供たちにつけたい力を考えるとともに、自分たち学生に担える役割を考えます。これは、学生自身のキャリアを振り返ったり見通しを持ったりすることにも生きると考えています。

■ 授業計画の概要

1学期は、キャリア教育の基本的な考え方を学びながら、様々な立場で尼崎市のキャリア教育に携わっている方々などと出会い、そのビジョンや取組への理解を深めます。また、授業づくりや授業実施のトライアルとして、「第2回みんなのサマーセミナー」に出講し、「センセイ」として授業を行います。

2学期は、小学校の先生方や地域の方々の意見を聴きながら、授業の企画、調整及び準備を行い、実際に小学校で授業を実施します。実施後は、関係者からの意見も踏まえて改善案を作成し、キャリア教育プログラムとしてまとめます。

■ 地域に対してできる事

小学校においてもキャリア教育の体系化を進めつつある尼崎市において、地域と協働しながらキャリア教育を進める一つのモデルをつくります。また、毎日子供たちに向き合う学校の先生方と、豊富な地域資源とをつなぎ、調整する役割を学生が担います。

■ 連携先

尼崎市

尼崎市教育委員会

尼崎市立杭瀬小学校

同小学校区地域の皆さん

19

Project

地域の歴史を知り、 地域への誇りや愛着を育む

● 正岡茂明 (あまがさき市民まちづくり研究会)

■ 分野

学校教育

■ 身につく力

- ✔ 主体性
考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトでは、尼崎の若者たちに地域への誇りや愛着を育むため、尼崎の豊かな歴史を実感してもらう。学校における歴史の科目で学んだ知識を地域の歴史に結びつけるため、校外見学を実施する。尼崎にはそうした豊かな歴史を実感できる場所が多い。

この授業が始まったまさにその時期に、尼崎城が復元されることになった。この尼崎城を活かして、若者たちが尼崎に住み続け、地域社会の中核となって、様々な活動を担っていけるまちづくりのプランを若者の目線で作成する。

■ 授業計画の概要

1学期は、尼崎の、江戸時代を中心とした歴史を学び、文化財収蔵庫にも見学のため訪れて、知識を深める。また尼崎城が復元される城内地区の整備計画を担当する尼崎市の「ひと咲きまち咲き推進部」よりゲストスピーカーを招いて、城内地区まちづくりプランを聞く。7~9月は、グループ分けをして、グループで校外見学を行う。

2学期は、校外見学やこれまでの授業で得られた知識や情報を基にして、まちづくりプランの検討・作成と発表会へ向けてのポスター作りを行う。尼崎市の「ひと咲きまち咲き推進部」とも連携する。

■ 地域に対してできる事

尼崎市制100周年となる今年、また尼崎城が築城されて400年なる再来年。このようなタイミングに合わせて尼崎の若者が尼崎のまちづくりを考え発表する。小さな一歩かも知れないが、若者たちが尼崎に住み続け、地域社会の中核となって、様々な活動を担っていけるようにとの願いを実現するための第一歩にしたい。

■ 連携先

尼崎市企画財政局ひと咲きまち咲き推進部

尼崎市立文化財収蔵庫

尼崎市立地域研究史料館

20

Project

武庫地区における市民活動の多様性の理解と実践的研究

● 檜垣龍樹 (NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク)

■ 分野

学校教育
生涯学習
子育て支援

■ 身につく力

主体性
考えぬく力
✔ 気づく力
✔ コミュニケーション力
✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

このプロジェクトは、武庫地区における様々な市民活動に参加することで、地域での活動に取り組む多世代の方々と関わりながら、子育て支援の活動や、青少年の健全育成、自然環境の創出・保全など、市民活動の多様性を理解するとともに、市民の皆さんとともに魅力あるまちづくりを考えていきます。

座学で学ぶよりも、地域に出かけて、地域の皆さんとともに、ともに考え、ともに行動するなかで、地域課題解決のための企画力や実行力を身につけていきたいと考えています。

■ 授業計画の概要

1学期から夏休みにかけては、「ホテルの学習会」や、「乳幼児のおやこなつまつり」、「むこっ子サマースクール」など、武庫地区で行われている子どもをターゲットとした様々なイベントに参加することで、まちを元気にしたいと頑張っておられる地域の皆さんとのふれあいつつ、市民活動の多様性を学ぶこととしています。

2学期は、10月に行われる武庫地区最大のイベントである「ふれあいひろば武庫21（武庫まつり）」に出店参加することで、企画力や実践力を養うとともに、これまで比較的関わりの少なかった武庫地区の皆さんに、地元の大学の取り組みをアピールしたいと考えています。

■ 地域に対してできる事

武庫地区は都市化が進んだ尼崎市の中にあっても豊かな自然が残っており、「ホテル」や「コスモス」をキーワードとした取り組みは、武庫地区にとどまらず、尼崎市の代表的な都市魅力の資源となっています。地域の皆さんは、今も残る貴重な資源は、それを大切に残していきたいという熱いと絶え間ない活動の賜物であり、そうした取り組みを次世代を担う子どもたちに伝えて行きたいと考えておられます。

このプロジェクトを通じて、大学生が地域活動に参加することで、従来の活動に新たな風を吹き込むとともに、地域の皆さんの思いを子どもたちに伝えていくための架け橋になれるような役割を意識しながら進めて行きたいと考えています。

■ 連携先

コミュニティルーム武庫運営委員会
むこっ子ロード整備実行委員会

21

Project

「笑い」による健康増進プログラムの開発

●宮島友香 (松竹芸能株式会社事業開発室)

■ 分野

健康づくり

■ 身につく力

- ✔ 主体性
- ✔ 考えぬく力
気づく力
- ✔ コミュニケーション力
- ✔ 協働する力

■ プロジェクトの特色

学生は、始めに「笑育」で、21世紀型スキルを修得します。「笑育」とは、漫才づくりを通して思考力、発想力、ともに漫才を発表する相方と協同する力などを育成する、松竹芸能が開発したプログラムです。その後、“笑い”を通して、猪名寺地区の高齢者の、健康寿命を延伸するプログラムの開発・実施をします。

■ 授業計画の概要

本授業では、松竹芸能が開発した「笑育」のプログラムを活用し、高齢者の健康と“笑い”の関係性について考えるとともに、日常生活の中にある実情や課題を見つけながら、それを“笑い”につなげていくことで、健康増進に資するプログラムを開発します。

その上で、“笑い”のプロである芸人から、どのようにすれば日常生活の中で人生を豊かにする“笑い”を見出すことができるのか、そのような“笑い”をどうすればより多くの人々の心に届けることができるのかについて学ぶ。その学びを踏まえ、グループで考えた“笑い”の要素を取り入れた健康増進プログラムを実施します。

■ 地域に対してできる事

猪名寺地区の高齢者が、健康で長く自立した生活ができるように、“笑い”を取り入れたプログラムを開発します。実践後は、プログラムが有効であるかを検証し、自治会に提案を行います。

■ 連携先

猪名寺自治会

本年度からの開講科目「つながりプロジェクト」では、全 21 のプロジェクトが 1 年間それぞれ多彩な活動を展開してきました。

本発表会は、各プロジェクトを履修した学生たち（本学 2 年次生）が 1 年間の成果を発表する場として、また発表に対してさまざまなご意見をいただく場として開催しました。午前と午後でそれぞれ 3 会場 7 プロジェクトずつ、10 分間の発表と 5 分間の質疑応答が実施されました。発表の後、学部長による講評と参加された地域の方や教員からのコメントカードをもとに、プロジェクトごとの総括が行われました。（地域連携推進機構 TA 久留島元）

【スケジュール概要】

09:00～09:05 開会の辞（学長挨拶）

09:05～09:20 来賓挨拶

稲村和美氏（尼崎市長）

中村昇氏（商工会議所専務理事）

09:30～12:00 学生発表【1 回目】

講堂 / 135 教室 / 1317 教室

12:00～13:00 昼休憩

13:00～15:30 学生発表【2 回目】

講堂 / 135 教室 / 1317 教室

15:40～16:10 全体講評・挨拶

16:30～17:30 各プロジェクト総括

【プロジェクト一覧】

1. タブレット端末を活用した「よりわかりやすい授業」のデザイン（堀田博史）
2. 地域における感染対策「手洗い教室」（山本恭子）
3. 地域資源を活用した安心・安全まちづくり（大江篤）
4. 地域子育て支援（影浦紀子）
5. 健康意識の高い町・尼崎の土台づくりと食育の定着について（餅美知子）
6. 庄下川環境を利用した地域住民の親水性の向上（衣笠治子）

7. 運動を活用した健康に暮らせる街づくり（林谷啓美）
8. 地域日本語教育への提言（ボランティア育成の実践と課題）（吉永尚）
9. 地域で創るからだと心の健康（江崎和子）
10. 長期・短期留学生との交流を通じて異文化理解を深める（村端慶治）
11. 地域の学びプロデュース演習（若狭健作）
12. まちづくり企画実践演習（綱本武雄）
13. 尼崎の女性センターを知り、男女共同参画を考える（岩田さやか）
14. おもしろきこともなき世をおもしろく（大原一憲）
15. 100年の森づくりから生物多様性で遊ぶプログラムをつくる（石丸京子）
16. 地域に身近な薬局フリースペースにおける健康づくりプロジェクト（林彩華）
17. 尼崎探検隊 富松地域（久留島元）
18. あまっこキャリア教育プログラムの開発・実施（上田真弓）
19. 尼崎の歴史を知り、尼崎の歴史力を感じてもらう（正岡茂明）
20. 武庫地区における市民活動の多様性の理解と実践的研究（山本起世子）
21. 「笑い」による健康増進プログラムの開発（宮島友香）

【全体講評・挨拶】

この種の発表会では発表する側、聞く側ともにさまざまな経験ができる。2 年次生にとっては学ぶことが多かったことと思う。

大勢の前で発表すること、事前準備ができない質疑応答はとくに良い経験になったのではないかと。プロジェクトそのものの面白さと難しさが聞く側には伝わってきた。

授業の成果である「高められた経験値」を、これからの機会にいかんにかかしてほしい。

（本学人間教育学部長・芹澤剛）

児童に対する庄下川自然観察会の構築 および実施

213410183 中屋 明日香

本ゼミでは、2008年から庄下川で親水性の向上を目的とした水質検査および幼児・児童を対象とした親水性プログラムを行ってきた。今年度は夏休みに2日間連続で、小学生を対象とした「まちな自然みいつけた 庄下川観察会 2016」を尼崎市衛生研究所と協働して実施した。参加した児童が河川環境を利用して身近な自然を知り、楽しみながら環境学習ができるようなプログラムの構築実施を目的とした。

プログラムの日程は8月23日、24日、参加児童は14名である。児童4～5名、学生ボランティアリーダー2～3名で1グループとし、観察会は庄下川アメニティゾーンとラーニングcommonsで行った。1日目のプログラムは河川敷で水質検査を行った後、グループに分かれて植物観察、水生生物観察、プランクトン観察を行った。水質検査はパックテストによるCOD測定、濁度、pHメーターを用いたpH測定を行い、30年前の庄下川の水質検査のデータと比較し、水質が改善されていることを示した。植物観察は、河川敷で実際に植物を採集して大学に持ち帰り、スケッチや観察を行った。水生生物は前日に川に仕掛けておいたペットボトルで作製したトラップを児童と一緒に回収し、捕獲した水生生物の観察を行った。プランクトン観察は、当日河川水を採水し、プレパラートを作製し、顕微鏡で検鏡、スケッチ、デジタルカメラで写真を撮るようにした。その後、図鑑やウェブを利用して、見つけた動植物の名前や生態を調べた。2日目はグループごとに観察した内容を基に、ポスターを作成し、プレゼンテーションを行った。

プログラムに先立ち、昨年度の研究をもとに学生ボランティアリーダーへの研修を行った。参加リーダーは15名である。研修は、実際のフィールドへの下見や予備実験の内容で、90分を2回、リハーサルを1回行いプログラムの全体の流れをつかみやすいよう心がけた。また、当日児童に配布した観察ノートには観察したことを書き込めるようにし、pH測定、水質検査、触ると危険な植

物などの資料を掲載した。

参加児童、学生ボランティアリーダーの録音記録を分析した結果、学生スタッフは積極的に児童に声掛けをおこない、プログラムが進むにつれコミュニケーションが円滑になっていき、同時に児童の異年齢交流も積極的に行われていた。また、多くのスタッフが参加したことにより、危険にも初期段階で気づくことができ、回避することができた。

この研究は、11月12日の第5回武庫川市民学会で口頭発表した。

庄下川アメニティゾーンの水質経年変化

213410284 松田 明由未

我々の研究室では、庄下川アメニティゾーンでの水質検査を2008年度から継続的に実施してきた。その項目は気温、水温、DO、pH、COD、透視度、BODであったが、今年度は新たに浮遊物質量検査(SS)、細菌検査も加えて実施した。特にDO、BODについては尼崎市立衛生研究所がおこなっている尼崎市内河川の水質モニタリングの実験方法にならひおこなった。測定結果は庄下川流域他地点との結果との比較、過去の水質検査結果との比較をおこない、庄下川の河川水質の特性を明らかにすることを目的とした。検査項目のうち、DO値は、測定方法をDOメーターで測定およびウィンクラー法(滴定法)で測定の2種類、BOD値では、測定方法をDOメーターで測定、酸素飽和にする曝気操作を入れた後DOメーターで測定、公定法であるウィンクラー法(滴定法)で測定の3種類で実施した。さらに、浮遊物質量検査では検査期間中、月に1度以上測定することで透視度や前日の天候との関連があるかどうか検討した。試料水は庄下川上生嶋橋中央から表層水を採水した。水質検査期間は平成28年2月～10月の合計28回、細菌検査は平成28年5月～10月の合計8回実施した。統計分析はIBM SPSS Statistics ver.20で、相関分析、*t*検定、一元配

置分散分析、多重比較検定は Tukey 法を用いた。有意水準はいずれも 5%以下とした。

測定期間中の水質検査項目の平均値は、DO11.83mg/L ± 標準偏差、pH8.89、COD9.7mg/L、BOD2.78mg/L、透視度 108cm、浮遊物質量 5.5mg/L であった。環境省の定める環境基準と比較すると DO は最もきれいと言われる AA 型 (7.5mg/L 以上) であった。pH は環境基準値 (6.5 以上 8.5 以下) を上回ったが、過去のデータでも同じ傾向がみられている。BOD は B 型 (3mg/L 以下)、浮遊物質量は最もきれいと言われる AA 型 (25mg/L 以下) であった。測定方法の違いによる DO 値および BOD 値は、DO 値、BOD 値ともに有意差が認められ、ウインクラー法 (滴定法) で測定した場合の測定値が有意に高くなった。また、平成 25 年度尼崎市環境監視センター年報より下流にいくほど DO 値、BOD 値ともに測定値が高くなっているが、市の採水地点より上流である今回の検査が最も高い測定値を示した。細菌検査は、大腸菌群・大腸菌検査で全ての検査日に陽性反応が出た。一般細菌が $6.43 \times 10^2 \sim 8.6 \times 10^3$ cfu/mL、大腸菌群数 MPN 値は 26~110MPN/100mL、大腸菌数 MPN 値は $4.0 \times 10^2 \sim 1.2 \times 10^3$ MPN/100mL であった。

なお、この研究は、第五回武庫川市民学会 (2016.11.12) で口頭発表した。

同一地域在住の高齢者を対象にボランティア を行う高齢者の参加要因と継続支援

212440072 糸原 麗

I. はじめに

高齢化が進み生産年齢人口が減少していくなか、高齢者の多い地域では、高齢者間の交流を持ち、元気な高齢者が地域で高齢者を支える仕組みを持つことが大切になると考えた。それは、定年退職してもなお、地域で活躍するための場所と役割を持つことになり、さらにボランティアを行うための健康を維持するための努力ができることにつながる。

本研究では、高齢者を対象にボランティア活動を行う高齢者の参加要因とそれらを円滑に継続していくための支援を明らかにすることを目的とする。

II. 実施方法

1. 同一地域在住の高齢者を対象にボランティアを行う高齢者の 65 歳以上の男女を対象に半構造化面接を行い、対象者の了解を得た上で IC レコーダーに録音し、インタビューを行った。逐語録を作成した後、ライフヒストリー法、およびエピソード分析を用いて分析を行った。倫理的配慮は文書と口頭で説明し同意を得た。

2. インタビューガイド

- (1) 現在行っているボランティアは何か、それくらいの期間行っているか
 - (2) 参加のきっかけ、継続している理由
- など 7 項目

III. 結果

対象者の概要：A さん、70 歳女性、40 代前半より、ボランティアグループに所属し、老人ホームで園芸や入居者と傾聴のボランティアをしている。

Aさんは西日本の地方で生まれ、結婚してX市へ転入するまでそこで生活していた。幼少期の語りとして、園芸が好きだった祖父の影響で花が好きになり、学生のころから一人で花が育てていたことや幼いころから積極的で前向きな性格だったことが語られた。高校を卒業後、衣料関係の会社に就職し、結婚するまで働いていた。独身のときは、好きな園芸が出来ていなかったと語られた。結婚を機にX市へ転入した。結婚して、子どもが生まれ、家で園芸ができるようになったが、育友会やPTAで役員をしていたことや育児をしていたことから自分の時間を持つことができなかつたことなどが語られた。育友会やPTA以外にも地域活動に参加しており、その中でボランティアグループに入るきっかけとなる知人と知り合っていたことが語られた。その知人に誘われてボランティアグループに入った。ボランティアグループには入ったが、決められた業務内容や決められた活動がなく、戸惑っていた様子が語られた。第2子が小学校高学年になり、育児に余裕がでてきたことをきっかけに自分の趣味の時間を持てるようになり、ボランティアやパートもはじめた。ボランティア活動での資金は家計に響かない程度であることとAさんにとって好きなことができることがボランティアであることがわかった。エピソード分析からは傾聴ボランティアや普段の入居者との関わりをとおしてボランティア活動の継続の要因につながった出来事が語られた。

IV. 考察

参加要因として、Aさんの好奇心旺盛で前向きな性格やチャレンジする性格が参加の要因になったことが考えられる。中年期における地域活動の参加の意思は自由であるが、活発に参加していたことが高齢期のボランティア活動の基盤になったと考えられる。福島(2012)は、高齢者のボランティア参加の要因として、「中年期における地域とのかかわりやボランティア経

験を有していたこと」と述べており、Aさんはボランティアグループに参加するまでに多数の地域活動に参加しており、その間に人間関係の構築が進んだことでボランティア活動の参加に至る機会を得たことが考えられた。第1子が中学生、第2子が小学校高学年の頃から自分の時間を確保することが可能になり、ボランティアグループへの誘いを引き受けやすいタイミングであったことが考えられる。ボランティア活動をきっかけに人との交流が増え、楽しさと充実感を得ていることで参加の意欲の向上に結びついたと言える。ボランティアに決められた業務内容や決められた活動がないために、何をしたらいいかわからず戸惑っていたが、活動を継続していくなかで自分なりの活動を見つけた様子に変化したことがわかる。継続要因として、子どもの頃のように再び園芸をできるようになった喜びとAさん自身の人間関係の広がりが得られた。園芸ボランティアをしていることについては、入居者の施設における生活が豊かになる部分でボランティア活動をしている自分を肯定的に捉えることができていた。身近な地域で自分のできることを行うボランティア活動が継続につながると考える。これまでの地域活動の経験をボランティア活動に活かしており、ボランティア活動での経験が、さらなる地域貢献につながっていた。また、家族の協力が継続するうえで重要であることが示された。Aさん自身が園芸ボランティアの材料等の経済的負担よりもボランティアでやりたいことを行っているという自己効力感の高まりが、ボランティアの継続につながっていると考える。藤原ほか(2005)は、高齢者のボランティア活動は、高齢者自身の心理的健康度を高めると述べており、高齢者の社会参加は健康の維持向上につながることを考えられる。インタビューを行うことでこれまでの人生とボランティア活動がどのように関連しているか、高齢者と関わるうえでの自身のプ

ラスとなっていることに気が付いた。従って、支援として、リフレクションを行うことは必要であると考え。また、ボランティア活動を継続していくためには健康も重要であるため、高齢者の健康の支援も行っていく必要があると考え。

V. 結論

幼い頃から好奇心旺盛で興味のあることにはチャレンジする性格だったことや、育児に余裕がでてきたときにボランティアグループの誘いがあり、参加しやすいタイミングであったことが参加要因として挙げられる。子供のころに好きだった園芸を再びできるようになった喜びを得られていることや人間関係の広がりを得られたこと、居住地域でのボランティア活動であったこと、夫の協力が得られたこと、傾聴ボランティアや入居者との関わりがAさん自身の考え方に良い影響を及ぼしたことが継続要因として挙げられた。ボランティア活動をしている高齢者にリフレクションを行い、ボランティア活動がどのように自身へ影響を及ぼしているか確認することと日頃から健康面の観察や健康相談を行い、高齢者の健康の維持向上に努めることが支援として挙げられた。

引用・参考文献

福島忍(2012). 単身高齢者の地域活動・ボランティア活動への参加の促進に関する研究—都営住宅に居住する単身高齢者への調査を通して—目白大学総合科学研究 8号 41-50
藤原佳典, 杉原陽子, 新海省二 (2005). ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響—地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義—. 日本公衛詩. 52(4), 293-306

小学生を対象にした認知症サポーター養成講座における効果的な教育プログラムの検討

213440136 上園 真由実

I. はじめに

日本の認知症の人の数は平成 24 年で約 462 万人、平成 37 年には約 700 万人前後になり高齢者の約 5 人に 1 人が認知症になると予測されている。現在「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」(新オレンジプラン) が展開されており、認知症高齢者を支える認知症サポーターを全国で 800 万人(平成 29 年度末)養成することを目標にしている(厚生労働省, 2015)。しかし、現在は核家族化が進み、認知症高齢者と接する機会が少ない。そして、認知症についての知識獲得にはマスメディアの影響力が大きいと言われているが、マスメディアからの情報では誤った知識や偏見を持つ可能性があると考えられる。そこで、他者への分与行動が増加する児童期において、認知症サポーター養成講座を実施することは、認知症高齢者への理解を深める時期として適していると考えられる。

現在、認知症サポーター養成講座の実践報告は多く見られるが、児童に効果的な教材や教育プログラムを検討した研究はほとんど見当たらない。よって、本研究では、児童を対象にした効果的な認知症サポーター養成講座について検討することを目的にする。

II. 研究方法

1. 研究デザイン: 介入研究
2. 実施日: 平成 28 年 7 月 22 日、9 月 13、16 日
3. 対象者: A 小学校の児童
 - 1) 小学校 5 年生 参加希望の男子 2 名、女子 5 名の合計 7 名
 - 2) 小学校 6 年生 9 月 13 日は男子 31 名、女子 32 名の合計 63 名
9 月 16 日は男子 30 名、女子 33 名の合計 63 名
4. 認知症サポーター養成講座の目標
 - 1) 認知症高齢者についての正しい知識とイメージを児童が持つ。
 - 2) 認知症高齢者を地域全体で見守るために、児童にもその一端を担ってもらえるような意識づけをする。
 - 3) 受講した児童からその保護者へ、認知症高齢者への理解を広める波及効果がある。

5. 教育プログラムおよび方法論

小学校における認知症サポーター養成講座（以下、講座）の実践報告を検討し、講座の基本カリキュラムと副読本に基づいて、A 小学校、B 地域包括支援センター職員（看護師）と協議し、A 小学校における有効なプログラムを企画・立案・実施した。6年生プログラムは5年生プログラムを修正したものを、2日間に分けて授業の一環として実施した。

プログラムの1日目は①認知症高齢者のイメージ確認（講座前にラベルワーク）、②認知症の定義、③物忘れと記憶障害の違い、④記憶のメカニズム、⑤脳の働き、物の認識、⑥見当識障害（迷子になる仕組み）、2日目は⑦前回の振り返り（DVD鑑賞）、⑧認知症高齢者への接し方（ロールプレイング）、⑨認知症高齢者のイメージ確認（講座後にラベルワーク）⑩認知症の早期発見・早期診断・予防の説明、⑪認知症サポーターとして何ができるのかを考え、学年全体で共有すること、にした。①～⑥は自作した模造紙上でマグネットを利用して画用紙を動かし、物忘れ

と記憶障害のメカニズムの違いや、物の認識と意味判断の関連について視覚化した。

6. 倫理的配慮：講座の概要、担当者、問い合わせ先等を記載した説明書と、卒業研究と地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）の概要説明、収集したデータの活用の依頼、倫理的配慮を記載した同意書を、研究協力者である対象者とその保護者に配布し、同意を得た上で講座を実施した。

III. 結果・考察

認知症の知識について説明する際、児童は模造紙を目で追いながら説明を聞いていたり、食事場面や赤信号で止まれないという具体例を挙げた時には、児童から「へえ」と声があがったり、頷いたりしながら話を聞いている様子が見られた。このことから、児童の視覚に訴えるものを提示することや、知的好奇心を刺激することにより、講座への関心を引きつけることができ、学習への動機付けを高めることができたと考えられる。また、DVD鑑賞の開始後すぐに児童から笑い声があがったが、その後は私語することなく受講していたことから、アニメーションであることの驚き、画の柔らかさや声質などが児童の関心を引き、その後は集中していったと考えられる。そして、児童が

実演するロールプレイングや全員で行ったラベルワークでは、体を動かして体験できるプログラムであったため、児童は学習意欲が喚起されたと考えられる。以上のことから、視聴覚教材を利用したプログラムは、児童にとって効果的であると考えられる。

今回、講師は、初めて児童対象の講座を実施したため、当初、講座の実施には戸惑いが見られた。現在、核家族化が進む中、児童は認知症高齢者のイメージを持ちにくい。そのため座学だけのプログラムでは、認知症高齢者を理解することが難しいため、認知症高齢者のイメージが持てるような児童対象の基本カリキュラムが必要になると考えられる。また、授業の一環で行うことにより全員に受講をしてもらえるため、多くの認知症サポーターが養成できるメリットがある。

有意義な講座を実施するためには、小学校と地域包括支援センター双方の目的に沿ったプログラム作成が必要であり、そのためには協議を重ねることが重要である。円滑な協議を進めるためには、感情的にならずに自分の考えや信念などをその場にふさわしい方法で表現するアサーティブな態度が必要だと考えられる。

知識提供のみの座学では、児童の講座に対する関心が薄れ、主体的に受講できないと考えられる。そのため、児童への教授に専門性がある小学校と認知症の専門的知識がある地域包括支援センターが連携し、専門性を活用して協働することが重要だと考えられる。

IV. まとめ

児童が参加でき、視聴覚教材を活用するプログラムは、児童の関心を引けること、集中力を維持できること、学習への動機付けを高めることができ、効果的であった。児童を対象に講座を実施するためには、児童への教授に専門性がある小学校、認知症の専門的知識がある地域包括支援センター、子どもを育てる地域の関係機関が連携し、各々の専門性を活かして協働することが重要である。

引用文献

厚生労働省（2015）. 認知症施策「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域

づくりに向けて～（新オレンジプラン）.

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12>

300000-Roukenkyoku/0000079009.pdf（2016年4月20日検索）

クリニックにおける栄養教育と管理栄養士の役割

42 番 下地遼

44 番 庄司侑華

59 番 西岡菜奈

【目的】

クリニックにおける栄養指導についての管理栄養士と患者の調査を行ってきた。アンケート調査では、クリニックは身近であるため食事療法が継続しやすく、病院よりもクリニックで栄養指導を受けたいという結果が得られた。しかし、クリニックでの栄養指導が普及していないのが現状であった。私たちは今後の生活習慣病の発症と重症化予防のためにもクリニックにおける栄養指導が重要であり、国民の健康の保持・増進、健康寿命の延伸に繋がるのではないかと考えた。そこで、本研究では尼崎市のクリニックの医師を対象に、アンケート調査にて現状を知ることにより今後のクリニックにおける管理栄養士の役割について検討することとした。

【方法】

尼崎市内のクリニック 230 名に対し、クリニックにおける管理栄養士の必要性に関する質問紙調査を行った。そのうち、回答を得られたのは 83 名(36%)であった。調査内容は、主な疾患名等の現状調査や、食事の重要性、栄養教育の対応、管理栄養士の役割及び必要性等の意識調査である。

【結果】

患者の主な疾患は高血圧・脂質異常症、糖尿病等の生活習慣病が多かった。食事の重要性に関する設問では「とても重要である・重要である」と答えた割合が 95%であった。栄養教育の対応では、医師が行っているのは 71%であり、管理栄養士が行っているのは 14%であった。管理栄養士を必要だと感じているが、雇っていない

クリニックが 58%であり、コストやニーズが少ない（患者数が少ない）等が問題であると回答していた。

【考察】

患者の主な疾患は生活習慣病が多く、食事の重要性を感じているのにも関わらず、栄養教育は医師が行っているのが現状であった。管理栄養士を雇わない理由として、コストやニーズが少ないという意見も多く挙げられた一方、栄養教育について今後の展望として医師は生活習慣病等の増加に伴い、重要度は増すと思う。食事療法のみで改善されたケースも多くあると回答しており、そのことによって薬物治療を減らす事ができ医療費の削減にも繋がると考える。今後、患者にとって身近であるクリニックで管理栄養士による栄養指導を普及させることが重要であり、患者個人のニーズに合った指導が必要である。また、社会全体に対し、栄養に関する啓発運動を起こし、正しい食生活を身に付けてもらうことも重要である。それらの取り組みにより、生活習慣病の発症と重症化予防に繋がり、国民の健康の保持・増進、健康寿命の延伸に寄与できると考えられる。

地域コミュニティと公園

213710406 佐藤優

I. 目的

私は 2015 年に「猪名寺忍者学校」に参加した。尼崎市立園田北小学校の 1 から 4 年生 50 名を対象に、佐璞が丘公園や猪名寺会館を舞台として開催された。活動に参加すると、地域のことを真剣に考え、それを実行しようとする自治会や婦人会、子ども会の方々の熱心な姿が印象的だった。核家族化や高齢化が進む現代では、「地域で生活を支えあう」という概念すら薄れているが、猪名寺地域は「地域の子どもは地域で育てる」ことに挑んでいる。そこで、忍者学校の舞台となった佐璞が丘公園を参考に、コミュニティの原点として公園を活用する方法を考察する。

II. 方法

1. 聞き取り調査

元尼崎市職員の榎本利明氏に、佐璞が丘公園周辺の森林が現在の姿に至るまでの話を聞いた。佐璞が丘公園周辺の森林は、尼崎市が用地買収を繰り返し、多大な財産をかけて守っている自然であることが分かった。また猪名寺自治会の内田会長、尼崎市役所土木部富田氏からは、森を守る後継者の育成と治安やイメージの改善が今後の課題であることを知った。

2. アンケート調査

佐璞が丘公園を学区に含んでいる尼崎市立園田北小学校に通う 3 年生と 6 年生、また 3 年生保護者と 6 年生保護者を対象に公園の利用に関するアンケート調査を行った。

3. 文献調査

公園づくりに関する書籍や佐璞が丘公園の記載がある文献をもとにデータ収集を行った。

III. 結果

佐璞が丘公園が、地域住民の中で良い印象を持たれていないことが分かった。佐璞が丘公園に生い茂る木々は常に手入れをしないと鬱蒼と生い茂る木が多く、森を守ってくれる後継者を見つけることが大きな課題といえる。他には小学 6 年生が保護者と関わる時間が短いということ、公園は子どもの遊び場であるという固定観念が強いことも分かった。私は幅広い年齢の方がゆったりと時間を過ごせる憩いの場として公園が成立するべきだと考えた。

IV. 考察

1. ハンモックホリデー：佐璞が丘の森林にハンモックを取り付け、地域住民に開放する。フリーマーケットを開催し、移動販売のお店を呼ぶ。ハンモックは親子二人が乗っても十分すぎるものもある。親子がゆっくり会話していないように感じる現代で有効なイベントになるといえる。
2. クラフトワークショップ：小学生の子どもを対象に、工作をする。ねらいは持ち帰って親子で遊ぶことができるものを作ることである。家に帰ってから、また遊ぼうと思えるものであれば、どんなものを作ったのか親が目にし、一緒に遊び、関わるができる。

彙報

地域連携推進機構 平成 28 年度統括会議
(地域連携推進機構運営委員会) 記録

出席者名簿

【尼崎市】

尼崎市企画財政局 立石孝裕課長

尼崎市企画財政局 大前仁哉係長

【尼崎商工会議所】

尼崎商工会議所産業部、小林史人部長

【尼崎市社会福祉協議会】

尼崎市社会福祉協議会、富奥眞二事務局長氏

【地域連携推進機構運営委員】

総合健康学科：山本起世子教授、藤澤政美教授

人間看護学科：野呂千鶴子教授、金岡緑教授

食物栄養学科：渡辺敏郎教授、児童教育学科：

衣笠知子准教授、生活文化学科：木原禎希准教授

幼児教育学科：林理恵准教授、児童教育学科：

大江篤教授・企画運営部長、(地域連携推進機構副
機構長)

【地域連携推進機構事務局】

教務課：中塚真由美、教務課：雑喉隆宏、学生課：

寺田豊、企画運営部：谷昌子、図書館：榊井かず

美、学術研究支援課：中西智子、キャリア支援課：

西田英一、総合生涯学習センター：大野明子、

地域連携推進機構：北蒸子、地域連携推進機構：

榎本匡晃

第 1 回

日時：平成 28 年 4 月 21 日

場所：園田学園女子大学 第二会議室

議題：

- (1) 大学 COC 及び大学 COC+について
- (2) 経験値評価システムについて
- (3) まちづくり解剖学について
- (4) 域志向教育研究応募状況
- (5) 県の大学生による地域活動の補助金について
- (6) 報告・その他
 - ① 平成 27 年度まちの相談室報告、学生の活動報告
 - ② 平成 28 年度つな Girl 活動企画書、ボランティア情報、まちの相談室

③ 観察実習等調整状況報告

④ 平成 28 年度情報発信ニュースレターについて

⑤ 平成 28 年度日程概要

第 2 回

日時：平成 28 年 5 月 19 日

場所：第二会議室

議題

- (1) つながりプロジェクトについて
- (2) CBL 研究会について
- (3) 地域志向教育研究採択について
- (4) 経験値評価システムについて
- (5) 報告・その他
 - ① まちの相談室の記録 (3/30～5/13) について。
 - ② ボランティア情報について。
 - ③ つな Girl の活動について。
 - ④ 「尼崎市適塩化フォーラム」(5/8) (食物栄養学科全教員参加) について
 - ⑤ 大学コンソーシアム兵庫神戸学生交流委員会について
 - ⑥ まちづくり解剖学、熊本ボランティア等の実施報告及び予告

第 3 回

日時：平成 28 年 6 月 16 日

場所：第三会議室

議題：

- (1) 経験値評価システムについて
- (2) つながりプロジェクトについて
- (3) 地域志向教育研究について
- (4) 大学コンソーシアムひょうご神戸キッズフェスティバルについて
- (5) 富士通、尼崎信用金庫申し出の知財活用アイデアプレゼン参加について
- (6) 報告・その他
 - ① 学生地域連携推進機委員会 つな Girl
 - ② 平成 28 年度ボランティア活動
 - ③ 平成 28 年度まちの相談室の記録
 - ④ ひょうご神戸プラットフォーム協議会(6/6)

- ⑤ 平成 27 年度 COC+事業
- ⑥ 2016 スポーツのまち尼崎フェスティバル

第4回

日時：平成 28 年 7 月 14 日

場所：第一会議室

議題：

- (1) 経験値評価システムについて
- (2) つながりプロジェクト(2/11)発表会案について
- (3) 地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）の評価の実施について
- (4) 提案型事業委託について
- (5) 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）子育て・高齢化対策領域について
- (6) 人間看護学科の地域貢献方策案について
- (7) その他報告
 - ① まちの相談室の記録
 - ② ボランティア情報
 - ③ つな Girl の活動
 - ④ コソシアムひょうご神戸第 2 回学生交流委員会報告
 - ⑤ 大学 COC+シンポジウム（7/16）
 - ⑥ 2016 地域志向教育研究採択 11 採択/12 申請
 - ⑦ 大学生による地域連携推進支援事業（つながり交流祭）
 - ⑧ 市主催：みんなの尼崎大学（学びのフォーラム）協力
 - ⑨ CBL 研究会（8/8）
 - ⑩ まちづくり解剖学（7/14、8/4）

第5回

日時：平成 28 年 8 月 4 日

場所：第一会議室

議題：

- (1) 文部科学省 H28 年度大学 COC 事業報告調査について
- (2) 経験値評価システムについて(含アセスメント実施)
- (1) 提案型事業委託について（経済活性化対策課）
- (2) 人間看護学科の地域貢献方策案について

- (3) 平成 29 年度地域志向科目について
- (4) 報告
 - ① まちの相談室報告、ボランティア情報
 - ② 学生の活動報告等、つな Girl 活動報告
 - ③ 提案型事業委託（市災害対策課）
 - ④ つながりプロジェクト教員情報交換会
 - ⑤ COC+歴史と文化領域シンポジウム報告(本学・神大)
 - ⑥ COC+子育て・高齢化対策領域報告(本学・神大・市看)
 - ⑦ CBL 研究会
 - ⑧ Newsletter
 - ⑨ まちづくり解剖学
- (5) その他
 - 尼崎市企画財政局 阿部氏より市政について

第6回

日時：平成 28 年 9 月 1 日

場所：第二会議室

議題：

- (1) 経験値評価システム経過について
- (2) 教育課程編成のための地方自治体からの意見（人間看護学科、幼児教育学科）について
- (3) 職業実践力育成プログラム（BP）認定制度について
- (4) 平成 29 年度地域志向科目（つながりプロジェクト）について
- (5) 地域志向教育研究実施状況調査について
- (6) 3 大学合同報告会「プラットフォーム」について
- (7) みんなの尼崎大学キックオフシンポジウムについて
- (8) 報告・その他
 - ①まちの相談室報告、ボランティア情報、
 - ②学生の活動報告等、つな Girl 活動報告
 - ③CBL 研究会（9/9）
 - ④総合健康学科の活動（江寄ゼミ）
 - ⑤人間看護学科の活動（宮田ゼミ）
 - ⑥大学生による地域連携活動（坂元ゼミ）
 - ⑦食物栄養学科の活動
 - ⑧短大生活文化学科の活動（Super Sweets 2016）

- ⑨ 「立花(りっぱな)子育て広げようサミット」
- ⑩ 地域連携関係 10月～3月予定
- ⑪ 尼崎商工会議所 「合同企業説明会」、「就活だ！GO! In Amagasaki」

第7回

日時：平成 28 年 10 月 13 日

場所：第二会議室

議題：

- (1) 地(知)の拠点整備事業(大学COC)平成28年度評価 面接評価について
- (2) みんなの尼崎大学について
- (3) つながりプロジェクトについて
- (4) 平成 28 年度神戸大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学3大学合同報告会「プラットフォーム」について
- (5) 『経験値教育と地域創生～園田学園女子大学の挑戦～』(仮題)について
- (6) 報告・その他
 - ① まちの相談室報告、ボランティア情報
 - ② 学生の活動報告等(サイネージ掲載)
 - ③ 大学コンソーシアムひょうご神戸 学生交流委員会
 - ④ アセスメント(大学生)
 - ⑤ 私立大学情報教育協会
 - ⑥ 運動DVD新聞発表
 - ⑦ 万葉の里石見神楽祭(10/1実施)
 - ⑧ 市制100周年記念式典
 - ⑨ NEWSLETTER 9月号
 - ⑩ まちづくり解剖学(11月)
 - ⑪ キッズフェスティバル、つながるパラダイス、いい笑顔イベント
 - ⑫ 社会福祉協議会からの連絡

第8回

日時：平成 28 年 11 月 17 日

場所：第二会議室

議題：

- (1) つながりプロジェクトについて
- (2) 短大アセスメント実施について

- (3) 地域志向教育研究報告会
- (4) 各種アンケートについて
- (5) 政策提言発表会について
- (6) 報告・その他
 - ① まちの相談室報告、ボランティア情報
 - ② 学生の活動報告等、つな Girl 活動報告
 - ③ 地(知)の拠点大学により地方創生推進事業 H28 年度評価現地調査(必要なし)の回答
 - ④ 『経験値教育と地域創生—園田学園女子大学の挑戦—』(仮題)出版(案)
 - ⑤ みんなの尼崎大学はじまるの会!
 - ⑥ 阪神つながり交流祭 2016
 - ⑦ 『尼崎市史』を読む会特別企画—講演とシンポジウム
 - ⑧ キッズフェスティバル 2016
 - ⑨ NEWSLETTER 10月号
 - ⑩ 2016 年度 下半期イベント一覧
 - ⑪ 地域志向に係る学生の取組当の紹介(依頼)

第9回

日時：平成 28 年 12 月 8 日

場所：第二会議室

議題：

- (1) 平成 29 年度事業計画、予算申請について
- (2) つながりプロジェクトについて
- (3) 地域志向教育研究について
- (4) 政策提言発表会について
- (5) 日本財団学生ボランティアセンターとの覚書締結について
- (6) 平成 28 年度大学等との連携による地域創生拠点形成支援事業(地域創生拠点形成支援)の公募について
- (7) 報告・その他
 - ① まちの相談室報告、ボランティア情報
 - ② 学生の活動報告等、
 - ③ みんなの尼崎大学はじまるの会!
 - ④ NEWSLETTER 10,12月号
 - ⑤ まちづくり解剖学 1/12
 - ⑥ ママカフェ クリスマス 12/22

- ⑦ 2016 年度 下半期イベント一覧
- ⑧ 地域志向に係る学生の取組当の紹介（依頼）

第10回

日時：平成 29 年 1 月 19 日

場所：第二会議室

議題：

- (9) COC+シンポジウムについて
- (10) 平成 28 年度つながりプロジェクトについて
- (11) 平成 29 年度つながりプロジェクトについて
- (12) 政策提言発表会について
- (13) 平成 28 年度年報について
- (14) 平成 28 年度大学等との連携による地域創生拠点形成支援事業
- (15) 報告・その他
- ①まちの相談室報告、ボランティア情報、
- ②学生の活動報告等、
- ③まちづくり解剖学 3 月 17 日 -防災・減災-
- ④園田北子ども防災フェスティバル
- ⑤アセスメント実施
 - ⑥地（知）の拠点整備事業 アンケート
 - ⑦経験値評価システム
 - ⑧お願い（再度）
 - ⑨まちづくり解剖学番外編（2 月）
 - ⑩Newsletter 13 号
 - ⑪生活の知恵再発見<食生活編>
 - ⑫1 月～3 月予定
 - ⑬尼崎市社会福祉協議会からの連絡

第11回

日時：平成 29 年 2 月 16 日

場所：第二会議室

議題：

- (1) 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業 中間評価について
- (2) 地域志向教育研究報告会について
- (3) 平成 29 年度つながりプロジェクトについて
- (4) 経験値評価システムについて
- (5) CBL 研究会について
- (6) 報告・その他

- ①まちの相談室報告、ボランティア情報、
- ②学生の活動報告等、
- ③平成 28 年度つながりプロジェクト発表会
- ④短大アセスメント結果
- ⑤COC+シンポジウム（1/27）
- ⑥COC+子育て高齢化対策大学間会議（2/1）
- ⑦平成 28 年度大学等との連携による地域創生拠点形成支援事業
- ⑧コンソーシアムひょうご神戸学生交流委員会
- ⑨立花地区子育てサークル交流会（2/8）
- ⑩「そうだ!尼崎発の運動をしよう!」の講座（2/15）
- ⑪生活の知恵再発見<食生活編>（2/4）
- ⑫政策提言発表会（2/17）
- ⑬まちづくり解剖学番外編（2/25、3/10）
- ⑭Newsletter 14 号
- ⑮外部評価委員会（3/29）
- ⑯平成 29 年度予定
- ⑰事務所移転

第12回

日時：平成 29 年 3 月 23 日

場所：第二会議室

地域志向教育研究報告会について

- (1) 平成 29 年度地（知）の拠点整備事業について
- (2) 平成 29 年度つながりプロジェクトについて
- (3) 報告・その他
 - ①まちの相談室報告、ボランティア情報、
 - ②学生の活動報告等、
 - ③平成 28 年度 COC/COC+全国シンポジウム
 - ④コンソーシアムひょうご神戸「第 6 回 学生交流委員会」（3/14）
 - ⑤CBL 研究会（3/17）
 - ⑥ひょうご地域創生ネットワーク会議
 - ⑦教育課程編成のための地域からの意見交換会議
 - ⑧兵庫県阪神南県民センター報告会（3/24）
 - ⑨外部評価委員会（3/29）
 - ⑩平成 29 年度予定
 - ⑪そのだ子育てステーションびよびよ情報拡散

日時：平成 29 年 3 月 29 日（水）10：00～11：30
場所：園田学園女子大学 1 号館 2 階 第 1 会議室
議題：

- 1) 地域連携推進機構長挨拶
- 2) 平成 28 年度事業報告
- 3) 平成 28 年度事業報告決算見込み
- 4) 平成 29 年度事業計画・予算
- 5) 平成 28 年 COC プラス事業報告
- 6) 平成 29 年度 COC プラス事業計画（案）
- 7) その他

出席者：

【学外評価委員】

片寄 俊秀 大阪人間科学大学教授
近藤 正昭 尼崎工業会専務理事
高谷 浩司 尼崎 PTA 連合会会長
濱田 英世 NPO 法人「やんちゃんこ」代表
藤井 克祐 尼崎経営者協会専務理事
藤原 啓二 前原会計事務所

【園田学園女子大学】

川島 明子 地域連携推進機構長
大江 篤 地域連携推進機構副機構長
榎本 匡晃 地域連携推進機構事務局課長
久留島 元 地域連携推進機構 TA

(計) 10 名

1) 地域連携推進機構長挨拶

【川島機構長】

平成 25 年度から着手しました『地（知）の拠点整備事業』は現在、平成 27 年度から、『地（知）の拠点大学』による地方創生事業に発展し、本学の取り組みも 29 年度で 5 年目、最終段階に入りました。今年度は 2 年生全員、学部学科 350 名の学生が、「つながりプロジェクト」に挑戦し、2 月 11 日に発表会をいたしました。大変でしたが、徐々に、社会の要望をうけ進展していると確信をいたしました。

また平成 25 年度、26 年度の『地（知）の拠点整備事業』中間報告が、本学は本事業の目的を十分に達成しているということで S 評価をいただきました。

これを最終的に、高い評価で終わるようにしたいと思っております。今日は厳しいご意見をいただき、締めくくりの原動力にしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

2) 平成 28 年度事業報告

【大江副機構長】

①平成 28 年度評価について

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業委員会」による評価が、「計画を超えた取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を十分に達成することが期待できる」として S 評価をいただいた。これは全国 76 件のうち 7 件、9.2%の数値。最終的な平成 31 年度に評価で S から落ちないことが、残り 1 年間で、課せられている。

②研究について

子育て支援、高齢化の健康づくり、生涯学習、学校教育の 4 分野で、11 のプロジェクトを採択。今年度新たに難波先生、木田先生、深津先生のプロジェクトが加わった。

まちづくり解剖学は定例 5 回に加え、特別編、番外編を行った。

③社会貢献

つな Girl（学生地域連携推進委員会）、メンバー 14 名。定例会議を行うとともに、地域の方の要望をうける「まちの相談室」を開室。学生主体の企画も行っている。

阪神南県民センター事業による「つながり交流祭」を本学で開催、看護学科坂元ゼミ、児童教育学科大江ゼミが参加した。

④教育について

2 年生全員 350 名が「つながりプロジェクト」21 のプロジェクトに分かれて地域活動を行った。2 月 11 日に最終報告会を開催。その経過を Newsletter として毎月発信した。

1 年生の「大学の社会貢献」では半期で「やんちゃんこ」様とともにまちの寺子屋に参加。

アセスメント評価について、127 の質問に対し 5 段階で答える形式によりコミュニケーション力、主体性と気づく力、共同する力、考える力の 5 つの指標によって評価している。

【以下質疑応答】

【前原委員】 S 評価であっても補助金は5年間で打ち切られることになる。継続できるか、また S 評価ということが入学者数などに反映しているか。

【大江副機構長】 大学のミッションとして地域に根ざしているということが高校生に発信できていない。S 評価についても、記者発表はしたがなかなか記事にしてもらえない。次年度の大きな課題。補助金のなくなる30年度以降にどのような運用をすれば負担の少ない形で同じ効果をあげられるか、考えていきたい。

【近藤委員】 少子化のなかで大学のブランド力をどうやって向上させるかが課題。地域で活躍する人材の発掘、社会へ貢献などが、すべてこの授業に詰まっている。うまく PR して行ってほしい。

【片寄委員】 全国の私学でトップの評価はすごい。これをどう定着させていくかが課題になる。担当する先生方の負担が心配である。

【大江副機構長】 2年生全員の必修で地域活動を行ったことが高評価になった。どう継続させていくかが課題。すでにスケジュール管理、授業運営に関して負担が大きく、補助金で TA を 6 人雇って支えている。

【濱田委員】 遠いところから参加した学生が、大学の地域活動を通じて自分たちの土地を見直すきっかけになったという声を聞く。必修だから仕方なくという面と、きっかけが作られる面がある。

3) 平成 28 年度事業報告決算見込み

【榎本課長】 平成 28 年度予算は 14,088,000 円、うち地域志向教育研究費は 5,000,000 円、人件費として 6,582,000 円、物品費等運営経費として 2,506,000 円のところ 14,115,819 円の支出があった。その内訳は地域志向教育研究費は、3,748,330 円、人件費は 7,389,893 円、物品運営費等として 2,977,596 円となった。

4) 平成 29 年度事業計画・予算

【大江副機構長】

まちづくり解剖学の定期開催、5 回。

「つながりプロジェクト」 2 1 プロジェクトに再履修者クラスを加え、2 2 のプロジェクトが始動。

最終発表会を平成 30 年 1 月 20 日の午後に予定。

29 年度最終報告会を平成 30 年 2 月 10 日に予定。地域志向教育研究の最終報告、COC 事業の最終報告を兼ねる。

昨年から施行している経験値評価システムにより学生の地域活動を把握。地域の方からのコメントについては、5 つの指標でそれぞれ 5 段階評価を行ってもらう。

平成 29 年度予算は 13,954,000 円を予定しており、その内訳として地域志向教育研究費は 5,000,000 円、人件費が 6,841,000 円、物品運営費等が 2,113,000 円としている。

5) 平成 28 年 COC プラス事業報告

【大江副機構長】

平成 27 年度からの五カ年、31 年度まで。神戸大学が主幹となる「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」に参加。歴史と文化、子育て・高齢化対策分野での取り組み。

7 月 16 日に尼崎商工会議所にて「地域歴史遺産としての怪異伝承」シンポジウムを開催。

10 月 15 日に神戸大学、神戸市看護大学との共催により「子育て・高齢化対策」分野のシンポジウムを開催。

6) 平成 29 年度 COC プラス事業計画 (案)

【大江副機構長】

7 月 22 日、歴史と文化分野でのシンポジウムを開催。災害復興をテーマとする。

10 月、3 大学プラットフォームでの共同シンポジウムを開催。

神戸新聞出版文化センターより、COC+ の五分野からそれぞれ教科書を刊行。歴史と文化で大江、子育て・高齢化対策で野呂千鶴子先生、宮田さおり先生が原稿を担当することになる。

COC+ では県内就職率の向上を目指している。

7) その他

【大江副機構長】

兵庫県の地域振興課の大学等との連携による地域地方創生拠点支援事業、拠点整備事業として、香美町サテライトスタジオの開設を行う。

(地域連携推進機構 榎本匡晃)



MUSUBU 地(知)の拠点
100

大学COC+シンポジウム
**地域歴史遺産としての怪異伝承
 ～『尼崎百物語』を起点に～**

2016
7/16(土) 入場無料
尼崎商工会議所 701会議室
開場 13:00 開会 13:30

地域歴史遺産は、人口の流動化や高齢化、生活様式の急激な変化により、その継承が危機的である。これらの伝承には、暮らしのなかで語り伝えられたものであり、生活の原感覚やめわれた土地の記憶が刻まれている。地域創生が叫ばれる現代こそ怪異伝承を掘り起こし、地域歴史遺産として再認識する必要がある。

本シンポジウムは、『尼崎百物語』を起点とし、怪異伝承や民俗文化の活用についての研究の最前線の研究者を招聘し、「地域歴史遺産としての怪異伝承」を探究する意義を考える。

主催 園田学園女子大学
 共催 ひょうご神戸プラットフォーム協議会
 後援 尼崎市、尼崎市教育委員会、尼崎市福祉協議会、尼崎商工会議所

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 COC+「子育て高齢化対策」領域シンポジウム
平成28年度
神戸大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学
3大学合同報告会「プラットフォーム」

平成28年10月15日(土) 参加無料/定員140席
開場 13:00 開会 13:30
園田学園女子大学 3号館2階 321教室



会場
 〒661-8520 兵庫県尼崎市南塚口町7-29-1
 ・阪急「塚口駅」南出口より徒歩10分
 ・阪急「塚口駅」からバス「園田学園女子大学下車」徒歩1分
 ・阪神「尼崎駅」からバス「南塚口町1丁目下車」徒歩1分
 ・JR「立花駅」からバス「園田学園女子大学下車」徒歩1分

目的
 兵庫県は少子高齢化に伴う人口減少が加速しており、地域での子育て支援や高齢化対策は急務である。兵庫県内で医療福祉専門職養成課程を有する3大学が連携し、これまで各大学が培ってきた地域社会形成のための教育研究の成果・知見を持ち寄り、情報共有を図る。

第1部 シンポジウム「みんなで作る少子高齢化社会」
 神戸大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学より、それぞれの大学での取り組みを踏まえながら少子高齢化社会の現状や子育て支援・高齢化対策の実践について解説する。
 議題：
 ① 「少子化と子育て支援」
 ② 「高齢化と地域コミュニティ」
 ③ 「地域資源としてのひと・もの・こと」記憶とまちづくり

第2部 ポスター掲示・情報交換会
 各大学の活動をポスター掲示し、参加者が情報交換を行う。

第3部 学生の部「各大学における地域での取り組みと成果報告」
 各大学の学生が、地域での活動や取り組みの紹介、活動から得たことについて報告する。

地方創生に関する文部科学省の公募事業で、兵庫県では「地方創生に貢献する実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業が採択されました。
 事業協働機関が一体となって地域の課題解決に取り組めます。
 事業協働機関(ひょうご神戸プラットフォーム協議会)
 神戸大学・兵庫県立大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学
 兵庫県・神戸市・神戸商工会議所・兵庫県経営者協会・兵庫工業会・神戸新聞社

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 COC+とは？

MUSUBU

主催：神戸大学医学部保健学科・地域連携センター、神戸市看護大学、園田学園女子大学
 共催：ひょうご神戸プラットフォーム協議会
 後援：尼崎市、尼崎市教育委員会、尼崎市福祉協議会、尼崎商工会議所

地(知)の拠点

第三回 元気な尼っこ大集合!

★つなgirl〜る作戦Part3★

キッズフェスティバル

10/22(土)

会場 ◆ 園田学園女子大学

受付時間 ◆ 10:00~15:00

イベント時間 ◆ 11:00~16:00

さんわ

三和プラモ工房

好きなプラモを作ろう!
ひとり300円だよ!

やんちゃんこ

- ★ゲームコーナー: おもちゃつり(1回100円)
- ★工作コーナー: 手作りおもちゃ(1回100円)
- ★おはなしtime: パネルシアター
エプロンシアター

るるるんパルーン

風船で動物や剣、お花を作ろう!
(※300本限定、なくなり次第終了)

せいかつぶんかのか
生活文化学科

かんたん トントンステンシル

好きな型紙を選んで、
カバンなどに筆で模様を写そう!
(※服を汚さないように汚れてもいい服で来てね!)

プレゼントも
あるよ!
※200個限定



グッズは全部で1100円!!
ブース情報はFacebookで
チェックしてみてね!

Facebook: つなgirl

園田学園女子大学
園田学園女子大学短期大学部

SONODA
Sonoda University / Sonoda Junior College

地(知)の拠点



つなGirl Facebook
キッズフェスティバルに関する
情報も更新する予定です!

みんなの園田大学は、園田の「学びの場」が溢れる魅力的なアラブアフォーラム。

みんなが先生 みんなが生徒 みんなが仲間。どこでも教育をスクリーンでサポートし、知識をもちこましく学びあえる。みんなが先生 みんなが生徒 みんなが仲間。どこでも教育をスクリーンでサポートし、知識をもちこましく学びあえる。みんなが先生 みんなが生徒 みんなが仲間。どこでも教育をスクリーンでサポートし、知識をもちこましく学びあえる。

みんなの園田大学キックオフフォーラム

みんなの 園田大学 はじまる の会!



両日ともに参加無料
どちらかの日のみの参加もできます。

平成28年
11月26日(土)

まちと学びのイイ関係〜園田市内外の事例をもとに〜
園田学園女子大学 尼崎市 南塚口町7-29-1 13:00~17:00
尼崎市 南塚口町7-29-1

平成28年
11月27日(日)

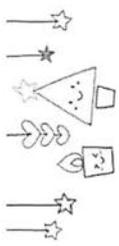
みんなの園田大学の考察とこれから
園田学園女子大学 尼崎市 南塚口町7-29-1 09:30~12:15
園田学園女子大学 尼崎市 南塚口町7-29-1

主催/園田学園女子大学
共催/園田学園女子大学
MUTSU

中心・問合せ
園田学園女子大学
TEL 06-6489-6153
FAX 06-6489-6173
Email ama-kyoudai@city.amegasaki.hyogo.jp



親子で！楽しく！リラックス！ ママカフェ クリスマス



園田学園女子大学
つながりプロジェクト・地域子育て支援

園田学園女子大学では、地域との“つながり”を築くことを目的とした「つながりプロジェクト」を実施しています。
子育て支援について学びを深めてきた私たちは、8月に、子育てをしているお母さん方にインタビューさせていただきました。
その結果の発表会も兼ねた「クリスマス会」を行います！

日時：2016年12月22日(木)

10:00～12:00

場所：園田学園女子大学 3号館1階
「ラーニングコモンズワークショップエリア」

内容：親子で楽しくからだを動かす遊び
親同士でリラックスして交流
子育てに関する情報の紹介など

* 授乳スペースやオムツ交換スペース、調乳用のお湯や水、毛布などをご用意しています。
* お菓子や飲み物も準備しています。

子どもさんやお友達のご参加をお待ちしております！



お問い合わせ
園田学園女子大学・つながりプロジェクト
地域子育て支援 担当 影浦 紀子
〒661-8520
福井県福井市坂口町7丁目29-1
E-mail: rkasagura@sonoda-u.ac.jp
Tel: 06-6429-9175
連絡がつかない場合は
地域連携推進課まで Tel: 06-6429-9921

《地(知)の拠点～地域志向教育研究～

生活の知恵再発見

＜食生活編＞



地域の特産品を生かした調理実習(田能の里芋他)

日時：2017年2月4日(土)

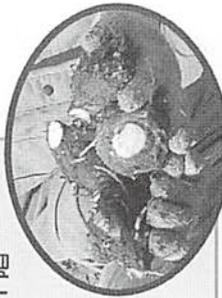
時間：10:30～13:30

場所：園田学園女子大学 1号館1階
116調理科学実習室

募集人数：30名(先着順)

持ち物：・エプロン
・帽子(三角巾)
・筆記用具

受講料：無料



園田学園女子大学短期大学部生活文化学科
教授 川原崎 淑子

園田学園女子大学人間健康学部食物栄養学科
教授 深津 智恵美



お申し込みフォーム
2/3 (1/6部) まで

<http://www.sonoda-u.ac.jp/chiki/zmail/>

園田学園女子大学
園田学園女子大学短期大学部
地域連携推進機構

平成28年度 地域志向教育研究報告会

本学は文部科学省「地(知)の拠点整備事業」の採択を受け、尼崎市における4つの地域課題、『健康づくり』『学校教育』『生涯学習』子ども・子育て支援』の解決に向けた「地域志向教育研究」に取り組んでいます。これを進めるにあたって、尼崎市、尼崎商工会議所や尼崎市社会福祉協議会など多くの組織との連携により、成果が表れています。その成果を皆様にご紹介させていただきたくしますので、是非ともご参加ください。また、ご案内申し上げます。



日時：平成29年3月4日(土)
12:30~17:00
場所：園田学園女子大学
3号館2階 321教室(AVホール)



お申込みは
地域連携推進機構
ホームページより
(申込受付3月1日まで)
<http://www.sonoda-u.ac.jp/chiki/>

【プログラム】

開会 12:30(受付12:00~)

- ①講演1「学部横断的な地域志向教育」
中野洋平講師 鳥根大学地域未来戦略センターCOC事業部門長
- ②講演2「地域志向教育における社会的コンピテンシーの育成」
星野敦子教授 十文字学園女子大学地域連携推進機構副機構長
- ③地域志向教育研究の成果発表
発表項目は裏面

閉会 17:00



参加
無料

お問い合わせは下記まで
園田学園女子大学
園田学園女子大学短期大学部
地域連携推進機構
TEL: 06-6429-9921 FAX: 06-6422-8523
Mail: chiikirenkei@sonoda-u.ac.jp

つながり プロジェクト 2016 発表会

2/11(sat)
9:00~17:30
園田学園女子大学
1号館4F 大講義室

地域連携推進機構年報 第4号

2017年3月発行

園田学園女子大学地域連携推進機構

<http://www.sonoda-u.ac.jp/chiiki/>

〒661-8520 兵庫県尼崎市南塚口町7丁目29-1

Tel 06-6429-9921

Fax 06-6422-8523

M L chiikirenkei@sonoda-u.ac.jp